

深紅の瞳の魔法戦士

アキラ1

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅魔の里に突然やって来た族長の甥。

ユウヤと名乗る少年は、外の者との混血だった。

剣の腕に異常な才能を発揮した彼は、短期で里の魔法学校を卒業し、旅立つ。

遅れて卒業した従姉妹のゆんゆん、そしていつしかユウヤに惹かれていためぐみんも、冒険者になるべく里を出る。

彼と彼女は再び出会う。駆け出しの街で。

原作キャラは、名前が出ればいいほうです。

まるきりオリジナルの、自己満足のストーリーになります。

目次

レッドプリズンの魔法戦士

第1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

設定1

アクセルの魔法戦士

1 5 10 15 18 23 26 32 37 48

10話

1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

0話

1話

2話

54 63 68 76 80 89 97 103 112 126 135 141 151

30話	兵乱の魔法戦士	224
設定2		217
29話		209
28話		198
27話		191
26話		184
25話		173
24話		165
23話		159

レッドプリズンの魔法戦士

第1話

我名はめぐみん。

紅魔族随一にして、やがて魔王を倒す者。

今日私が通う魔法学校に転入生がやって来た。

男子だったので、私の所属する女子クラスでは顔をあわせる機会はないはずなのだ
が、何故かわざわざ男子女子合同で転入生の挨拶にたちあつた。

「我が名はユウヤ。紅魔族族長の妹を母に持つ者にして、随一の魔法戦士になる者。
勇者の名に背を向け、英雄を目指す者。」

同年代にしては、長身の少年の名乗りに集まっていた私たちは圧倒されていたが、違
和感も感じていた。彼の髪が、銀髪なのだ。

なるほど、瞳は紅魔族の純血らしく真紅に輝いているが、黒であるべき髪がああなっ
ているということは……

後天的要因か？はたまた他種族との混血か？

「ゆんゆん、あなたには従兄弟がいたのですか？」

隣でぼけつと突っ立っている同級生に問いかけると、はつとした顔をしてこちらを見た。

「知らない。おぼさんは何年も前に田舎で死んじゃって、私はお葬式にも行っていないし。」

その日一日中、私もゆんゆんも浮わつていて、

なんとなく授業が終わった後は、二人で下校したのだが、目の前を件の転入生が歩いていったのだ。

「でもあの男の顔は、髪の色こそ違うけど貴女に似ています。もっと言えば、族長に似ているのです。」

そんなやりとりを私たちがしているうちにゆんゆんの家の前まで来ていた。

「ねえ、めぐみん。ちよつと一緒に来てよ。」

私たち二人はリビングに真っ直ぐ入って行ったが、そこでは族長と彼が話し込んでいた。

「おお、ゆんゆんと……ひよいぎぶろうのこのめぐみんか……。」

ちようどよい。外から来たユウヤは、冒険者カードがないから、お前たちが登録に付き添ってやりなさい。」

言われて荷物をおいた私たちは、今度は三人になって登録所に向かった。

「ここ、紅魔の里では、冒険者カードは、皆が所持しているので、新規の作成手続きは、珍しいのだ。」

「お姉さん、手っ取り早くお願いします。」

私は、受付のお姉さんを急がせて駆け足で機械を操作させた。

「うーん。知力は、紅魔族としては、普通かな？」

魔力はめぐみん並みにあるね。

生命力と幸運値は、平均よりは上って感じかな。

目立つのが筋力と敏捷値、これは、かなりのものだよ。やばいくらいだね。」

「アークウイザードになれますか？」

「ゆんゆん、あんたの従兄弟は、職業よりどりみどりだよ。アークウイザードはもちろん、ソードマスターやアークブリーストもいけるし、変わり種はアサシンやルーンナイトにもなれるよ。」

私は、職業欄の下の方を見ていた。

おねえさんが解説した他にも可能な職業があり、一番下にぼつんと一つの職業が記さ
れていた。

「俺は、この究極戦士で頼むよ。」

「そう？ルーンナイトの下にあるから、上位版だと思っただけど。」

こうして、突然やって来たゆんゆんの従兄弟は究極戦士という変わった職に就いた。

2話

「ちよつと待つてください。」

冒険者カードを無造作に仕舞つて出ていこうとする少年を私は呼び止めた。

「どうしたのよ、めぐみん。ユウヤに何か？」

「ユウヤと言いましたね。私は、あなたに質問があります。」

横でうるさいゆんゆんを無視してこの新参者の顔を睨み付けていると、感情の窺えないこいつは、なんと私を横抱きにして大股に歩き出した。

「なにをしているのですか？早くおろしなさい。」

やめろ〜」

「ユウヤがめぐみんを抱っこしてる、うん？めぐみんがユウヤにしがみついているのかな？あれ？どつちだっけ？」

「おかしなことを口走るのはやめなさいゆんゆん。あなたの従兄弟は変態ですか？」

「俺に聞きたいことがあるんだろう？」

「ここでカードを操作する気はないし、公衆の場で秘密の話をする気もない。」

じたばた暴れる私を苦もなく抱えて、傍若無人男はゆんゆんを従えて族長の屋敷に

戻ってきた。そのまま、ずんずんと奥に入ってゆく。

入り口はゆんゆんが開け、中にいる使用人達も圧倒されてただ頭を下げるだけである。

まるで、このユウヤと言う男がここの主人のように振る舞っている。

「それでなにを聞きたいんだ？」

「そうじゃないでしょう！何故、あなたと私が一緒にソファアに座っているのですか？」
今、私とゆんゆん、この男と、ついでに族長がリビングにいるのだが、族長とゆんゆんが一つのソファアに座り、このユウヤが私を後ろから抱えたまま、一緒に座っているのだ。

「めぐみんが、いつもと違うわ。顔真っ赤よ。」

「ゆんゆんうるさいですよ！」

怒鳴り付けてみたが、自分でも耳まで熱くなっているのがわかる。目の前に族長がいるし、ここで暴れるわけにもいかない。なんとか脱出しようとしたが、私を抱える腕はびくともしない。

私の動揺を気かけず、テーブルに先程作成した冒険者カードを置いて確認しだした。

「俺の名はユウヤだ。よろしくな、めぐみん。」

「我が名はめぐみん！紅魔の里随一の魔法学校レッドプリズンの首席にして、やがて最強の魔法使いになるもの！」

「おお！立派な名乗りだね。ゆんゆんも見習いなさい。」

「ユウヤに抱えられたままじゃ、格好つかないわよ。」

ゆんゆんが生意気なことを言っているがこのさい無視だ。この男……いや、ユウヤがいじっているカードに注目してみる。年齢が14で、レベルが12になっている……。

「スキルポイントが75もあるよ！それに悪魔特攻と全状態異常無効って最初からスキルが付いているんだけど？」

「ユウヤは、この紅魔の里まで歩いて来た様だよ。」

「遠目にオークを見た時は、悲惨だった。あの時は、全力疾走しながらほとんど諦めていた。」

「それで髪がその色に変わったとでもいうのですか？」

「まさかな……。これは、父親ゆずりだよ。瞳は母親からだ。この目と手紙がなければ、門前払いだったろうさ。」

私達と会話をしながら冒険者カードを操作し、彼は、奇襲スキル・ウエポンマスター

スキルそれに物理と魔法両方の耐性スキルを獲得していた。

それぞれ、奇襲スキルが2ポイント・ウエポンマスタースキルが3ポイント・物理魔法両方の耐性スキルが5ポイントだ。

10ポイント消費で残り65ポイントだ。

いつものごとく夕飯をごちそうになった私は、泊まっていくようにとのすすめを断り、帰宅の途についていた。

「何故、あなたがついて来ているのですか？」

「めぐみんの家まで送って行くよ。」

「……………あなたが年上だったとはね。今あるポイントでも上級魔法をおぼえられるでしょう?」

「よせやい。一日しか通わないで、卒業した気にならないさ。聞きたいのはそれじゃないだろう?」

「あなたの父親は?」

「俺がものごころつく前には、いなかったな。魔王軍幹部と闘って殺されたとき。」

話している内に家に着いた。なぜか父のひよいぎぶろうと母のゆいゆい、おまけに妹のこめつこまで玄関前に立っていた。

「族長の家で世話になってるユウヤです。めぐみんを送ってきました。」
挨拶をして背を向けた彼に無言だった父が凄む。

「娘はやらんぞ！」

頭を下げて帰って行ったユウヤを見送ってから、家の中に入る。

3話

朝になった。昨日はあまり眠れなかった。

居間にいつてみると、食卓に肉が出ていた。

貧しい我が家では、何年ぶりなことだろう。

「姉ちゃん、お肉だよ、お肉！」

「こめっこ、どういうことですか？」

困惑している私に、母のゆいゆいが答えてくる。

「あなたがまだ寝てるときにね、昨日のユウヤ君が訪ねてきて、一撃熊を置いて行ってくれたのよ。」

それに、こめっこにつて、一撃ウサギもね。」

熊の肉は臭みがあるはずだが、高レベルのモンスターの肉は結構な経験値も入るはずだ。なにより、目の前の肉を食べないという選択肢はない。

私は、父、ひよいざぶろうを押し退け、朝一番の戦線に参戦した。

登校時、挙動不審なぼっち娘が前方にいたので話し掛けてみた。

「おはようございます、ゆんゆん。今日も朝から、ぼつちをこじらせてるのですか？」
「ぼつちじゃないわよ！」

「でも、あいかわらずサボテンに話しかけてるのでしょう？」

「それを言っちゃだめえ！」

「それはそうと、あの転入生は一緒じゃないんですか？」

「なんか、ぎりぎりまで剣の素振りしてたよ。」

スキル取っただけじゃなく、稽古しないと役に立たないって言ってた。」

私の質問に答えた後、なにかに気づいたとばかりに、ゆんゆんが意地の悪い顔をした。

「ふうん、めぐみんは、ユウヤのことが気になるのね？彼つてば、背が高いし格好いいもんね〜」

「何を言うのですか？このぼつちが！」

「ふふーんだ。いまのめぐみんなら、ぜんぜんこわくないんだからね〜」

私は駆け出したゆんゆんを追いかけて、鬼ごっこは女子クラスの教室まで続いた。

昼休みになった。私と目があったゆんゆんは、自分の弁当をとられまいと警戒しているがそれを無視して机から包みを出す。

「めぐみん、それお弁当?」

「どこかの転校生が我が家に獲物を買いでくれたので、母が調理してくれたのです。」

「へへ。ユウヤつてば、朝早く出掛けてそんなことしてたのか。そうだね、彼にお礼を言つて一緒にお昼しようよ。」

そう言うゆんゆんは、抵抗する私を強引に男子クラスまで引きずっていった。

おかしい。なぜぼっちのゆんゆんがこんなに強気なのだろうか? どうして私はこの手をふりほじけないのか? ぼんやりしてたら、目的地は、すぐだった。

「ユウヤ、私とめぐみんと一緒にお弁当食べましょう。めぐみんもお待ちかねよ。」
「ああ、ゆんゆんか。めぐみんも昨日ぶりだな。」

気のきいた挨拶でもしようとしたが、声が出てこない。顔を赤くした私は、うつむいてしまった。

「できれば、私も参加させてくれないかな?」

声に振り向けば、胸部装甲はゆんゆん以上のもを装備するあるえがいた。

「我名はあるえ。紅魔族随一の発育にして作家を目指すもの!」

「ユウヤだ。よろしく。」

「待つてほしい、君も自己紹介の時のように華麗な名乗りを!」

「そもそも、学校の皆の前で名乗りをしたのは、いつぺんにすむからだ。」

あれから私達四人はこの大きな木の下に移動したのだが、食べ始める前があるえがポーズをきめて名乗り上げたのに対してユウヤの反応は薄かった。

あるえは、彼の両親のこと、特に父親が魔王軍幹部と戦った話やこの里に来るまでの道中で出会ったモンスターとの顛末などをキラキラした眼差しで聞き入っていた。その中には、私の知らない話もあった。

「逆に俺から質問なんだが。」

「何でも聞いてほしい。」

「おまえはこの学校で成績がいいようだが、卒業しても里に残るのか？冒険者として外に出る気はないのか？」

「いや、私は作家志望だから……。」

興味が薄れたのか、あるえから視線をはずして食事を再開した彼に今朝がたの獲物を届けてくれたことに対するお礼を言った。

「弁当は、食材があるなら、自家製の方がいいだろう？それに……こめっこを見てたら、食べ物を持っていきかった。なんの解決にもならない、俺の自己満足だがな。」

「どうしたのめぐみんてばく真っ赤になってユウヤに見とれてるしく」

おかしい。余計なことを言うばつちを怒鳴り付けてやりたいのだが、言葉が出てこない。それどころか、頬が熱くて胸も苦しい。

「ゆんゆんは、ユウヤが来てからやけに積極的だね。自信がついたのはいいことだけど、逆にめぐみんの方がおかしくなったようだけど。」

昼休みが終了して先に校舎に向かったユウヤの背中を見ながら女子三人は、まだ会話をしていた。

「彼が外に出るなら、私が里に残ってるのは不利かな……………」

「なによあるえ、どういう意味よ。あなたは、作家になるんでしょう?」

「ゆんゆん、君も将来の族長だろう?」

「族長にふさわしくなるように修業に出るつもりよ。おあいにくさま。」

口論していたあるえとゆんゆん二人は、私を見て言い争いをやめた。

「めぐみんは、ユウヤに予約されてるようなものだしね。」

「そんなことはありません。最強の魔法使いになるためには、恋愛などに構っていられません。」

「そんな顔は赤くして言っても、ぜんぜん説得力有りません」

4話

下校時間になり、今日も私はゆんゆんと帰っている。

「そう言えば、午前中の授業で先生が大雨を降らせたのに、いきなりぴたとやんだよね？マジックキャンセルみたいな感じ？」

担任教師のプッチンが格好をつけて唱えた呪文

“コールオブサンダーストーム”で雷雨になり、校長が花壇に植えた花が流されたりしたがいきなりやんだのだ。まるで雨など降ってなかったように。

「それはそうとき、一緒に喫茶店によつていかない？前から友達と寄り道するの憧れていたんだ」

「あなた、ユウヤと出会つてからずいぶん積極的になりましたね。以前とはまるで別人ですよ？」

まあ、いいでしょう。おごりならつきあいます。」

「ねえ、めぐみん、恋ばなしない？」

席に座つてメニユーを頼んだら、いきなり何を言い出すのだろうこの娘は……

「どうしたのです？ゆんゆんも色気付いてきたのですか？」

「なによそれ。私とめぐみんは、ライバルだけど、すくなくとも友達だとは思ってるわ。」

「こう言う話題もたまにはいいんじゃない？」

「そうですね……わたしが好きなのは……」

「めぐみんは、ユウヤが好きなんでしょう？」

「ちがいますよ。私のタイプは、甲斐性があつて浮気もしない。日々努力を怠らず、常に上を目指している。そんな誠実な人です。」

「なんだ、それ、ユウヤのことじゃない。」

「どう考えても違うでしょう！」

「そうかな？自分の剣をかかえて森でモンスターを狩ってきて獲物はめぐみんの家にわざわざ届けてき、帰ってきたら登校時間になるまで素振りしてるんだよ？そして学校が終わったら、また剣の稽古してるとかさ、目指してるものっていうか、目的があると思う。ひたむきなところとか、めぐみんが言った条件に当てはまるんじゃないの？」

「あの男は、浮気性です！あるえなんかに気をとられて……」

「めぐみんてば、自分があまりかまってもらえないからやきもちなの？」

「ユウヤを好きなのはゆんゆんのほうなんじゃないのですか？」

ゆんゆんがしつこいから逆に問い質したのだが……。

「そうだね……。わたしは、ユウヤが好き。

お嫁さんになれたらいいなと思うけど……………」

ユウヤは、冒険者になって里を出るみたいだし……………」

私も冒険者になろうかな……………」

「ゆんゆんは、将来の族長ではないですか。

いいのですか？」

「テレポートを覚えていつでも戻ってこれるようにすれば大丈夫だよ。それにね、あるえだけじゃない。ねりまきだっていつのまにかユウヤと知り合って夢中みたいだし。」

「あの女たらしが。」

ねりまきも私たちの同級生だ。この里随一の酒屋の娘で、将来居酒屋の女将になるのが目標だったはず。容姿も私より背が高く、長い黒髪で男には魅力的に映るはずだ。性格だって悪くない。

……………。私も髪を伸ばそうかな。

「なにを考えているのか想像できるけど、ユウヤが自分からアプローチしてるのはめぐみさんだけなんだよ？心配なら彼が稽古してるところに行ってみよう。さあ、お土産のサンドイツチをこめっこちゃんにわたしたらすぐにいこう！」

5 話

「姉ちゃんおかえり！」

我が家に着いた私とゆんゆんを妹のこめっこが出迎えてくれた。けれど私のお下がりのマントの裾が泥だらけになっている。

新聞の勧誘を撃退してから遊びに行つたようだが……。

「こめっこ、あなたにはこの魔神にささげられし子羊肉のサンドイッチをあげましよう。」

「すごい。魔王になった気分！」

妹がどこからか連れ帰つてきた黒い子猫を抱えてまた私たちは、家を出た。

「ねえ、この子羽根が生えてるよ。」

ゆんゆんの言いように背中に小さな羽があるクロネコを抱いて歩いてみると、後ろから声がかかった。

「やあ、そこへ行くのはめぐみんと……族長の娘さんじゃないか？」

「はじめまして。ゆんゆんです。」

「誰かと思えば、ニートのブッコロリーじゃないですか。私たちは、ゆんゆんの従兄弟が

劍の稽古をしているとのことなので見物に行くところですよ。」

「あゝ。最近来た銀髪の子だね。あれは、かなり強いよね。」

「そんなことが分かるんですか？ただニートをしているんじゃないんですね。」

「よしてくれよ。ニートにだって人権はあるんだ。」

彼は多分今もソケットと訓練しては「ずき！」

「詳しいんですね。どうして分かったんですか？」

「僕は、ソケットのことなら何でも知ってるんだよ。銀髪君がこの里に来た日から毎日ソケットと訓練してるんだよ。ずっと見てたらソケットに追い払われてしまったよ。」

ゆんゆんも私も私もブッコロリーのストーカーぶりにドン引きしたが、気をとりなおして森の奥に向かった。

木刀同士の打ち合う音が聞こえて来たので近づいてみると、二人の男女が凄まじい速度で斬撃を交わしていた。

黒髪をなびかせているのは、この里随一の美人占い師と評判のソケットだ。めまぐるしくその体制を変え、上から下から背後からと、はたまた魔法まで組み合わせて攻撃している。

「ちよつとあれ、魔法まで使つたら劍の訓練じゃないじゃないの!」

「大丈夫だよ。よく見えて。」

止めるために駆け出そうとしたゆんゆんをブッコロリーが制止する。

見れば、ソケットのあらゆる攻撃が当たっていない。繰り出すその風魔法や、雷の魔法もかすつてもいない。常に動き回つて木々の枝から枝へ飛び移つたりして距離を稼ぎ、そしていつの間にか死角から逆にソケットに斬りつけていた。

単独でこの紅魔の里にたどり着けたのだから何かあるとは思つていたがこれほどとは……。

「僕も最初に見たときには驚いたよ。」

ソケットは、劍の腕ではこの里随一と言つても過言じゃないんだ。それが、かの銀髪君は最初から彼女の動きに着いていけてたからね。」

私たちが話している間に勝負はついたようだ。

ユウヤが両手に持ち変えた木刀を下から掬い上げるように振るうと、巻き上げられたソケットの木刀が宙を舞つた。

「降参よ。本当、鍛練始めてから三日で抜かれるなんてね……。」

「お見事だったよ銀髪君!」

「ユウヤ、あなたはブッコロリーに自己紹介をしなかったのですか? ……これだから

コミュ症は……。

……さっさと名乗りをあげなさい。」

ブッコロリーを見て、私とゆんゆんをそれぞれ見て

、ため息をついてから彼は木の根元に置いておいた自らの剣を鞘に入っただまま眼前に掲げて高々と名乗りをあげた。

「わが名はユウヤ。紅魔族随一の究極戦士にして未来の英雄足るもの。やがて、めぐみんを妻にする者！」

………………。何を言ってるのだこの男は？

ソケットはにやにやししながらこちらに歩いてきているし、ゆんゆんは顔を真っ赤にして唸っている……その眼までぴかぴか光らしている。私は、私は……。

「わくめぐみんが目を回してる。どうしよう、どうしよう?」

「そうだな、とりあえずは………先にこいつらを片づけなくちゃな!」

そう言うユウヤは今まで使わなかった黒い長剣を抜き放つと繁みから現れた狼の群れに向けて斬撃を放つ。「ルーンオブセイバー!!」

「いつの間にか囲まれていたようね。」

「カースオブライトニング!!」

「こういうときこそボクの出番かな? ライトオブセイバー!!」

「……………まだ、魔法を覚えてない私たちはどうしようもないね……………。でも、剣も扱えるようになった方がいいのかな？」

わたしもゆんゆんも、これでは戦力外だ。

二人ともまだ、スキルポイントが10にも達してない。魔法学校に入学して間もないとはいえ…………。

魔法が使えない魔法使いは役立たずだ。

その後も、一撃熊や見慣れない背中に翼の生えたモンスターもユウヤがなんなく倒してしまった。

安心からか、へたりこんでしまった私を背負ってくれたのはユウヤだった。

「ゆんゆん、人手を集めてくれ。倒した獲物で肉が採れるやつはめぐみんの家に運んで欲しいんだ。」

「はい、はい。その他にもユウヤが倒したものは私が換金の手配しといたげるよ。じゃあね。」

遠ざかるゆんゆんを見送って、ユウヤに背負われた私も家に向かう。ソケットとブツコロリーはまだここにいろようだ。私を背負っている広い背中が温かい。安心して意識を手放した。

6話

今朝も普通に朝食が出た。

どうやら、ユウヤが狩った獲物を保存食にした以外は毛皮その他を売って生活費に回したらしい。

さすがのわが父ひよいざぶろうもユウヤが私に貢いだも同然の物を自らの開発資金にはしなかった。いや、しようとしたら、母ゆいゆいに張り倒されたらしい。

こめっこが連れてきたクロネコは結局ゆんゆんの家に取り取られた。こめっこは執拗に食べようとしたが、いつでもゆんゆんの家にお呼ばれできると聞いてあつさり首をたてに振った。

「今日もホーストにカツ丼をおごってもらおう。」

「待ちなさい、こめっこ。ホーストとは誰ですか？」

「遊んでいたときに子分になった。漆黒の魔獣もその時邪神の墓から出てきた！」

今、この子は何と言った？まさか、我が妹が邪神の墓の封印を解いたと言うのですか？

そう言えば、私が幼いときもあそこで遊んでいて封印が解けた中から現れた巨大な魔

獣を魔法使いのお姉さんがその圧倒的な魔法で撃退した。

私はその凄まじい破壊力に魅せられて必ず習得することを誓った。お姉さんが使っていた魔法、爆裂魔法を。

「めぐみくん、学校行くわよ！今日から一緒に登校する約束でしょう？」

朝からのポツチ娘の呼び声に私は考えを中断して顔を上げた。

そう、邪神の墓の再封印がされるまで単身での登下校は制限されているのだ。

ゆんゆんに返答しようとして私は固まってしまった。彼女の後ろに、昨日私を背負って帰った浮気男の顔が見えたからだ。

「今日はユウヤも一緒よ、うれしいでしょう？」

「ユウヤが一緒でうれしいのはあなたではないですか、ゆんゆん。」

「うん、うれしいよ。ユウヤと一緒になのももちろんだけど、こうやってめぐみんと登校できていつぱいおしゃべりできて、……前からくらべたらなんだか夢みたい。」

……ゆんゆんは、頬を上気させてほほえんでいる。

自分からクラスの前に入っていればもつと前からこの顔ができたろうに。

「ユウヤ、あなたはどうですか？もちろん、ぼっちのゆんゆんだけでなく、この美少女の私と一緒にうれしいはずでしょう？」

うん？無表情のこの男をからかったのだけれど………？こいつ、またもやわたしを横抱きにしてずんずん歩き出した。

「こら、何をするのです。他の生徒もたくさん登校してるのですよ？早くおろしなさい。やめろ〜」

「めぐみんてば、やめろというわりに、顔がにやけてるじゃない。もう、これで全校公認だね。なんかうらやましいな。」

「さつき、うれしいかってきいたな？」

うれしいぞ。こうしてめぐみんをだいて登校できるんだからな。――

まずい、からかうつもりが逆にからかわれている。

ゆんゆんは、にやにやしてるし、ユウヤは、わざと密着するように抱えているし、恥ずかしくないのかこの男は？

……結局、居合わせた男子生徒にもさんざんからかわれたし、なぜか校門に待ち構えていたあるえとねりまきの無言の眼差しが怖かった。

7話

「ようし、自分の武器が有る者は、それをとれ。

ない者はここから好きなものを選べ。」

今は、いわゆる養殖の時間だ。駄目教師プッチンが手近な雑魚モンスターを拘束・無力化し、それに生徒がとどめをさして経験値とスキルポイントを得ると言うものだ。

ゆんゆんは、先日購入した自前の短剣を持っている。他の生徒達は無造作に置かれた巨大な武器を持ち上げるため自らの魔力に語りかけたりしていたが……。

「先生、これみんな外側細工しただけの木製じゃないですか。」

「ゆんゆん、減点5だ。少しは空気を読め。」

各々武器をたずさえ、私達は森に入った。なお、この養殖授業も男女合同である。近くには他の男子に混じってユウヤの姿も見える。14歳の彼は、さすがに他の男子に比べても長身だ。170cmはあるかもしれない。

「それでは、先生が片っ端から拘束していくからな。少ししたら、進んでこい。」

そう言ってダメ教師がずんずん奥に入っていく。

「フリーズバインドー！」

ぼうつとしてたら、他の面々もグループ分けをして進んでいく。

ユウヤも他の男子2人と行ってしまった。

「ほら、めぐみんもいつまでもユウヤに見とれてちゃ駄目だよ。」

声をかけてきたゆんゆんに反論しようとしたが、珍しく私以外の女子と行ってしまった。確か、ふにふらとどどんこだったか？

「めぐみん、組む人がいないなら、私達とどうだい？」

「私もめぐみんと話したいかな。」

話しかけてきたのは、あるえと……ねりまきだった。

「……………分かりました。私は逃げも隠れもしません。」

一緒に行こうじゃありませんか。」

目の前に首から下を凍り漬けにされたトカゲがいた。

「お先にいいかな？」

頷いた私とねりまきを確かめて、あるえがハリボテの大剣を振り下ろす。断末魔の声をあげてトカゲが絶命した。彼女は自分の冒険者カードを見て満足げにしている。どうやら、レベルが上がったらしい。

「ねえ、めぐみんはさくユウヤのことどう思ってるのかな？」

ねりまきの言葉につまってしまう。

「別に………。あの男がこめっこや我が家のために獲物を買いしてくれたことには感謝しています。それがだけです。」

「ふうくん。ユウヤは明らかにめぐみんだけを特別扱いしてるよね？ゆんゆんもそう言つてたよ。」

「何が言いたいんですか？」

「別に。たださあ、ゆんゆんやあるえだけじゃなくて、わたしもユウヤのこと好きだからさ、必要なら冒険者になつて着いていきたいし、そうじゃなくてもテレポートの呪文を覚えて彼には毎日里に帰つてきて会つてもらいたいかな。」

「うん、ユウヤが冒険者になつた後も顔を会わせたいのは私も同じかな。」

モンスターにとどめを刺したあるえも口をはさんできた。

「貴女達は作家と居酒屋の女将をそれぞれ目指すのでしょうか？冒険者にならないのでは？」

「さつき言つたわね。私は、ユウヤが好き。」

そして私もれつきとしたアークウイザードよ。」

「わたしも、ねりまきと同じだよ。さて、そこで質問に戻ろう。めぐみん、君はユウヤのことをどう思っているのか、正直に答えて欲しいかな？」

「わ……私は……。」

私は最後まで答えることが出来なかった。

繁みの奥からゆんゆんとふにふらやどんこが血相を変えてこちらに走ってきたのだ。しかも、背中から翼を生やしたモンスターが追いかけてきたのだ。

あれは、断じて養殖用の無力化されたモンスターではない！

「何をやってるんですか、ゆんゆん！ 私達までまきぞえにしないでください。」

「そんなこと言ったってしようがないじゃない。」

あいつ、クロちゃんをみたら、どこまでも追いかけてくるんだもの。」

「捨てなさい。助かるためにクロ助には尊い犠牲になつてもらうのです。」

「いやよ！絶対に手放さないわ。」

いつのまにか、一緒に走っているのは私とゆんゆん二人だけになってしまった。

クロが狙われているのだと分かってふにふらとどんこは離脱し、あるえとねりまきもプツチンに助けを求めに行った。

どうしたら……。考え事をしていたのがいけなかったらしい。木の根につまずいて転んでしまった。

「めぐみん、早く起きて逃げて！」

後ろを振り返ればモンスターは滑空して目前まで迫ってきていた。もうダメだ。私は何も伝説を残さないまま死んでしまうのか。覚悟の目を閉じると……。

「ルーンオブセイバー!!」

衝撃波によってモンスターが真つ二つになった。

声のした方を見れば、黒い長剣を持ったユウヤがこっちに走ってくるのが見えた。

「2人とも無事か?」

「ありがとうユウヤ、よくここが分かったわね。」

「あれだけ、騒いでればな……。あと、あるえとねりまきにも感謝だな。」

見ると、ユウヤとグループを作っていた男子二人のそばにあるえとねりまきが立ってこちらに手を振っている。

ユウヤがやって来ると翼を生やしたモンスターの首を切断して復活しないことを確かめた。

そしておもむろに近くの繁みに声をかける。

「プッチン先生、生徒が危険にさらされてるのになぜ助けないんですか?」

「もちろん、最高のシチュエーションを狙っていたのだ。タイミングが大事だからな。」

「めぐみんとゆんゆんに何かあったらどうするつもりだったんだ?」

ユウヤは、この男は明らかに怒っている。

私達を命の危険にさらしたモンスターに、そして側にいながらすぐに助けに入らなかった駄目教師にも腹をたてている。

「めぐみん、怪我してないか？」

私を心配してくれてる紅い瞳は優しい光を帯びている。里では見かけない銀の髪がきらきら輝いている。彼が、そばにいる安心感で私は意識を手放した。

8話

「見慣れないモンスターが出たから、午後は、授業は無しだ。皆、決して一人では帰宅しないようにな！」

担任教師の言葉を受けて私は帰り道を歩いていた。

「それで、あなたはどこかに寄って行くのですか？」

「ああ、こめつこのことが気になるからな。見当をつけてる魔神の丘に行ってみるつもりだ。」

珍しく私たちと帰りを一緒に歩いていたユウヤに話しかけてみたらこの答えが返ってきた。

背中を見せて歩いていくイカれ男を見送つてから、ゆんゆんをじつと見る。

「私たちも行くんだね、めぐみん。」

「当然です！各自、家に荷物を置いたら現地集合と言うことにしましょう。」

急いで身支度をして、途中で合流したゆんゆんと二人で駆けつけた魔神の丘、そこにはコウモリのような翼を生やし、口から牙をのぞかせる『ザ悪魔』といった巨漢がしゃがんでいた。

その目の前にどんぶり飯を頬張るこめつこと、横にユウヤがあぐらをかいて座り込んでいた。

「コメツコから離れなさい、この悪魔が！」

「そういきり立つなめぐみん。少なくともこいつはこめつこには危害を加えない。

おい、紅魔族流の名乗りをあげてやれ。」

「ふふん、ではいくぞ。我が名はホースト。上位悪魔にして怠惰と暴虐の女神ウォルバク様に仕えるもの！」

やがて、こめつこに召喚されて使役されるもの！」

……。なんだろう？ 紅魔族に合わせたのだろうが、最後が残念すぎる……。

「なんか恥ずかしい！」

私のとなりでゆんゆんも引いている。

呆然としてる間に事態は進展していた。

「それでな、ホーストがこめつこと邪神の墓の封印を解いたわけだが出てきたのがあのクロネコだ。

実はそのもつと前にここにいるめぐみんが小さいときに封印を解いてお前の探してるウォルバクはとつくに紅魔の里を立ち去っている。」

「なんだって。じゃあ、ウォルバク様は今どこに？」

「俺の推測だが、アルカンレイティアか、魔王城、どちらかだ。」

「よし、さっそく行ってみるぜ。」

「まあ、待て。どうせ魔王城に居ても、居心地はよくないだろう。ウォルバクを見つけて出したら、一緒に紅魔の里に住めば良いだろう。」

「ええ、なに言ってるのユウヤ。上位悪魔なんだよ？怖いんだよ！」

「上位悪魔だからだよ。それに、ここに住んでこめつこの子守りをしてもらいたい。」

ホースト、この里には猫耳神社と言う場所がある。

そこに住んで里の住人になる気があるなら、族長の家まで一緒に来い。」

「俺にはアーネスって同僚もいるんだけどよ？」

「一緒に里の住人になればいい。」

悪魔だからって変な人間にいいがかりをつけられたり、ろくでもないのに召喚されるより気楽だろう？

それに、ウォルバクは自分から積極的に行動を起こすタイプじゃないだろう？」

「まあ、それもそうなんだけどよ。」

結局、全員でゆんゆんの家に行くことになった。

上位悪魔であるホーストを見かけた里の住人は騒然としたが、将来魔王軍に所属して

攻めて来られるよりは、里に所属してその住人になってもらった方が紅魔の里のためになる」と言うユウヤの意見が最終的には支持された。

邪神を崇める里と言うのがかっこいいらしい。

「ユウヤ……。あなたは何者なんですか？」

今現在、私たちは二人きりだ。家に帰る私を例のごとくユウヤが送ってくれている。

「我が名はユウヤ、紅魔族族長の甥たる者！」

だが、この生を受ける以前の記憶もあるぞ……。」

「え？それはどういうことですか？」

「大事なことはだ。俺が、めぐみんを好きだと言うことだ。」

どちらからともなく、我が家に着くまで私たちは手をつないでいた。

ホーストは紅魔の里周辺を捜し廻り、やはり、ウォルバクは魔王城にいたらしい。

そこで何やら一悶着あったようだが、城にいた見通す悪魔が騒ぎを起こした隙に逃げた。

アーネスという女悪魔もちやつかり付いてきたが彼女の巨乳に里の男どもの目は釘付けになっていた。

あの女は敵だ！

昔、私を助けてくれたお姉さん、ウォルバクは里の魔法学校レッドプリズンの教師になり、アーネスは各地の情報収集をしているし、ホーストはすっかりこめつこの子守りが板に付いている。

そうして、ユウヤがこの里に来て一週間がたった。

学校の授業が終わった後、私、ゆんゆん、そしてユウヤの3人で帰宅していた。

「ユウヤもレベルが20になったんだね。」

スキルポイントもまた76ポイントになってるよ。」

「あなた、1レベル上昇でスキルポイントが2も上がってるのですか?」

「どうやらそうらしい。究極戦士の恩恵かな。」

「そんなのずるいではないですか……。私もゆんゆんも、まだ中級魔法を覚えるのがやっとですよ。」

「そうなのだ。私のスキルポイントは15。ゆんゆんは昨日、11ポイントになったばかり。」

これでは、爆裂魔法はおろか、上級魔法もまだ覚えられない。ユウヤが先に卒業したら、この里から居なくなってしまう。そんなのいやだ。

思考にとらわれて下を向いていたら、空を覆うほどのモンスター群れが襲来し、紅魔の里中に警報がけたたましく鳴り響いた。

9話

空を覆うほどの大量のモンスターがいる。

全て翼を背中につけた飛行型の魔物だ。

明らかに異常事態だ。

「まずいな……………。ひとまず、めぐみんの家に行つてこめつこの無事を確かめるのが先決か……………」

「私もそれがいいと思うよ。ひよいぎぶろうさんとゆいゆいさんは、今は里にいないんだよね？」

「ええ、できた製品を売りに行つててまだしばらくは戻つてこないはずです。」

……………そうなのだ。今、家にはこめつこが一人で留守番してるはず……………。こめつこ……………。

たどり着いた我が家にはカギは掛かつておらず、中には誰もいなかった。

「こめつこ……………こめつこはどこですか？こめつこ？」

血相を変えて飛び出そうとした私の手を左右から伸びてきた腕がつかんできた。

「ゆんゆん、ユウヤ、二人とも離してください。」

「こうしてる間にもこめっこが！」

「まあ、待てよ。ゆんゆんは、何か手軽に食べられるものを台所から持ってこい。

めぐみんは、こめっこが行きそうな場所に心当たりはないか？」

「こめっこは、あれからたいいホーストと一緒にいることが多いです。魔神の丘か、でなければ猫耳神社にいるはずですよ。」

「……………分かった。めぐみん、走るようになるから靴を取り替えろ。ゆんゆん、食料と水を用意したか？」

「うん、袋からすぐ取り出せるようにしたから。」

ゆんゆんは、私達にそれぞれ袋に入ったものを渡してきた。中身はおにぎりや唐揚げにした肉だった。

おのれ、我が家の貴重な食料を…………。

無言でブーツに履き替える。

「手分けして探すのがいいんだろうが…………。

魔法を取得してない魔法使いは戦力にならない。

「ここは、三人でまとまって探すしかないか。」

「一緒に行つてくれるのですか？」

「何を当たり前の事言ってるんだよ？」

いつもの里周辺のモンスターだって中級魔法じゃ無理だろうが。用意できたら、行くぞ。」

私達が走ってる途中でも、里の外周部から内へ向けて色鮮やかな魔力の奔流が生じていた。

里の大人達が現れたモンスターを封じ込めにかかっているようだ。

「どうやら、撃退ではなくて殲滅をねらっているようだが……、これは急がないと不味いな。」

ユウヤが走る速度をあげる。私とゆんゆんも必死についていくと、猫耳神社に近付いたところで一面の炎に包まれた場所があった。

「ええい、うっとおしいヤツラめ。」

インフェルノ!!」

およそ百体ほどもいたモンスターが上級魔法の一撃で火だるまになり地上に墜落した。

そこに仁王立ちしていたのは、ホーストだった。

「ホースト!」

「おお、おめえらか。ウォルバク様とこめつこを知らねえか？」

「ええ、一緒じゃないの？ どうしよう。どうしよう。」

「落ち着け、ゆんゆん。ホースト、ウォルバク先生とこめつこは一緒にいたのか？」

「ああ、今日はあのクロネコも抱えて魔神の丘に向かったはずなんだ。俺も後から行くはずがこいつらに邪魔されてよ。」

ユウヤが私とゆんゆんの二人をじつと見る。

「私達についていきますよ。置いていこうとしたら、あなたの恥ずかしい話を広めてやります。」

「……………」。悪いがホーストは二人を背中に乗せて運んでくれ。今すぐ出発だ。」

そう言うと、いきなり彼は走り出した。

やはり、今までは私達にスピードを合わせてくれていたようだ。

「ほら、俺の背中に乗りな小娘ども。」

おぞおぞと背中に乗ると、浮かび上がったホーストは翼をはためかせ、猛烈な勢いで飛ぶ。

あつという間に着いたそこでは、ウォルバクのもう一人の部下アーネスが奮闘しており、それをクロを抱えたこめつことウォルバクがじつと見ていた。

「ウォルバク様、ご無事ですか？」

「ありがとうホースト、いいタイミングだったわ。」

アーネスが頑張ってくれていたんだけど、彼女も疲れてきたみたい。」

「それじゃあ、俺とホーストがしばらくもたせるから、アーネスは休憩してこめつことこの二人をみておいてくれ。ウォルバク先生は、爆裂魔法の詠唱の準備を。準備ができたら、声をかけてください。」

いつのまにか追い付いていたユウヤが黒い刀身を抜き放った。

「あんた大丈夫なのかい？今のうちに魔法習得した方がいいんじゃないかい？」

「問題ない。隣にはホーストがいるからな。」

無数のモンスターの群れに突撃する二人。

上級悪魔である実力者ホーストにユウヤは全くひけを取っていない。

上空を滞空している敵を空からホーストが叩き落とす、地上に降りて来たモンスターをユウヤがあつという間に切り伏せる。目にも止まらぬ速さとはこの事だ。

二体の敵を切断した彼の死角から音もなくもう一体が迫る。

「ユウヤ〜!!」

私は、唾然としてしまった。彼は、迫ってきた敵に対して振り向きざまに斬撃を放って周囲を巻き込んで消滅させてしまったのだ。

「凄まじいねえ。とうに一流のソードマスターの域に達してるじゃないか。」

アーネスが息を整えながら呟く。

二人が戦っている場所を敵は包囲しようとしており、少しずつこちらに下がってきた。

「準備完了よ。二人とも下がりなさい!」

ホーストが飛んでくる。ユウヤが矢のように駆けてくる。そして、ウォルバク先生の掲げる杖からまばゆい光がほとぼしる

「エクस्पロージョン!!」

一直線に伸びた猛烈な爆炎は前方の辺り一面をなぎ払い、巨大なクレーターを造り出していった。

空を覆っていた無数のモンスターも見当たらない。

「もう、モンスターは居なくなつたのかな?」

「さすがにきつかつたわね。先生、疲れちゃつたわ。」

「先生は、今日はもう、爆裂魔法はキツイでしょう。猫耳神社に帰って休んでください。できれば、ホーストとアーネスと一緒にこめっこ達を守ってほしいんです。」

「あなたは、…………ユウヤ、あなたはどうするつもりですか?」

私は気がついてしまった。里のモンスターは一掃されつつある。侵入した敵の全滅はすぐだ。

しかし、新たに大量の敵が外から迫っている。

魔王城のある方角から押し寄せてきている。

「ここにいる皆は疲れている。しかし、俺は戦える。」

そして、ここが魔法を習得するタイミングだと思う。」

彼が懐から冒険者カードを取りだし一覽に指を這わせる。習得した魔法が濃く浮かび上がる。

「超級魔法！何ですかこれは？必要取得ポイントが80ポイント!!何ですかこれは！」

問い詰めようとした彼は、空中に浮いていた。

驚く皆を尻目に飛ぼうとしていたユウヤに向かって私は思いきりジャンプして彼にしがみついた。

面食らった彼だが、しつかりと私を抱き締めてくれた。

「ユウヤ、私も行きます。連れて行ってください。」

私の目を見つめた彼は背中にしがみつかせて高度をあげた。

「行つてくる。終わったら合流するから。」

大空を飛んでいる。ユウヤと二人で。何だか嬉しい。今だけはユウヤと二人きりだ……。

「ぼんやりしているところ悪いがな、そろそろだぞ。」

「下に降りるのですか？」

「まさかな。地上部隊もいるようだが空中にもそれなりに敵がいる。こつちが上空にいる間に勝負を決める。」

彼は自分の黒剣を掲げて短く呟く。

「この世の全てをなぎ倒す。敵を滅ぼせ。」

隕石落とし《メテオストライク》

瞬間、紅蓮の炎に包まれた大量の巨大岩石が魔王軍に降り注いだ。空にいた者も、地上にいた敵も等しく跡形もなくなった。ただ一人生き残ったのは、急いで障壁を貼った敵の指揮官だけだ。

信じられないものを見た目をしたその少女は、満身創痕ながら飛行して退いた。強い意思を秘めたその視線は真っ直ぐユウヤを射ぬいていた。

「あっけなかつたですね。追わなくてよかつたんですか？」

「俺のレベルを考えてくれよ。今、魔王城に行っても、なぶり殺しにされるのが落ちさ。」

それよりもまだ少しは魔力がある。猫耳神社まで空中散歩しよう。」

「何故横抱きに態勢を変えるのですか？」

「このほうが景色を見やすいだろう？」

いわゆる、お姫様だっこをされている状態だ。

私は、恥ずかしさで彼の首にしがみつく。

景色など見ている余裕などない。

「ユウヤは私のことをどう思っているのですか？」

「前に言った通りだ。俺はめぐみんが好きだし、必ずお前を嫁にする。」

何も言えなくなってしまう私は、黙って彼にしがみついていた。静寂は決して不快ではなかった。

あれから一週間、魔法学園レッドプリズンを卒業したユウヤは今日が旅立ちの日だ。

卒業した彼だが、毎日の魔物狩りの他に時折攻めてくる魔王軍の撃退にもブッコロリーらのニート集団と共に参加していた。

あの女指揮官も攻めてきたがユウヤを見かけると急いで撤退した。なぜか、強い者に対する憧れがその目に宿っていると感じたのは気のせいか。

食料を我が家に届け、魔王軍から奪った装備を里の鍛冶屋に持ち込んで自分用の鎧などを製作してもらっていた。

里の入り口で戻ってきた我が父ひよいぎぶろうが私の隣で立っている。そばには、母ゆいゆい、こめつこもいる。

「二年以内にテレポートの呪文を覚えて一度戻ってきます。その時は……。」
「どうしても、めぐみんがいいのかね？」

君は従兄弟なのだからゆんゆんの方が良いのじゃないかね？あちらも望んでいるよ
うだしね。」

少し離れたところから、ゆんゆんとあるえに、ねりまきもこちらをうかがっている。
おのれ……。

「俺は、めぐみんが好きです。確かに一夫多妻の制度はありますが、俺のお姫様はめぐみ
んです。」

めぐみん、卒業したらアクセルに來い。その頃になったら、俺も駆け出しの町に行
く。」

「あなたは、他の街を廻るのですか？」
「俺のレベルが微妙だからな。」

アクセルでは仕事がないかもしれない。
各地を廻ってみるさ。王都は面倒だが……。」

「分かりました。私も卒業したら、必ずアクセルに行きます。そこで再会しましょう。」

「私もアクセルに行くよ！絶対にユウヤとまた会うからね？」

「もちろん、私も諦めないよ。」

「私もお父さんに言つて冒険者になるんだから！」

「このぼつちにビッチにアバズレが！」

「ユウヤは今、私と話しているのです。邪魔しないでもらおうか！」

「なに言つてるのよ？めぐみんは、ユウヤに好きだつて告白してないでしょう？自分の意思を伝えてないのに束縛するのはおかしいわよ！」

「……こいつらは敵だ！私は全身真っ赤になるのを意識してユウヤに向き直る。」

「ユウヤ、あなたは私の男です。必ず私の夫になりなさい。」

一瞬驚いた彼だが、笑みを浮かべると私にキスをして来た。ぼうぜんとしている内に背を向けて歩き出してしまった。

「我が名はユウヤ！紅魔族随一の究極戦士にしてやがて英雄と呼ばれる者。めぐみんを必ず嫁にするもの！」

背を向けた彼から大声で宣言が聞こえ、私はその日一日中冷やかされた。

設定 1

■ ユウヤ

母は現紅魔の族長の妹ユウユウ。父はユウヤが生まれてすぐに王都防衛戦で敗れて死亡。その時の魔王軍指揮官がデユラハンのベルディアだった。

身長 170 cm

体重 59 kg

年齢 14 歳

銀髪 深紅の瞳

冒険者 level 25

クラス 究極戦士（魔法戦士の発展型。最大の特徴は他のステータス同様にレベル上昇と共に知力も上がる。これによってスキル習得にかかる必要ポイントが減る） 各ステータスが均等に上がり、スキルポイントが1レベルにつき2ポイントずつ上がる

習得済みスキル

● 全状態異常無効

● 奇襲

● ウエポンマスタースキル 2

●物理攻撃耐性1 ●魔法攻撃耐性1 ●悪魔特攻（悪魔、魔族、アンデットに
対して通常より攻撃力が上がる）

●ルーンオブセイバー ●ホーリーウエポン

●超級魔法（通常のアークウイザードでは現れない、究極戦士専用魔法。）
実態は従来は存在しない魔法を創造するもの。魔力の大きさと想像力によって効果
が変わる

●飛行 ●隕石落としメテオストライク（術者のレベルが上がることにより破壊力が上昇する）

●聖なる唄（自分を含めた味方全体の、筋力 防御力

速度 気力が大幅に上がる）

●自動回復（戦闘中に消耗しても、一分毎に体力

魔力共に10%ずつ回復する。自分のみ）

武器1

バスタードソード（柄の部分が長く片手でも両手でも振るえる両刃の剣。刀身は黒
父の形見ではあるが神器や宝剣といったものではない）

防具1

ハードレザー（紅魔の里を襲撃してきた飛行モンスターの素材を使用して製作された

灰褐色の革鎧。通常の金属鎧より頑強)

マント

紅魔の里には珍しい青色のマント。裏地は赤

戦闘時に青白くオーラが出ているがマントは通常の市販品。ユウヤ自体がオーラを出している？

称号

● 白銀の使徒

● 蒼き翼

■ ■ めぐみん (オリジナル要素)

父ひよいざぶろう 母ゆいゆい 妹こめっこ

当初は紅魔の里に突然やって来たユウヤを警戒していたが、貧相な食料事情に対して援助してもらい、妹コメッコへの気遣いなどで好意的になる。

強気で好戦的な性格だったのが、ユウヤを意識して恥ずかしがるようになる。

幾度か危機を救われ、恋のライバルの存在もあり、ユウヤに対する独占欲が芽生えた。ユウヤの旅立ちの時点では、魔法学校に入学して

間もないので、スキルポイントが貯まっていない。

幼少の頃、〃自分の危機を救ってくれたお姉さん〃ことウォルバクが魔法学園の教師の職に就いたので、日々、爆裂魔法の話に興味深く聞いて、上級魔法とどちらを修得するか悩んでいる。

黒髪深紅の瞳

髪を伸ばそうか現在思案中

原作では貧弱な体型だったがここ最近食糧事情が改善傾向にあるので、変化の兆しが……。

クラス　　アークウイザードで、紅魔族は大抵が強力な魔法を扱えるこのクラスにつく。

めぐみんは、魔法学校レッドプリズンの首席の存在であり、紅魔族随一の天才と呼ばれる。

■ ■ ゆんゆん

父は現紅魔の族長ヒロポン

成績優秀、魔法学校ではめぐみに次ぐ次席の成績

族長の娘として周りが自分を見ていたので自身の優秀さを示すため、めぐみに勝負を挑み張り合っていた。

いわゆる普通の感覚を持っているため、紅魔族特有の中二病的なノリについて行けず、幼少から友達が作れずにぼっちだった。

自分が知らなかった従兄弟が里に来たことで状況が変化する。ゆんゆんは、ユウヤに惹かれて行き、それに連れて積極的になる。

今までライバルとして張り合ってきたためぐみんを友達と呼ぶようになり、あるえやねりまきとも親しくなった。

尚、彼女の両親もゆんゆんとユウヤの仲を応援している。

黒髪 のおさげで 深紅の瞳

体格は女子クラスの平均を上回り、男子の注目を集める

■ ■ あるえ

よくも悪くも紅魔族のノリを体現した少女

天然ウエーブの黒髪に蝙蝠を模した髪どめ

深紅の瞳は、普段は左に眼帯をして隠しているが、

別に特別な意味があるわけでもない。

成績は魔法学校で第三席となるがその中二病的センスが担任教師プッチンには、大ウ

ケである。

彼女は「紅魔族随一の発育」と自ら宣言している通りにその体格は胸部装甲を始め、ゆんゆんを大きく上回る。自身の女性的魅力を理解しており、それ故にめぐみに敵視されている。

作家を目指し、将来の大作を書き上げることが目標にしている。

ユウヤには、最初、興味本意で近づいたが、後に本気で好きになり卒業したら彼を追って行く気満々である。

■ ■ ねりまき

紅魔の里随一の酒屋の娘。店の名はサキユバスランジェリーで名前につられて外部の人間がよく訪れる模様。

深紅の瞳に長くつややかな黒髪、すらりとした体格は魅力満点で文句なしの美少女

店に訪れる外からの客の相手をしているので、社交性に長け情報通であり、クラスの女生徒達とも仲はいい。

外からやって来たユウヤに惹かれ、恋のライバルが複数いることに闘志を燃やしている。

アクセルの魔法戦士

10話

夕暮れの町並みを、冒険者風の男女四人が歩いていった。何やら心身ともに疲労しており、四人の内三人までが何か全身ヌメヌメして無事なのは胸の大きい御下げの少女だけだった。

何よりその団体からは、異様な臭気が漂ってきていた。

「ふく。やつぱり、あの爆裂魔法はオーバークル過ぎるだろう。よつぼどでなければ封印だな。これからは、別の魔法で頑張ってくれ、めぐみん。」

うんざりした表情で小柄な少年が言えば、背負われている少女が言葉を返す。

「使えません……………」

「え、何が？」

「私は、爆裂魔法以外の魔法は使えないんです。

覚える気もありません。」

「え、何言ってるのよ？爆裂魔法を使えるくらいの魔力量があれば、他の魔法も大概使えるはずだし、

難易度的にも爆発魔法と炸裂魔法の複合の爆裂魔法

を発動できるんだから、それより下位の魔法習得なんて、選り取りみどりじゃないの？」

「そうなのか、アクア？」

「ええ、そうよ。」

青髪の少女アクアが胸を張って答えると、茶髪の少年、カズマはなんとも言えない顔をした。

「私は、爆発系の魔法が好きなんじゃありません。」

爆裂魔法が好きなんです。

確かに他の魔法を覚えれば、冒険は楽になるでしょう。でもこれは私のポリシーなんです。」

「めぐみん、言いたくないけどそれじゃパーティーには入れてもらえないよ？」

「ゆんゆん、貴女が抜けければいいではないですか。」

「いや、正直に言ってみりだな。なにしろ、一通りの上級魔法が使えるゆんゆんが、パーティー加入を希望してくれてるんだ。」

癖の強い魔法使いは、俺では扱いきれないよ。」

大声を出すでもなく、筋道たてて説明されてみれば、一行に注目していた見物人も非

難の声をあげることはなかった。

「まあ、帰ってから報酬は公平に分けるからな、ごくろうさん。」

「あんたらがめぐみんをいらさないなら、俺が連れていくさ。」

涙を必死にこらえていためぐみんが声のした方を振り返ると、ずっと会いたかった少年が以前より精悍な表情で近づいてきた。

「久しぶりだなめぐみん、ちょっと待ってろよ

「スペシャルクリーン」

背の高い少年が指輪を付けた左手を向けて詠唱すると、粘液まみれですごい臭いが綺麗さっぱりなくなつて、カズマ・めぐみん・アクアは入浴したように清潔になつていた。「ユウヤ、いつアクセルに来たのよ。」

私達がこつちに来てから受付に聞いても、とつくに出でいったって言われちゃったし、もう。」

「ゆんゆんも久しぶりだな。俺もレポートの魔法を覚えたから紅魔の里に戻ってきたんだ。」

めぐみんとゆんゆんに手紙を預かった。

今日、ギルドで探したんだがクエストに出た後だったみたいだからな、俺も一撃グマを倒して来た。」

「知り合いみたいだな、ちょっと俺にも紹介してくれよ。」

そう言ってサトウカズマは、目の前の少年を観察した。165cmの自分より10cm以上高いだろう。

灰色に見える革鎧に青いマントをつけている。

腰には真つ黒の長い剣を差して、左手にはマナタイトと言う魔硝石を嵌め込んだ銀の指輪をつけている。そしてなにより、目を引くのはその銀髪と赤目だった。

「まずは、自己紹介かな。」

俺の名はユウヤ、紅魔族族長の甥でゆんゆんとは従兄弟になる。そして、めぐみんは将来の俺の嫁だ。」

「何故それを言うんですか?」

「最初にはつきり言っておかないとな。」

「あいかわらねえ。もちろん、結婚するときには私もお嫁さんにしてもらうわよ。」

「じゃあ、私からいくわよ。」

我が名はアクア、皆が崇めるアクシズ教のご神体そのもの、水の女神アクアとは私のことよー！」

「え……。」

「ああ、そう思ってるかわいそうな娘なんだ。」

そつとしてやってくれ。」

「なんでよ〜」

アクアの名乗りとカズマのフォローでユウヤは微妙な顔をした。

「それで、俺はサトウカズマだ。」

「とりあえず、汚れも綺麗になつたし、このままギルドに直行しましょう。」

ゆんゆんの発言に全員異議なく、泣きそうだっためぐみんも元気になってユウヤにおぶってもらっていた。その隣をゆんゆんが当然のように歩き、アクアが楽しそうにおしゃべりしていた。

カズマは複雑な表情で最後尾を歩いていった。

「はい、今回のクエスト一撃グマの討伐と買い取り分を合わせて500万エリスです。」

「ああ、どうも。」

「これでレベル38ですか？おめでとうございます。」

男性の受付で報酬を受け取ったユウヤは、めぐみん達が座っているテーブルに向かった。

隣の受付では金髪で胸の大きい美女から報酬を受け取っていたカズマもやって来た。

「ほら、めぐみん今回の報酬だ。端数はめぐみんに入れといたぞ。」

「有り難うございます。」

受け取っためぐみんが、ユウヤに寄り添ってとなりに座る。

「それにしても、レベル38とはね……。」

「紅魔の里を出るときにレベルは20後半だったからな。こんなもんだろ。」

それに里にはもつとレベルの高い奴はごろごろいるぞ。このアクセルにも原因はわからないが高レベルの冒険者がちらほらいるようだしな。」

「ユウヤはアクセルにはいつかなかったんでしよう？どこにいたの？」

「歩いて南の国境の街にいたんだ。」

「あそこは、治安が悪いと聞きましたが王都には行かなかつたんですか？」

「よせやい。貴族の使い走りや、王家の飼犬になる気はないぞ。」

「そんなもんかな……。」

「カズマなんかは好きそうじゃないか？」

「バツバツと敵をなぎ倒して注目されて、王女なんかと密会とかしたいくちなんじゃないか？」

「言われてカズマは黙り込んだ。」

「周りにいる冒険者もこのテーブルの会話に聞き耳をたてていた。ユウヤの風貌と高レベルの冒険者と言うことで注目を集めていたのだ。」

「それで、ゆんゆんはパーティー加入OKでいいのか？」

「ああ、ゆんゆんには、これからも頼むよ。」

「じゃあ、食事の間に手早く手紙の返事を書いちゃってくれ。テレポートで今日中に届けるからな。」

「言われて、定食を食べていたゆんゆんは何やら書き込み始めた。」

「ねえ、ユウヤはしばらくアクセルに留まるのよね。私たちのパーティーに入る気はない？」

「いや、その気はないな。俺は冒険者と言うより傭兵のつもりだし、せつかく会えたんだからめぐみんと一緒にいたいしな。」

「まあ、そっちには、ゆんゆんが加入したんだ。」

「こいつは、大抵のことはそつなくこなすし、接近戦もできるから、重宝するはずだぜ。」

大事にしてやってくれ。」

「ああ、わかった。」

やがて、ゆんゆんから手紙の返事を受け取った少年が立ち上がる。

それを見て、口一杯にほうばっていた食べ物之急いで飲み込んだめぐみんがつづく。

「俺達二人の勘定はここにおくぞ。」

「ユウヤ、おんぶしてください。」

「もう歩けるだろ?」

「私がおんぶしてほしいんです。」

見つめあつた後、しゃがんだ少年の背中に少女がうれしそうにしがみつき、二人は外に出ていった。

「それじゃあ、カズマさんこれからよろしくお願いします。」

「ゆんゆんはさ……。」

「はい、何でしょう?」

「追いかけて一緒に行かなくて良かったのか?」

「私はこれが初めてのパーティー加入です。」

「ここでパーティーでの戦いかたを学んでいきます。」

「何よカズマさん、自分で断つたのに、めぐみんのが惜しくなったの?」

「そうじゃねえよ。」

「主役になるには、才能の他にも不断の努力も加えて運も必要なのよ。」

俺は運だけかよ……………。

サトウカズマは、自分の冒険者カードを見てため息をついた。

1 1 話

「ほら、着いたぞ。」

「はあ、テレポートの呪文は便利なものですね。」

めぐみんが閉じていた目を開ければ、ついこの間出発した紅魔の里があった。彼女を背負ったまま、ユウヤは目の前の大きな屋敷にずかずか入って行く。

「あら、ユウヤさんおかえりなさい。」

「ああ、族長はいるかな？手紙を持ってきた。」

「先程、出先から戻ってきたばかりですよ。」

そのまま奥に通され、二人は並んで座る。

「ゆんゆんは、サトウカズマとアクアと言う冒険者のパーティーに加入した。」

「しばらくは、アクセルで活動するだろう。」

「ごくろうだったね。手紙には、めぐみんはユウヤと一緒にいることになったとあるが？」

「駆け出しの町の新人冒険者が大半だ。」

めぐみんにはきつかったようだ。だから、こいつ自身を強くする。まあ、外に出て戦

うんだ。それなりに動けるようじゃなければ、パーティーメンバーに棄てられないかと怯えることになるからな。」

屋敷を出て、暗くなった夜道を二人で歩く。

「ユウヤ、族長の家に留まらないのですか？」

「俺はこっちに戻ってきてから寝る場所を変えたんだ。……着いたぞ。」

めぐみんの目の前には、見慣れた古い自宅ではなく、広い工房がある真新しい家屋があり、その隣にも同程度の広さの住宅が並んでいた。

彼女はとまどったまま、工房付きの家屋に入った。

ユウヤに手を引かれて、リビングに通るとそこには懐かしい顔が揃っていた。

「おかえりなさい、めぐみん。」

「ねえちゃん、おかえり！あいかわらず兄ちゃんと仲良いね。」

「……………。無事によく戻ったな。」

「ただいま帰りました。こめっこ、いい子にしましたか？」

「うん！」

「さあさあ、いい時間だし、夕飯にしましょう。」

ユウヤさんもどうぞ。」

「ありがとうございます。今日はアクセルに行つて来たので、これお土産です。ひよいざぶろうさん、どうぞ。」

「ああ、有り難くいただきますよ。母さん、台所に。」

「それにしても……。ここが新しい我が家ですか……。日々の生活に精一杯だったのに、どこから家を新築するようなお金か？」

「費用は全てユウヤさんが出してくれたわよ♪」

「何をやってるんですかあなたは？」

「まあ、そう言うな。新しく工房を造つてな、試行錯誤の時間が増えたから、以前よりもひよいざぶろうさんの作品の完成度か上がつてずっと売れるようになったんだ。もう、こめっこも食べ物への心配しなくて良くなったんだぞ。」

「うむ、材料集めも時々してもらっているし、ユウヤ君には感謝しているよ。」

「なんと！他人に頭を下げるのが嫌いな我が父が感謝の言葉を口にすると!! 熱でもあ
るんですか？」

「めぐみん、ひどいいい様だぞ。」

食事を終えて風呂に入り、さて寝る段になるとユウヤは帰り支度を始めた。

「あれ、泊まっていけないのですか？」

少年に尋ねれば、不審な顔をされた。

「何を言ってるんだ。めぐみんも早く帰り支度をするんだよ。」

「え……ここが私の家ではないですか？」

「違う、ここはこめっこの家だ。入る前に見ただろう。隣に建ってるのが俺とめぐみんの家だ。」

「聞いてませんよそんなこと！」

「今言っただろう。」

ひよいさぶろうは、当然といった顔で澄ましている。母のゆいゆいと妹のこめっこのこにこしているだけだった。

「めぐみん、俺がこの里を出るとき、お前は俺に自分の夫になれといったな。あの時から里ではお前は、俺の嫁なんだよ。」

そう言うのと、呆然としている少女を「お姫様だっこ」で出口まで歩いて行く。

「姉ちゃん、兄ちゃんお休み〜」

二人が出ると背後でボタンと戸口が閉まってしまった。真つ赤な顔をしてめぐみんはユウヤにしがみつく。彼が手をかざすだけで、家の入り口が自動で開き、進むにした

がって背後でひとりでに閉まっていった。

真つ直ぐ寝室まで来ると下ろされたが、そこにはキングサイズのベッドがあるだけだった。

「あの………私はどうすれば？」

尋ねるめぐみんの目は泳ぎまくっていた。

「もちろん一緒に寝るんだよ。これだけデカイベッドなんだから、狭いことはないだろう？」

心配しなくても、おまえが結婚年齢に達するまで俺から襲ったりしないよ。」

そう言うとうウヤは、さっさとベッドに入り目を閉じた。

しばらく、めぐみんは佇んでいたが深呼吸してから少年のとなりにもぐり込んだ。

そして向こうを向いているその背後から抱きつき目を閉じる。暗闇の中、沈黙が支配していたが、やがて穏やかな寝息が聞こえてきた。

12話

子鳥のさえずりで目が覚めた。

ガバツと跳ね起きた少女は、見慣れぬ部屋と自身が寝ていたキングサイズのベッドを見渡す。

ああ、私は紅魔の里に帰ってきたんだ。

私は、この先どうしたらいいんだろう。

やはり、爆裂魔法だけでは通用しなかった。

私は、ユウヤに養われるだけの生活になってしまうのか？

ぼうつとしてしていると、ドタドタとこちらに近づいてくる足音がして、無遠慮にドアが開けられた。

「姉ちゃん、姉ちゃん、朝御飯ができたから家の方に来て！兄ちゃんも森から帰ってきたから！」

以前より広くなったリビングに置かれた大きなテーブルに各々席につく。

ちなみに、ひよいざぶろうとゆいゆい、こめっこの座る位置は同じだが、めぐみんは

ユウヤと並んで入り口側に座るように言われており、配膳の手伝いはするなどのことだった。

どうもめぐみんながユウヤの嫁だと言うことは、彼女の両親の間では既定のことらしい。

「ユウヤ君、これからの予定は決まっているのかね？」

「はい。とりあえず、めぐみんには武器の扱いと装備を揃えてもらいます。今の魔法特化の装備では、生き残れませんか。」

同時にウォルバク先生から魔法制御の手解きを指導してもらいます。」

「ユウヤさん、あるえちやんとねりまきちゃんのことはどうなったのかしら？」

「パーティーメンバーとしてついてくると主張してますが……。ゆんゆんならともかく、正直に言えば彼女云々の話は俺にとって現実的じゃないですね。」

「ゆんゆんは違うのかね？」

「ひよいざぶろうさんも分かって

いることだけど族長の意向もあるようです。

まあ、彼女は一人娘ですからね。

けれど、アクセルで駆け出しパーティーに加入したので、しばらくはそこで活動するのでしょうか。

「どんなことになっても、俺はめぐみんを手放しませんよ。」

「いや、なぜそこで私を見つめてくるんですか？」

「はずかしいからやめてください。」

「否定しないのはいいことだ。俺の嫁の自覚が出てきたな。」

「うう〜」

早い時間の朝食を済ませ、めぐみんはユウヤと共に出掛けた。両親は工房に籠り、こめっこは約束があると猫耳神社に駆けていった。

「それで私達はどうするのですか？」

「言つたらう？ お前の装備をととのえるんだよ。」

「まずは服屋、次に鍛冶屋だな。」

「今の服装は気に入ってるのですが。」

「現実的に敵に対処する手段をとるには、その格好じゃ不向きなんだ。」

「おはよう、ちえけらさん。朝早くから悪いね。」

「なにかまわらないさ。この紅魔の里随一の服屋の店主が既に万端ととのえているよ。」

そうやって、店主が奥から運んできたのは配色は表が黒、裏地が赤の以前と同じマントだが、丈が腰くらいしか無いものだった。

「これ、お尻の辺りまでしか長さが無いですよ?」

「走り回るには、今のじゃ長いのか。」

「留め金でマントを羽織ってみな。」

言われてマントを羽織り留め金をしめると、めぐみんは自身が魔力で覆われるのを感じた。

「防御の魔法が施してあるのですか?」

「ウオルバク先生に頼んだんだ。俺と一緒に居ないときもあるかもしれないしな。」

「マントの下に着る服はとりあえずデザインが同じものを色違いで三着仕立てといたよ。」

用意してもらった服に着替えて外に出た。

以前の服は下取りしてもらい、替えのものは届けて貰えることになった。

「あの…、この服も裾が短いんじゃないですか?」

「そんなことはないだろう。ちゃんとマントで隠れるはずだ。」

めぐみんが今着ている服はベルトで締めるワンピースタイプで長袖だが、丸襟に首元が開いていて裾がマントの丈より短い。

何が言いたいかという下着がかるうじて隠れるくらいの長さしかないので恥ずかしいのだ。

「動きやすくするためだ。ゆんゆんやアーネスに比べたらずっと大人しい方だろうか？」
「私は、変態ではありません！」

鍛冶屋についてみると、ちょうど店を開けたところだった。

「よお、しばらくだな、めぐみん。」

武器をそろえるんなら、先ず一通り振り回してみろ。」

戸惑う彼女は店の裏にある空き地でいくつか振り回してみた。

「今更、剣や弓と言うのもなんですね。モーニングスターなんかは重いですし、棒や杖では破壊力がありません……。」

「じゃあ、槍はどうだ？」

「ダンジョンに入ったら、長さが邪魔になりませんか？それにアークウイザードの私では重くないですか？」

「ふん…、めぐみん、これを振ってみな。」

鍛冶屋から手渡されたのは、短シヨウトスピア鎗と呼ばれる物で、一般的な手槍よりは短く重さも

それほどではない。剣よりは長さもあり、良いのではないか。

「良さそうだな。中に入れて選ぶぞ。」

最悪、今持つてるものを改造して、仕込み杖を頼むところだったからな。」

短鎗 が並んでいゝる列に行き眺めていゝると、柄の部分が紅く塗装されていゝるものがあつた。

振り回してみると他の物より軽い。

「それな、厳密に言うゝと槍じゃねえんだけどよ、柄の部分が木製じゃなく金属だからな折れないぜ。」

壊れたら、穂先を取り替えれば、使ゝい続けられるし、お得だぜ。」

「呪ゝいがかかつてるとかじゃないんだな？」

「それはないんじゃねえか？」

そゝいつは、俺が作つたもんじゃないけどよ、俺自身が振り回して呪ゝわれてないんだからな。」

「よしじゃあ、武器はこれでいゝとして防具と足元だな。」

運ばれてきた防具をつけてみた。

柔らかな革製ブーツにレガースが一体化したものは膝まで保護してゝいゝる。

防具も上半身を完全に防御してゝおり安心感がある。

なにより、どちらも軽いので鎧を着けている感覚がない。

「なんでどちらもピンクなんですか？」

紅魔族たる者、黒か朱が一般的ではないですか？」

「それな、ユウヤが狩ってきたサラマンダーから加工した逸品だぞ。」

「え……？」

「王都で売りに出したら、億に届く値が付くかも知れねえな。」

「それを武器も含めて、三百万エリスで売ってくれる親父さんも太っ腹だよ。」

「何言ってやんでえ。防具加工に使う部位だけじゃなく肉以外は全部譲ってくれたのはお前さんだろ。」

俺はただでもよかったんだぞ？」

笑顔で手を振る鍛冶屋と別れ、やって来たのは里のはずれの森の入り口だった。

「やあ、しばらくぶりだね、めぐみん。」

「もう、おそいよ。どうせ、ユウヤとイチヤイチヤしてたんでしょー！」
「ふふふ、おはよう、ユウヤにめぐみん。」

そこには、あるえにねりまき、そしてウォルバクが待ち構えていた。

13話

「わあ、外見変わったね。鎧もつけてるし、槍に変えたの?」

「そうだね。帽子もかぶってないし、髪も伸ばしたのかい?」

「何て言うかさ、以前のは、いかにも魔法使いの感じだけど、外見的にえろくなつたね?」

「そんなことはありません!」

「それでウオルバク先生、私とねりまきも魔法学校を卒業できたけど、魔法の発動体としての杖は用意しなくていいっていうのは?」

「うふふ。あるえとねりまき、それにめぐみんの分の発動体はユウヤが用意しているわよ。」

注目されたユウヤは懐をまさぐって三人の少女に手渡す。

「何で私たちが腕輪でめぐみんだけが指輪なのよ?」

それぞれ、マナタイトが嵌め込んであるが、確かにめぐみんは、今指輪をつけようとしてる。

顔もその目も真っ赤だ。

「おい、めぐみん。それは魔法の発動体だからな。

それとな、三人共に、魔力を蓄えることが出来るように細工してあるからな、活用してくれ。」

「それじゃあ、皆で間隔を空けて並んでみて。

魔法制御の訓練をしてみましよう。」

紅魔族というのは、他の魔法使いに比べて圧倒的に魔力量が違う。

例えば、同じ中級魔法のファイアボールを唱えたとしても、その威力は段違いにすさまじい。

けれども、繊細な魔法制御はどちらかというと苦手な部類で、戦闘においても大魔法の連発で圧倒するのが大半である。

「なかなか難しいね。」

「三人だけじゃなく、ユウヤもこれは毎日練習した方がいいわよ。魔法の範囲を絞ったりすれば込める魔力が同じでも威力は上がるし、出力を絞れば、魔力量の節約にもなるわよ。」

特にめぐみんは、爆裂魔法一本なんだから、魔法を放つ度に倒れるなんて無様なことにならないようにね。」

一時間ほどの訓練の後、出ようとした森の奥から、モンスターが襲ってきた。群れをなしたファイアドレークだ。

長剣を構えたユウヤを制してウォルバクが群れに向き直る。

「ねえ、めぐみん。確かに初めてあなたにあつた時、私は爆裂魔法を使つたわ。

でもね、あれは爆裂魔法の威力が必要だったからで、そうじゃないときは、違う魔法を使うときもあるのよ。」

そう言つて行使した魔法は風の中級魔法だった。

「今のは『ブレードオブウィンド』。中級魔法のはずなのに、なんて威力なの……。」

「アクシズ教徒に邪神扱いされてるけど、これでもれっきとした女神なもの。」

魔力量は、紅魔族以上にあるわ。

私が爆裂魔法を頻繁に使うのは、使用後にも対処できるからよ。あ、それと倒したモンスターはあなた達の好きにしていいいからね。」

そう言い残して、ウォルバクは歩いていった。

「それでこれどうしようか?」

「モンスターの素材として売れる部分は引き取ってもらおう。せつかくだから、あるえ

とねりまきの装備を揃える足しにでもさせてもらおう。」

「それでお昼近くになりますが、これからどうしますか？」

あれから、再度武器屋に行きあるえとねりまきの装備を見繕った。

紅魔族ローブの長さを短くしたユウヤ特製の物を渡され、あるえは魔法使い向けの黒衣とシヨートソードだが、ねりまきはユウヤと同様の灰色の皮鎧とメイスだった。

「ねりまきにはな、ブリーストの役割をしてもらいたいんだ。」

「私、アークウイザードだよ？回復魔法使えないし……。」

「お前ら三人のなかでは、ねりまきが一番器用なんだ。このまま回復魔法を覚えるのは無理かもしれないが、転職すればアークブリーストになれるだけのステータスはある。今日、アクセルでのクエストを済ませてから考えよう。」

そう言ってユウヤが少女達に渡してきたのは銀色に輝くサークレットだった。

14話

ユウヤ達は、アクセル冒険者ギルドの裏手に来ていた。

「ここがアクセルか。けっこう大きな街だね。」

「用があるのは、ギルドくらいだからな。」

全員、スキルポイントがたまったらテレポートを覚えてくれ。緊急脱出にも使えるし、場所を決めて落ち合うにも便利だからな。」

「でも私は、これから回復魔法を覚えなくちゃいけないんでしょう?」

「ねりまきも、ポイントがたまってからでいい。」

そうして一行がギルドに入ろうとすると、空き地のほうから、騒がしい声があった。

「ウヒョウ、大当りだぜ。」

「私のパンツ返して〜。」

そこには、ゲスイ顔をして女物の下着を振り回すサトウカズマと、片手をショートパ
ンツの上から押さえて涙目になっている銀髪をショートカットにした盗賊風の少女が
いた。

「カズマ、あなたは一体何をしているのですか?」

「おお、めぐみんか？昨日ぶりだな。」

この娘に盗賊スキルを習ったんだが、ステイル対決になってな、盗れたのが、このパンツだ。

言っとくが、ただで返す気はないぞ。俺も、それなりにリスクを背負っているんだからなあ。」

めぐみんは、何か言い返そうとしてやめた。

あつさり自分をパーティーから放り出した男だ。

ここで言うことを聞くはずがない。

「まあ、そういうわけだから、一緒にいる美人のお姉さん達も、余計な口出しは、……？」
カズマが違和感を覚え、自分の手を見ると、先程まで振り回したパンツがない。

慌てて見回すと、ちようどユウヤが銀髪少女にパンツを手渡しているところだった。」

「その物陰でも手早く履いてきな。」

「うん、ありがとう。私は盗賊職のクリスだよ。」

「俺は、ユウヤだ。言ってみれば、混血の紅魔族だ。それより早く！」

顔を紅くして物陰に隠れたクリスの方をみていると、カズマがこちらに近寄ってきた。

かなり不機嫌な表情だ。

「ずいぶん余計な真似してくれたな。」

正義の味方にでもなったつもりか？」

「おれ自身のためでもあるし、お前自身のためでもあるぞ、サトウカズマ。」

ユウヤがずいっと前に出ると、気圧されたカズマが一步下がる。

「俺としては、あの娘に借りを作って、俺達に協力してもらおうようにしたい。」

そしてカズマは、*“アクセルのクズ男”*の評判を返上したいだろうか？」

「お前、ちよつと何言ってるんだよ？」

「そこにいるクリスの連れの女騎士と俺達全員はお前が女物のパンツを振り回して絶叫してたのを見てるわけだ。」

それに昨日は、往来でめぐみんを見捨てようとしていたのを街の住人にも見られてるだろう？」

苦虫を噛み潰したような顔になったカズマを余所に、着替え終わったクリスを手招きする。

「うん、何かな？」

「ステイル対決ってことだけど、カズマがこう言う対応をする原因がクリスにあるんだろ？」

「うん……………」。最初、私がカズマ君の財布を盗って、取り返すためのステイル対決で、

確率を下げるために小石を大量にポケットに入れたの……。」

クリスの告白にあるえも、なんとも言えない顔をしている。

「理不尽なことをされたと感じたから、それなりの対応をしたってわけね。呆れた。」

ねりまきがやれやれと首を振っている。

「原因を聞けば、なんとなく分かりますが、カズマの対応は、あなたのパーティーの評判が悪くなってこの先いいことはありませんよ。」

「まあ、そう言ってもカズマは納得できないだろうし、年下の俺達に色々言われて不愉快だってその顔に書いてある。だから、騙した形になったクリスは財布の中身を全部渡したらどうだ。」

言われたクリスがおずおずと不機嫌な少年に近寄って、初めに盗った物と、自分の財布を中身ごと差し出した。

「ごめんなさい。君は言わば初心者で私を頼って来たのに騙すようなことしたのは私なのに……、だからごめんなさい！」

「もう、いいよ。スキルはちゃんと教えてもらったし、クリスは謝ってくれたからな。」

でも、勝負なんだから、戦利品の代わりに財布の中身はいただくぞ。」

「それじゃあ、私は割りのいいクエストを探しに行くから。」

その場を去ろうとするクリスにユウヤが声をかける。

「ああ、ちよつと待ってくれ。ペテラン冒険者の助っ人を頼みたいんだが？」

「level38の究極戦士には、手解きは要らないんじゃないの？」

「耳が早いな。でも、俺はともかく、ここにいるあるえとねりまきには、案内が必要だ。

それに、手つ取り早くクエストに行つて金を稼いだ方がいいだろう？」

「OK、一緒についてくよ。ユウヤよろしくね。」

「決まりのようですね、我が名はめぐみん、よろしくです。」

「あるえだよ、よろしく。」

「我が名はねりまき。よろしくお願いします。」

「おい、俺の時と全然違うな？紅魔族特有の名乗りはどうしたんだよ？」

「サトウカズマさんでしたか？私とあるえもユウヤから色々聞かされたから、無用のト

ラブルは避けることにしたのよ。」

「まあ、そう言うことなんだけどね。

君が望むなら仕方ない。

我が名はあるえ。

紅魔族随一の発育にして作家を目指すもの！

どうだい、こんなもので？」

五人になった一行がぞろぞろと歩いて行く。

「ダクネスは、カズマ君に用があるようだから放っておこう。じゃあね、ダクネス。」
「ああ。」

残されたダクネスがおもむろにカズマの方を振り向く。

「じゃあ、私たちも行くかカズマ。」

「ちよつと待て。なんでお前が一緒に行動することになってるんだよ！」

ギルドの依頼ボードから無造作に一枚ちぎって受付に向かう。空いていたのは、露出

気味の若い女性の受付だった。

「え、グリフォンとマンティコアの縄張り争いのクエストを受けるんですか？」

高レベル向けの塩漬けクエストですよ？」

「問題ない。俺のレベルは足りてるし、魔法使いが複数いるから破壊力はある。

ベテラン盗賊のクリスが参加するから、不意打ちの心配もない。首とか、証拠に持つてくる必要もないんだろう？」

「ええ、まあ討伐証明は、冒険者カードに記録されますから大丈夫ですけど。」

「それじゃあ、行ってみよう！」

受付を済ませてさっさと出ていった一行を露出過多な受付嬢、ルナが呆然と見送っている、大声が聞こえてきた。

「気に入らねえな。高レベル冒険者で女を何人も囲ってよ？ 気に入らねえぞ！」

「じゃあ、いつものごとく突っかかって殺されてみるか、ダスト？」

「どういうことだよ、テイラー？」

「さっき行ったのは、盗賊の女の子を除いて全員紅魔族よ。一番小柄なめぐみんて娘は、森でも建物でも容赦なく破壊してデツカいクレーターにしちゃう、はた迷惑な爆裂魔法を使うのよ。」

「リーンの言う通りだぜ。」

先頭を歩いてた銀髪のカキな、この街でも鼻つまみだったあの「ノツポ」の手足へし折って使い物にならなくしちまいやがったんだ。

カキを魔法使いだと思つて油断してた奴を片手で持ち上げて地べたに叩きつけたんだ。

「しまいには、相手が泣いて命乞いしてたぜ。」

「キース、それ本当なのか？」

「俺は、現場にいて見てたんだから間違いないえ。」

あの銀髪のカキはな、毒とか呪いとかも効かねえんだよ。ダスト、お前が突つかかるんなら、死ぬ覚悟で行けよ。」

「チつ、そんなんじゃ割りに合わねえよ。」

「やめだやめだ。」

「まあ、あいつらはここにずっといるつもりもないようだしな。」

「そういうこと。触らぬ神に祟りなしてね。」

「最近来たもう一組のパーティーがいかに初心者つて感じなのよ。」

「おい、そつちにも紅魔の娘がいただろう？」

「ああ、あつちは大丈夫だ。紅魔族の異常なところは目立たなかったからな。」

「よし、ターゲットは決まったな。」

近いうちにそっちの狙い目のパーティーに難癖つけて、どうにかしてモノにしてやる。」

「あんたはその前に私に借金を返しなさい！」

大声で話していたので、ルナや、酒場にいる他の冒険者にも筒抜けだった。

結果、ユウヤのパーティーに手を出す危険性を皆が共有したという。

15話

「すごいよ!!半日くらいかかる距離を一時間位で到着しちゃうなんて!」

「荷物をそれなりに背負って走ったのに、全然疲れていませんね……………」

ユウヤ達はギルドでクエスト受注をしてからすぐに出発した。

事前準備を主張したクリスに言われ、最低限の装備で、城門前から全力疾走を始めた。

普通なら着かない距離を、ユウヤの魔法、聖なる唄《ホーリーソング》の効果で目的地まで短時間で到着してしまった。

超級魔法を取得したユウヤが思い付いたのは支援魔法の良いところ取りで対象の攻撃・防御は元より、スピードや気力も底上げする優れものだ。

「超級魔法と言うのは便利なものですな。」

それだけに、ユウヤが回復魔法を習得できないのは意外でした。

「まあ、そのためにもねりまきに期待したいんだが?」

「うん。まだ踏ん切りつかないから、今日は手持ちの回復アイテムでね。」

「“ねりまき”だったっけ?せつかくアークウイザードなんだから、他のパーティーに行けば、大事にしてもらえるのに。」

「クリスさん、私たち二人は、ユウヤと一緒にやなければ、冒険者として紅魔の里から出る必要性を感じないね。」

「あるえの言う通りかな。めぐみんだけユウヤと一緒になのはムカつくし。」

「何ですか、それは？ケンカを売ってるんなら買いますよ。」

紅魔族は売られたケンカは買う種族なんですよ！

「どうやら、騒がしくしてたから、向こうから来てくれたようだな。」

「待って、敵感知に反応の数が多いよ！

大物が三体に……、なんでオーガが十体もいるの!？」

「ちよーどいい。迎え撃つぞ。」

「なに言ってるの？討伐対象の他にオーガも十体も来てるんだよ？」

クリスが喚いてる間にオーガに囲まれてしまった。

少女三人が顔を青くしてもユウヤは涼しい顔をして指輪をはめた左手を顔の横まで挙げて魔法を唱える。

「ホーリーテリトリー」

次の瞬間、少年から白銀のオーラが広がり眼前まで迫っていたモンスターを後退させた。

「敵は内部には入ってこれないはずだ。

それは安心しろ。

こつちからは攻撃できるからな。

クリスのバインドを使えばいけるだろう。

あるえとねりまきも一緒にオーガを攻撃しろ、三人で十体だ。」

「ユウヤ、私はどうしたら？」

「マンティコアが相手だ。」

槍で牽制しながら、爆裂魔法の詠唱開始だ。

相手が魔法を撃ってきてても、攻撃は通らない。

教わった魔法制御を頭に入れて、爆裂魔法をぶっぱなしてみろ！」

それぞれに指示をすると、ユウヤは飛行の魔法で上昇していった。

グリフォンは鷲の翼と上半身、獅子の下半身を持つとされる合成獣だ。

「それが、一体じゃなく二体もいるとはな……。」

だけど、こつちの反応速度も上がってるんだ。

この飛行魔法だつてなあ！」

挟み撃ちにしようとしてきた一方に突撃し、すれ違い様にその首を切断する。

ユウヤが手にしている黒い長剣は、直前に唱えた魔法により白光を放っていた。

背後に迫ってきたもう一体を認識しながら、急上昇。真つ直ぐ飛行するグリフォンの背中に飛びのり、猛烈に暴れる敵の首筋に逆手に持った長剣を渾身の力で突き刺した。

「くたばれえー！」

墜落するモンスターに馬乗りのまま、荒れた地面に衝突した。どうやら、運良く死体がクツションの

役割を果たしたようで、目立った傷は無かった。

「ふん。」

二体共に近場に落ちたから、手間が省けたな。」

「さて、私たちも任された役割を果たさないとね。

うわつと!？」

オーガの群れに向き直ったクリスに向けられたのは巨大な棍棒の歓待だった。

思わず飛び退いてしまったが間に存在する白銀の障壁が敵の攻撃を弾き返した。

「防御を気にしなくていいんなら、楽なもんだよね、バインド！」

「さあ二人ともどんどんいってみようか♪」

「カースドライトニング！」

「おかしいね、ねりまき。私にとって初めてのクエストで高レベルのモンスターが相手なのに、気持ちに余裕があるんだよ。」

「それはね！ 私たちの身に危険がないようにユウヤがお膳立てしてくれたからよ！」

「ようし、カースドライトニング！」

「わっ！ 君たち、そんな大魔法バンバン撃って魔力は大丈夫なの？」

「ご心配なく。紅魔族は伊達じゃないよ。」

「まだまだ全然イケるよ♪」

「そう言うことさ。」

「同世代の魔法のエリート集団だからね私たちは。」

「それを夢中にさせるんだから、やっぱりユウヤは特別だよ。」

「三人娘がおしやべりしながら、軽やかにダガーを振るい、続けざまに魔法を放っていたら、気づいたら、彼女たちを攻撃していたオーガの群れは全て地に伏せていた。」

マンティコアは頭部が老人の顔で獅子の胴体を持ち、さそりに似たその尻尾には、毒針を備えていると言われる。

他のチームが順調に戦っている中、めぐみんは苦戦していた。

障壁ごしとはいえ、槍を振りながら長い呪文を唱えるのは、集中力を費やす行為だった。

「シヨンベン臭え娘っこにぶつといのをブスツといくぜ？」

突進して来たモンスターの前足の一本を槍で縫い付ける。

通常なら不可能だが、ユウヤの支援魔法で身体能力が上がった彼女には出来た。

素早く下がり詠唱を完成させる。

「させませんよ。我が名はめぐみん、紅魔族随一の天才にして爆裂魔法をあやつりし者！

喰らうがいい。

これが、人類最強の究極魔法、"エクスプロージョン"!!」

爆風が晴れたそこには、焼け焦げたかつてマンティコアだった小さな残骸と崖崩れのようになった洞窟の入り口だった。

「うわあ、派手にやったねえ、めぐみん。」

「物を壊しちや駄目じゃないか、また守衛さんに叱られるんじゃないかい？」

「アクセルの街から離れてるんだから大丈夫です。」

それにどうしてその話を知ってるんですか？

クリスですか？」

「私は知らないよ。めぐみんが毎回守衛さんにペコペコ頭を下げてるなんて知らないよ」
♪

「やつぱり、あなたじゃないですか。それなら、私にも考えがありますよ！」

額に青筋を浮かべためぐみんが、クリスに詰め寄ろうとしたところで、ユウヤがこちらに近づいてきた。

「そういきり立つなよ、めぐみん。」

魔力消費を節約できて、倒れないで済んでるんだから、ウォルバク先生の指導に感謝だな。」

「そうですね。でなければ、私は今ごろまた倒れて指先一本、動かせていないでしょう。」

まあ魔力はすつからかんですが、体が動くだけ前よりましです。」

「もうそろそろそれ暗くなるよ。」

可能ならば、すぐに帰還しよう。」

「グリフオンの頭と翼、マンティコアの頭と尻尾くらいは持ち帰ろう。」

各自で可能な範囲でモンスター部位を持ち帰ることにした。冒険者カードを見せれば、討伐は証明されるが、動かぬ証拠を見せれば説得力があるし、なにより、紅魔の里の鍛冶屋に持っていけば、装備品に加工する原料にならないかと考えた結果だった。

やがて準備が済んだ全員がユウヤの側に立つ。

各々が返り血で汚れていたがその表情は晴れやかだった。

「よし、じゃあ行くか。テレポート」

こうして、めぐみんの再出発のクエストは成功に終わった。

16話

夕方の喧騒。

酒臭い息の冒険者達が管を巻く冒険者ギルド。

気だるげな雰囲気だったそこは、入り口からの血の匂いと複数の足跡で騒然とした。

「おいおい、どうしたんだクリス。」

お前だけじゃなく全員血だらけじゃないか？」

「ああティラーじゃない♪これね全員返り血だよ。」

なんと、私達は、依頼を受けた当日にグリフォン二体とマンティコアを討伐しました

♪」

「おい、冗談だろ？そのクラスの依頼なら、下手したら複数の高レベルパーティーの仕事
だぜ。」

その場にいた他の冒険者も疑わしそうにしていたが、後から入ってきたメンバーを見てギョツとした表情になる。

全員が深紅の瞳を輝かせ、てんでに討伐の証としてグリフォンの頭部と翼を二体分、マンティコアの頭と尻尾を携えていたからだ。

「みなさん、討伐帰りなのは分かりますが床が血だらけになってしまいました！」
「あく悪かったな。『スペシャルクリーン』」

ギルド職員の声でユウヤが魔法を唱えると、入り口から続いていた血の痕や、彼ら全員の反り血や汚れがぬぐったようにきれいになった。

「じゃあ、急いでるから今回は皆で受付に並ぶぞ。」

クリスも来てくれ。」

「はい。今日は財布をぶんどられちゃったけど、結構な臨時収入になってウハウハかな。」

「おい、銀髪野郎と一緒にいたのは、はた迷惑な爆裂娘だぜ。」

「服装が変わってたけど間違いねえ。」

あの小娘は、口ばっかりで全然役に立たねえから、俺は見捨てただけだよ。

あの銀髪野郎も含めて全員紅魔族だぞ。」

「うかつにチョツカイかけられねえな。」

他の冒険者の注目を集めている少年たちは、クエスト完了の報告をしている最中だった。

「討伐報告は、冒険者カードを提示頂ければ、証明できるとご説明したはずですが？」

「外見が子供の青二才だ。証拠でも持ってきた方が説得力があるかと思つてな。」

「私とねりまきは、今日が冒険者デビューの様なものだからね。派手にいかないと。」

「うん、インパクトは大事だよ。ほら、私たちは紅魔族だし♪」

カウンターでわいわいやつてるので、奥にいたカズマパーティーがこつちに近づいてきて、ゆんゆんがやって来た。

「めぐみん、グリフォンやマンティコアを討伐してきたつて本当？」

「おや、ゆんゆんじゃないですか。私は一人でマンティコアを仕留めましたよ。」

その他にも一緒に出てきたオーガをあるえとねりまきとクリスの三人で十体も血の海に沈めました。」

「ええ？オーガを十体も？あれ、じゃあグリフォンは？」

カードをまとめてカウンターに出したユウヤが振り向いて親指で自らを指差す。

「あつという間に私たち囲まれちゃったんだけどね。ユウヤの魔法障壁？で守るよう
に周囲を囲んでもらったら、私達へのモンスターの攻撃が全然つ、効かないんだよ。」

加えて、支援魔法までかけてもらつて勇氣百倍、楽勝だったね♪」

「私たちも初クエストなのに、緊張しなかったもん。」

ねりまきも興奮して大声になり、あるえも楽しそうにしている。

「そう言えば、ゆんゆんとは久しぶりだね。」

昼は声をかけられなかったけど、変わりないかい？」

ゆんゆんが返事をしようとしたところで、計算をしていたルナが顔をあげた。

「提示されていた報酬は500万エリスですが、グリフォンが一体多かったことと、追加でオーガ十体の討伐が確認されました。」

持参されたグリフォンの頭部と翼、マンティコアの頭と尻尾を買い取りにしていただけたなら、合計で1100万エリスを支払うことができそうですが？」

「じゃあ、それで頼む。あ、皆ここで分配してしまうからな。」

彼らは、皮袋をもらい、その場で分配を済ませてしまった。

金を受け取ったクリスが浮き浮きして注文しようとするとその手をめぐみんがつかんでいた。

「どうしたのさ？クエストが成功したんだから、打ち上げしようよ。」

「ええ、打ち上げはしますとも。」

クリス、あなたは助っ人とはいえ、私たちと同行し、一緒にクエストを成功させたのです。

「言わばもう、私たちパーティーの仲間、一蓮托生と言っても過言ではないでしょう。なので打ち上げは、我々の紅魔の里にて行うことにします。クリスマスも強制参加ですよ。」

「ええ？」

盗賊少女は、困惑した。いつのまにか近くによつて来たダクネスを見たがクルセイダーの金髪美人は、無反応だった。

「それにですね……………」

つかんでいるめぐみんの力が強くなって微妙に痛い。抗議しようとしたら彼女の目の光が強くなって怖い。

「ユウヤがクエストに誘った時、あなた、ずいぶん、うれしそうにしましたね？」

そのこともじつくり聞かなくちゃいけません。」

「あの、もう遅いから出発は明日に……………」

「それなら、大丈夫だよ。ユウヤのレポートであつという間だから。」

「ふむ、そうだね。ねりまきの処で宴会してもいいし、そのまま泊めてもらつてもいい。

なんなら、ユウヤとめぐみんが一緒に住んでる所にお邪魔するかい？」

めぐみんたちの会話を聞いていたゆんゆんは愕然とした。たつた今、聞き捨てならぬ言葉を自分の耳が拾ったのだ。

「ねえ、どうゆうこと？今、ユウヤとめぐみんが一緒に住んでるって聞こえたんだけど？
ねえ、ちゃんと説明してよ、めぐみん！」

「何を驚いているのですか？」

ユウヤは私の夫ですよ？この男は、有り金はたいて、コメツコ名義で家族の家を。そして、隣に私たちの家を建てていてくれたのですよ。

里では、周知の事実です。」

目眩がしてへたりこんでしまったゆんゆんを放り出して、クリスの手をつかんだまま、めぐみんは外に出てしまった。あるえとねりまきもそれにつづく。

「せっかく、加入できた。パーティーだ。」

すっかり頑張つて経験を積むようにな。」

すっかり元気のなくなつてしまったゆんゆんに声をかけて、最後にユウヤが出ていった。

「おい、ゆんゆん大丈夫か？」

心配したカズマが声をかけるが、へたりこんだ少女の目は虚ろだった。

「ユウヤ……………、ユウヤ……………」

17話

ユウヤ達が出て行って、ギルドには喧騒が戻った。カズマのパーティーも、元のテーブルに戻ってきたが、ゆんゆんはシヨックを受けたのか目の焦点が定まらず、ぶつぶつ独り言を呟いている。

「おい、あれ大丈夫なのかよ?」

「好きな男が自分の友人とすでに一緒に住んでいて、相手の家族も公認ともなればダメージも計り知れないだろう。」

「なんだよお。こちとら空飛ぶキャベツと大汗かいて格闘して、なんとかまとまった金が入るあてができたと思つたのに、パーティーの良心のゆんゆんが使い物にならなくなるのは、勘弁だぜ。」

「大丈夫よカズマさん、この水の女神たるアクア様とついでにクルセイダーのダクネスがいるのよ。大船に乗つた気でいなさいな。」

「うむ、あてにしてくれ。」

「そういつてもなあ。」

「なによヒキニート! 私たち二人が頼りにならないとも言うつもり?」

「うるせーこの駄女神とドM騎士が！」

アクアは、キャベツに転ばされてただ泣いてただけだろう。

ダクネスに至っては攻撃を受けてもだえてただけだ。このパーティーで曲がりなりにもまともなのは、ゆんゆんだけなんだよ！」

その肝心のゆんゆんは、カズマたちの言い争いにも反応せず、うつむいていた。

「やっぱり、離れているのがいけないのかな？」

めぐみんだけじゃなく、あるえやねりまきもどうして一緒にいるのよ？なんか、あのクリスって人もユウヤを見る目がなんだかあやしかったし……。」

「おい、ゆんゆん。大丈夫なんだよな？」

「カズマさん？どうしたんですか？私はどこもおかしくありませんよ。」

（重症だよ……。）

「さあ、着きましたよクリスマス。ようこそ紅魔の里へ！」

めぐみんが以前より短くなったマントをひるがえし、ポーズをとる。

「ユウヤ、どうするの？暗くなるから、真っ直ぐうちの店に向かう？」

「いや、今日はパーティーの結成式みたいなもんだ。時間がかかるから、ねりまきの親父さんに料理を運んでもらおう。」

「それなら、うちだけじゃなく、あるえの家にも挨拶しといた方がいいと思うの。」

「ふむ……、それでは、クリスマスは私が連れていきましよう。私の方でも料理は用意しておきますから、貯蔵している材料を使いますよ。」

すぐに暗くなります。あるえの家から先に廻って急いで行つてきてください。」

そう言つてめぐみんがクリスの腕をつかんで行つてしまった。

「それじゃ、俺はあるえの家に行つてくる。」

後からねりまきの店に行くから頼むぞ。」

「あるえをおまえんとこに泊まらせる気なら、未長く面倒見てもらふことになるぞ！」

「ちよつと待つてください。冒険者のパーティー仲間になるだけですよ？」

「あるえは、その気のようだがな？今さらジタバタするなよ？」

バタンツと音をたてて入り口の扉が閉められた。

「あるえのじいさんもあいかわらずだな。」

「祖父のことは謝っておくよ。でも、私も期待してないっていったら、嘘になるかな？」
「……………さつさとねりまきの所に行くぞ。」

「よお、ユウヤ。うちの看板跡取り娘をかつさらおうとは、覚悟できてんだろうな？」

「親父さん、ねりまきはパーティーメンバーになってもらっただけですよ？」

「わざわざ、回復魔法を覚えさせるためにクラスチェンジ転職させようってんだ。

プリーストをどっかから連れてくるんじゃないよ。

もちろん、うちのねりまきじゃなきゃいけない理由があるんだよなあ？」

「私は、別に特別なことは言っていないよ。」

宴会して、打ち合わせとか遅くなったら泊まるかも？とは言ったけど。」

「はあ……………俺達二人しか住んでないし、それなりに部屋は空いてるから、ちゃんと一人一部屋で寝られるよ。」

ねりまきの父親にも手伝ってもらい、つまみと酒を運んでくると、めぐみんが貯蔵していた材料を使い料理の最中だった。

隣からひよいさぶろうとゆいゆい、それにこめっこも来ていて、すでに着席している。「ユウヤ遅かったではないですか？」

ついでにこめっこ達も呼びましたよ。」
「やったーお呼ばれだ〜♪」

楕円形の大きなテーブルに持ち帰った料理を並べた途端にひよいさぶろうとこめっこがほとんどたいらげてしまった。追加でめぐみんが作っていた料理も置いたそばからなくなっていく。

全員、競争のようにながつつき、ゆいゆいは、それをニコニコしながら眺めていた。

さいごの料理を運んでめぐみんがユウヤの隣のイスに座った。

「やっと一段落です。なにげにこの家で調理するのは初めてですが、材料ほとんど使ってしまいましたよ。」

「また、ためこんでおくよ。腐らないように地下に仕舞っておいたんだがすぐに分かったか？」

「ええ、大人数なので思いきって大量に作ったんですがどうですか？」

「さすがだな。ゆいゆいさん直伝の味なのかな？」

美味いよ。」

「それなりに仕込まれましたからね。」

材料は、過保護な誰かさんがこまめに補充してくれたので私が料理する機会もたくさんあったというわけです。」

いつもは口一杯に食べ物をおぼるめくみんが、比較的ゆっくり食べながらうれしそうに笑って会話をしている。

それがあるえやねりまき、特にクリスは、驚いて見ていた。

「めぐみんてば、言っちゃなんだけど、ユウヤと再会する前と全然印象が違うね。今すごいっ、おしとやかに見えるもん。」

「恋は女を変えるとどうやつかかな？」

「なんか別人みたい。雰囲気柔らかいって言うか……。」

少女たちの感想を彼女は余裕の表情で受け止めた。

「ふっ！あなた達に何を言われてもこたえませんよ。」

ユウヤは私の夫です。パーティーに加入できたことで満足し、この男に色目を使うのはやめてもらおうか? クリスも分かりましたね?」

「イラっとくるね。ひよいざぶろうさんの前だけど」

諦める気はないよ。」

「なんか、むかつくな。手は引かないよ。」

「私はその気はないんだけどな……………」

「嘘をつくのはやめなさい。どうして顔が赤くなっているのですか?」

「これは、お酒を飲んだからだよ。」

「なんだか怪しい!」

料理も空になり、持ってきた酒も飲み尽くされて、こめっこ達は、隣家に帰っていった。

夜も更けたので、クリスを置いてあるえとねりまきは帰り支度を始めたのだが、そのクリスのことで相談があるからとユウヤに引き留められたのだ。

「地下にある風呂は広めに造ってある。」

先に女同士で入ってくるという。」

そう言われて女四人で入浴したのだが他の三人がさつきからじつとめぐみんを見ている。

「なんですか？私の体をじつと見て言いたいことがあるなら、聞こうじゃないか。」

「めぐみんて、髪を伸ばしてるのってユウヤと知り会ってからだよね？彼の好みに合わせてるの？」

それだったら私にもチャンスアリだよね♪」

「ねりまき、寝言は寝てから言いなさい。」

「じゃあ、めぐみんの胸は前より成長したかい？」

「もしかして、もう、いろいろしちゃってるの？」

クリスも顔を赤くしながらも興味津々で追及する。

「何を言うかと思えば……………」

成長したのは、胸だけではありませんよ。

栄養状態が改善したので、身長もしっかり伸びています。ユウヤに感謝ですね。

さあ、ユウヤが順番を待っているはずですよ。

私は、先にあがりますよ。」

そう言つてめぐみんはさっさと風呂場から出ていってしまった。

「あつ、いろいろしてるのか聞きそびれたな。」

18話

あの後、交代でユウヤも風呂に入り、今は就寝前でくつろいでいるところだ。

「あのさ、今日は良くしてもらってありがとう。」

それで言いにくいんだけど、私は自分の都合で君達といつも一緒にはいられないんだ。ごめん。」

「知ってるよ、エリス。女神としての勤めがあるんだろう?」

盗賊少女は愕然とした。今この少年は何と言った?

「何言ってるのさ? 私の名前はクリスだよ。」

私は熱心なエリス教徒だけど、むやみに女神様のお名前を呼んじやいけないんだよ?」

「クリス、どうしてそんなに動揺してるんだい?」

さつきからなんかおかしいね。」

あるえの指摘にクリスは脂汗をかいている。

黙ってしまったクリスをユウヤと同じソファに座った三人の紅魔の少女達もいぶかしげに見ている。

沈黙が続くかと思われた時、ため息をついたユウヤが指をならした。

「ユウヤ……この家の周りを障壁で囲いましたね。」

秘密の話ですか？」

頷いたユウヤが立ち上がる

「ああ、めぐみんの言う通りだ。」

ここにいるみんなはよく聞いとけよ。」

「我が名はユウヤ。紅魔族随一の究極戦士にして、前世の記憶を持つ者。そして幸運の女神に導かれて、この世界に転生せし者。」

一同絶句していた。めぐみん以外は、ユウヤに関して前世云々の話は全く聞いていなかったからだ。

「どう言うことなの？」

「それを今から説明するよ。」



漆黒の闇に包まれた空間。

そこにポツンと二つの椅子がおいてある。

一方の椅子には病人が着るような衣装をまとった少年が座っていた。

病身からくる細身な体は、けれど決して不潔な印象ではなく、意思の強さを表す瞳を秘めていた。

もう一方には輝く銀髪の少女が、司祭のような服装で座って少年を見つめている。

「はじめまして、草薙優也さん。」

私は幸運の女神エリスと申します。大変残念ですが、貴方の人生は終わってしまつたのです。」

「俺は死んだのか……………」

「ずいぶん冷静ですね。ここにこられた方は大抵の人がひどく動揺するものですが？」

「いやまあ、突然倒れて入院したけど、最期はずいぶん痩せて体にも力入んなかったからね。」

「どう見てもありや、むりだろう。」

「あなたは、白血病だったのです。病院も治療に手を尽くしたのですが、残念な結果になりました。」

「しょうがないよ、あんたのせいじゃないし。」

「厳密に言うと、優也さんはまだ一ヶ月以上は生きられるはずだったのですが、看護師が点滴の作業を間違えてしまい、手遅れに……。」

「まさか、あんたが原因か？」

「いえ、本来はここは、私の先輩で水の女神のアクアが担当なのですが、お菓子を食べながら宴会芸を練習してて道具を落としてしまったのです。」

「まさかそれが、点滴作業中の看護師に当たったなんて言わないだろうか？」

「……………申し訳ありません。」

「はあく医療ミス、実は女神の失敗のせいとはなあ……………。それで、俺はこれからどうしたらいいんだ？」

「あの、私や先輩を責めないんですか？あなたは、理不尽にも死ななければならなかったんですよ？」

「責めて俺が生き返れるんなら責めてるよ。」

でもそれが可能なら、とうに俺は生き返ってる。

俺がここにいてことはそういうことだろ？」

「本当にすみません。それでは優也さんには三つの選択肢の中から道を選んでいただきます。」

一つ目は天国に行つてそこにいる魂の住人達と日向ぼっこしながら、世間話をしてずっと穏やかにすごすこと。二つ目はあなたのいた地球で、記憶をリセットして赤ん坊から生まれ直して新たな人生を歩むこと。」

「うーん。天国がそういうところなら、あんまり行きたいとは思わないかな。」

地球で生まれ直すのも、記憶がリセットされた時点で別人になるってことだろう

………?

もしかして、三つ目があんたのお薦めなのか？」

「はい。私が本来、管理している世界では、魔王軍の侵攻により、人間の数がどんどん減つてしまつていゝんです。魔王軍に殺された人達は、その世界での転生を拒否する人が大部分で、減つた人口を別世界からの転生者で補おうと言う政策です。」

「待て待て。俺みたいない一般人がそんなところに行つても、すぐに死んでしまふだろが。」

「ええ。ですので何か一つ、伝説の武器や防具、それか凄い才能やスキルなど、どれでも一つ選んでもらつてます。今回は、大変ご迷惑をかけてしまったので、特別に二つの要望を受け入れます。」

「……………苦労性の女神エリスに格好つけてみるか。」

「それじゃあ?」

「うん、俺は異世界に行ってみるよ。」

「ありがとうございます。それじゃあ。」

「あー、その分厚いカタログみたいなのはいいや。俺が要望を言ってみるから、可能な範囲で実行してくれ。その中にあるかもしれないからな。」

「はい分かりました。」

「そうだな……………魔法は使いたいが……………いや、仲間がすぐにできない場合は、魔力切れの魔法使いは無力だ。剣も魔法も最強を目指せる究極の魔法戦士が希望だな。最初から無敵じゃなくていい。」

ただ鍛練を続けていけばどこまでも能力が上昇する才能が欲しい。これがひとつ目だが、できるか?」

「確認してみます。……………お待たせしました。初めから高水準の能力値でなければ可能です。」

カタログにある能力上昇限界突破というものに、パラメータを少しいじるだけです。

それでもう一つは?」

「俺がこんな感じで死んだのは、たぶん運の悪さもあるかもしれない。だから、幸運の女神であるエリスに困ったときに手助けして欲しいんだ。」

そう言われたエリスは真剣な表情になり、その片手を優也の胸の辺りに当てた。

「確かに素の状態だと、優也さんの幸運値は低いです。女神エリスの祝福をここに授けます。」

“ブレッシング” 直接、魂に刻み込みましたから、毒や呪いなどの全状態異常も無効になりましたよ。

貴方が大変なときは、必ず私が力になります。

頼ってくれてありがとうございます。」

エリスが穏やかに微笑むと、優也の全身が白銀の光に包まれた。

「その光は、普段は他人には見えません。」

貴方が危機に陥った時、全力を出す状態になったら光輝きます。ありがとうございます、エリスの白銀の使徒よ。」

「それでは、いよいよ貴方をあちらに送ります。」

魔方陣より出ないでください。」

「そうやって、魔方陣が作動を始めたときにドタドタと無遠慮な足音が空間に近づいてきた。」

「あーら、エリスく何やってるの〜?」

「何ってアクア先輩がさぼって押し付けてきたから、死者の方の転生のお世話をしてい
るんです。」

「うわっ酒臭い!ちよつと抱きつかないでください!」

「ふふん、エリスはイイコちゃんだもんね!」

「何よアンタ!何も知らない転生者に自分の信者になるように強制したの?」

「強制なんかしてません!彼が困ったときに助けてあげられるように目印をつけただけ
です!」

「何よ何よ色目使っちゃって!アタシもやるわよ!」*ブルレッシング*」

「優也の背中が青白く光耀き、集束して翼の形に形成された。」

「やめて、先輩暴れないで〜」

「*魔方陣に異常発生。転送先と時間軸が大幅にずれています。修正は不可能です。*

「ヤバー私知らないって!」

「ああ、ごめんなさい優也さん。

いつか、必ず合流してずっと一緒にいます。

あなたを支えます。いつか必ず探し出します。

優也さん。」



「……………とまあ、これがことの顛末だ。

本来なら、転生ではなく転移。年齢や外見はそのままアクセルに送られるはずだったんだけどな。

赤ん坊からやり直し、気づいたら親父は殺されてて、紅魔族の母親と片田舎で二人暮

らしだったよ。その母親も死んじまって、やっと戦える年齢になって形見の剣を抱えて紅魔の里までやって来たわけさ。」

「そんな大変だったんだ。よく生きてここにたどり着けたね……。」

ユウヤの述懐にねりまきが気遣いを見せる。

「しかし、貴方は一度死んで紅魔族としてこの世界で新たな生を受けたのです。

私たちと違うのは、前世の記憶があるかないか、それだけです。

ユウヤ、今の貴方は草薙優也ではなく、この私、“紅魔族最強の魔法使いめぐみん”の夫のユウヤです。」

「ありがとう、めぐみん。」

「話の途中みたいだから、いちやつかないでくれるかい。」

めぐみんとユウヤが二人の世界をつくろうとするのをすかさずあるえが阻止する。

「それで、ここにいるクリスが女神エリスご本人なのかい？」

皆から見つめられたクリスは覚悟した表情をすると身体全体が白銀の光を帯びる。

光の中の人影が二体に別れ、盗賊少女の隣には白銀の髪の女神が微笑んでいた。

「私はさ、孤児だったんだ。アクセルのエリス協会の前に捨てられていてね、孤児院で世話になってただけど、小さい頃に熱病にかかって死にかけてた。」

ううん、実際は、一度心臓が止まったんだって。

生き返る時にエリス様の声を聞いたんだ。

命を助ける代わりに、エリス様が地上で活動する時に体を共有させてほしいってね。私はそれを受けたんだ。だから、エリス様が天界にいる時にも、パスのようなものが繋がっていて、意思疎通もできる。

今みたいな時は、盗賊のクリスでもあるし、意識はエリスでもあるんだ。

ただ地上では、女神エリスの能力は使えないんだよ。」

「この娘は、確かに一度死んでいます。

私が見つけた時

には、息が止まっていました。

当時在籍していたエリスの神官では、生き返らせるのは困難でした。けれど、私なら可能でした。

幼少から孤児院で過ごしていたクリスは、私との波長がぴったり合っていました。

私ことエリスは、この娘と意識のパスを繋ぎました。そして、地上で活動するときは一体化してクリスとして動いていました。

でもこの頃は、地上で活動するのが長くなっていました。」

「あのクルセイダー、ダクネスとは、どうやって知り合っただんだ？」

「あの娘は、有力貴族の娘です。」

冒険者にはなつたんですが、あの性癖で受け入れられず、いつも一人でした。友人ができるように教会で祈りを捧げていたのです。」

「で、どうするんだい?」

あるえが尋ねると間髪いれずにユウヤが答える。

「もちろん、このままパーティーにいてもらう。」

人間のクリスとしてな。

どうせ地上では、女神の能力は使えないんだらう?」

「ええ、例外的に悪魔を滅したりする場合、天上から直接降臨する時がありますが、この姿だと極端に活動時間が短いのです。」

「この家に間借りして、基本クリスは一緒に活動してもらう。合流できるときは、エリスにも参加してもらいたい。」

それを受けてエリスは困惑している。

「先程のこちらの都合と言うのは、女神である私のお仕事に関して地上で動かなければならない場合があるのです。」

「その時は、そちらの都合を優先してかまわない。」

ただ合流する時に、ベルゼルグ国内の情報を仕入れてくれると助かるかな。」

動かなくなってしまうた銀髪女神の背中を盗賊少女が勢いよく叩いた。
「何をためらってるのかな？」

責任感じてたんでしょ？会いたかったんだよね？

ユウヤの手伝いがしたかったんだよね？

ほらー！」

背中を押されてエリスはユウヤにしがみついてしまった。遅れてクリスマスも飛び込むと、女神と、盗賊少女が一体化して少年の胸にすっぽりと収まる。

「私を、私たちをよろしくね。」

頬を紅くして挨拶したクリスマスだが、次の瞬間に力任せに引き剥がされた。

「ふふふ………やっぱ怪しいと思ったのですよ。」

おい、私の夫に色目を使うのはやめてもらおうか？

クリスマス、あなたはあくまでパーティーの一員と言うだけですからね。わきまえてもらいましょうか。」

そこには、瞳を爛々と光らせたためぐみんなが威嚇していた。

「そんなことより、クリスマスだけここに住むなんてズルくない？私も住みたい！」
「できれば私も希望したいねえ。」

「いや、今日はしようがない。」

「たまに泊まるのはかまわないが、あるえもねりまきも里に家があるんだから自分家に帰れ。」

話が終わって案内された部屋のドアに各自ネームプレートをつけてユウヤに向かって笑いかけた。

二人の寝室に入るとユウヤがさつきとベッドに入る。それを見ためぐみんは、すばやくユウヤの懐に潜り込み自分の頭を少年の胸にすり付けた。

「おい、めぐみん?」

「私は負けませんよ。ええ、負けませんとも!」

「……………もう少し先にしようと思ったけど、お前が14歳になったら、すぐに式を挙げるか?」

「その約束、忘れないでくださいね。」

やがて、部屋に規則正しい寝息が聞こえてきた。

19話

早朝の紅魔の里の外れ に立ったユウヤが後ろを振り替える。

めぐみん・あるえ・ねりまきがそれぞれ装備をつけて佇んでいた。

「朝食の前にモンスター狩りをして食料と資金源を得ようと思ったんだが？」

「今日からは、可能な限り私たちも参加するよ。」

「あく、それなら戦闘前にスキルの振り分けをしておこう。」

ユウヤがめぐみんとあるえに冒険者カードを出させていると、遅れてクリスが眠い目をこすりながら、こちらにやって来た。

興味津々でクリスがのぞきこむなか、話が進む。

「まず、めぐみんだが、攻撃魔法は、爆裂魔法一本だから、呪文詠唱省略と消費魔力の軽減に絞るべきだろう。魔法制御を磨いていけば、爆裂魔法の威力も今よりもっと上がるはずだ。」

「魔法の威力上昇にポイントを振り分けるのはその後ですか？」

「将来的な話だが、高威力の爆裂魔法を二発以上打って、尚且つテレポートで移動できるようになれば、ウォルバク先生にも胸を張れるんじゃないか？」

そう言ってやれば、めぐみんはうれしそうにする。

聞いていたクリスが驚いたように声をあげる。

「ちよつと待って、ウォルバクってあの「怠惰と暴虐の邪神ウォルバク」なの？」

「クリス……どういう意図で言ったのか知らないが、ここは紅魔の里だ。」

女神ウォルバクは、エリスやアクアより古い女神で

信者も少数派だが、封印して邪神認定したのは、アクシズ教徒だよ。

まったくあの連中は、ろくなことしないな。」

「でもウォルバクには、上位の悪魔が付き従っているって聞いてるよ。」

混乱しているクリスが、後ろからの足音に振り替えると赤毛の短髪で猫の目のように瞳を細くした妙齢の女性がやって来た。



「初めましてかな？ 私はウォルバクよ。

中の女神共々よろしくね、お嬢さん♪」

ウォルバクに指摘されて、思わずクリスの体から女神エリスが分離する。

「ずいぶん警戒してるようだけど、今の私はこの里の魔法学校の教師なのよ。」

緊張した空気を頭から無視してめぐみんが発言する。

「二人ともウォルバク先生が名乗ったんだから、あなたたちも自己紹介しなさい。」

「先生が紅魔族流の名乗りをしなかったらとまどってるんじゃないかな？」

ねりまきが、そう言うのと、ウォルバクが、ニヤリとして片手を斜めに突き上げた。

「我が名はウォルバク、怠惰と暴虐の女神にして魔王城に愛想を尽かしたもの！」

魔法学校の教師にして、下僕の悪魔を酒場のウェイトレスと子守りに従事させている者！」

聞いている紅魔族一同が平然としているなか、エリスは口を開けてポカーンとしてしまったが、クリスが顔を紅くして口上を始めた。

「我が名はクリス。盗賊を生業とした冒険者で女神と意思の繋がりのもの！」

貧しき人々を救わんと義賊を志す者！」

その後クリスがじっと見てくるので、銀髪の女神は、恥ずかしそうに口を開く。「幸運の女神のエリスです。ユウヤさんの手助けがしたいです。」

そう言った彼女はそのままクリスの中に戻ってしまった。

「彼女はどうしちゃったのかしら？」

「うん、それがさ、名前を言った後の一言がかなり恥ずかしかったみたいなんだ。」
答えているクリスも真っ赤になっている。

「先生が来てくれたからスキル配分について話を戻そう。」

そこで、めぐみんに対してのスキル配分はウォルバクも賛成した。

「並列呪文……別な行動をしながら呪文詠唱をするなら、高速詠唱は必修になっちゃうから、取れるんだったら詠唱省略はお得よ。」

そして生徒の娘達にお薦めなのはユウヤのウエポンマスタースキルかな。」

あるえは、オーソドックススタイルとし、レポートスキル取得を優先とした。

「クリスは盗賊から、アサシンにクラスチェンジをお薦めするわ。レベル高いんでしよう?」

「先生、ねりまきはクラスチェンジは必要ないですか?」

俺は、パーティーに回復役が欲しいんだけど。」

問われたウォルバクは、ねりまきを上から下まで全身眺めた後微笑んだ。

「この娘、酒場の看板娘よね? よっほど器用みたい。」

「どういふことだい?」

「神聖魔法が必要ないなら、クラスチェンジは必要ないわ。」

単に回復魔法だけなら、リザクシヨ復活まで将来的には覚えられるわよ。ただ、エリス協会には、教えられる者はいないわね。」

ウォルバクが帰った跡、モンスター狩りを始めた。

結局めぐみんは、貯めていたポイントを使い、魔法呪文詠唱省略にスキルポイントを注ぎ込んだ。

「めぐみんが、ずっと槍を使うなら、槍スキルでもいいんじゃないかな？」

「そこはまだ後回しです。」

それにしても、爆裂魔法を使用していないのに、私が、一撃グマを倒せるとは思いませんでした。」

「だよねえ。さっきなんか、熊の爪がまともに入ったかと思ったのに、魔法障壁はびくともしなかったもんねー。」

そうなのだ。ユウヤの聖なる唄^{ホーリーソング}による攻撃・防御・スピードの底上げとホーリーテリ

トリーを使った魔法障壁の前では獰猛な一撃熊の群れも無力だった。

「思うに、素早さの底上げが大きいんじゃないかな。鈍重に見えてあの熊は、かなり素早いんだ。」

まともによつたら、単発の魔法もなかなか当たらないはずだよ。

さすがは、紅魔族って感じかな。」

「じゃあ、一旦帰ろう。あるえは人手を頼んで獲物を回収してくれ。」

昼からは、またアクセルに行くから、家に集まってくれ。」

そう言うとう、巨大な熊を一頭だけ引きずって少年は歩いていった。



持ち帰った一撃熊を半分はこめつこのところに届け、めぐみん特製の朝食を堪能したユウヤは、ソファでくつろいでいた。

洗い物を終えた黒髪の少女が隣に座る。

「初めて食べたけど、おいしかったよ。」

めぐみんは料理上手なんだね。」

向かいでソファに寝そべっているクリスが感心したように言う。

「当然です。紅魔族の女子たる者、料理に手を抜いたりしませんからね。」

そう言うって胸を張るめぐみんだったが、自分をユウヤが見つけているのに気がつい

た。

「どうしましたか、私に見とれているんですか？」

「去年、初めて会った頃より背が伸びたな。」

「髪もこうして伸ばしましたよ。胸はそれほどないですが……」

「気にするな。俺はめぐみんがいいんだよ。」

「……………あの、私も居るんだけど……………」

気まずそうに声をかけたクリスにめぐみんが顔を紅くしてうつむいた。

くつろいでいて、思い出したようにユウヤが腕輪を取り出した。

「クリス、これはテレポートが使える魔道具だ。」

と言ってもこの家一ヶ所しか登録できなかったからな、内実は帰還の魔法と同じだが。

お前は、パーティーを離れて活動することがあるだろうから、必要だろう。」

眺めてみても、装飾もない、地味な銀の腕輪だった。

「これをどう使うの？」

「呪文の詠唱は、必要ない。テレポートと頭の中で思い浮かべるだけで戻ってこれる。」

ただし、使用できるのはクリス一人だけだ。」

受け取った腕輪を装着すると、緩かった金属が収縮してフィットした。

そうこうしてらうちに、あるえとねりまきが戻ってきた。

ねりまきはバスケットを提げている。

「これ、家で作ってきたんだ。昼は食べてから行きましょう。」

「そうですね。儉約できるところはしましましょう。」

あるえは貨幣が入った革袋五つの内の三つを差し出す。

「ユウヤが切り殺したデカイ奴が特殊个体だったみたいで実入りが良かったんだ。」

めぐみんは受け取った自分の分の袋を中も見ずに丸ごと金庫に入れた。

早めの昼食の後に五人は手を繋ぎ、ユウヤはテレポートを発動させた。



「さてじゃあ、クリスに案内してもらおう。」

「まかせて、エリス教会はこっちだよ。」

クリスを先頭にぞろぞろ中に入っていくと、奥に進むに連れて言い争っている声が聞

こえてきた。

20話

「我がエリス教会では、貴女たちの助力は必要としておりません。お帰りください！」

「それはおかしいわね。ここで横になっている人達は、治癒の魔法の効果が弱いようだけれど、ちゃんとしたプリーストが対処したのかしら？」

「我らをバカにするのですか？」

騒ぎの元だと思われる部屋に入ると、どうやら病室のようで、全身に包帯を巻いた者や体の一部が欠損している者等がベッドに横になり呻き声をあげており、その横で白っぽい服装をした女性司祭と青を基調とした修道着に包まれた女性がつかみかからんばかりに言い争っていた。

「ねえ、これってどういう状況？」

「ああクリス様おかえりなさいませ。」

実はクエストに失敗した冒険者が担ぎ込まれたのですが対応できるだけの腕の者が王都に出払っておりまして、どうしたものかと案じていたところの方がうちにいらして治療をすると申し出てきたのですが……………」

「アクシズ教のプリーストだったんだね。」

皆に注目されているアクシズ司祭の女性はまだ年若いようだった。

入ってきたユウヤ達の中からめぐみんを見つけ、思いきり抱きついてきた。

「お久し振りめぐみんちゃん、大好きなセシリーお姉ちゃんよ♪」

「やめてくださいお姉ちゃん、もう私は人妻です。」

その瞬間、セシリーはこの世の終わりが来たように呆然と硬直した。

「何を言っているのめぐみんちゃん？」

あなたはまだ十三歳でしょう、結婚できるわけがないでしょうに。」

「式は私が十四歳になったら挙げることに決まっています。そして紅魔の里の実家の隣

で既に二人の家を建てて一緒に住んでいます。」

「誰？私の可愛いめぐみんちゃんをたぶらかしたのは誰なの？」

ハツとしてめぐみんの後ろにいるユウヤに気づいたセシリーが話しかける。

「もしかしてあなたが？」

「我が名はユウヤ、紅魔族随一の究極戦士！

めぐみんを嫁にする者！」

ユウヤの名乗りにセシリーだけでなく、エリス教の女性司祭も見とれてしまってい

た。

今の少年は、伸ばした銀髪が緩く波打って肩に延びるくらいになっていて、身長も百七十六センチまでになっていた。使い込まれた灰色の皮鎧の腰には黒ずくめのバスタードソードが吊られて背中には青く見えるマントを装着していた。鎧の内部は鍛えこまれた肉体が垣間見える。

「クリス様、このユウヤさんは？」

「私が入ったパーティーのリーダーだね。」

メンバーの一人の娘に回復魔法を取得させたくて来たんだけど、取り込み中だったみたいだね。」

エリス教司祭はうなずくだけだが、アクシズ教司祭であるセシリーには、ユウヤの体が白銀色に輝き、まとっているマントが青白く輝く翼の形状に見えた。

「あの、ユウヤさん？その体の白銀色と背中の子青い翼は？」

セシリーの言葉にハツとしたユウヤだったが、素早くめぐみんがセシリーの耳にささやいた。

「ここでは、詮索は無用ですよ。ただ、白銀は女神エリスの色、青は女神アクアの色だと承知してください。」

ヒソヒソ会話をしている間、クリスがエリス教司祭を説得していた。

「まあ、確かにあなたとしたら腹立たしいだろうけど、現に担ぎ込まれた怪我人をほつと

くわけにいかないし、治療できる人が王都に行っちゃってるんだからさ、ここは手伝ってもらおうよ。」

「あなた様がそう仰るのでしたら……。」

結局話がついて治療が始まった。

部屋に複数人のエリス教のプリーストが入ってきて、一人ずつヒールやハイヒールをかけてゆく。

ただし、重傷者は部屋の中央に頭の方を中心にして円形にベッドを並べられ、その中心にセシリーが立つとねりまきを自分の方に手招きした。

「私はセシリーお姉ちゃんよ。可愛い貴女のお名前は？」

「ねりまきです。」

「それじゃあ、ねりまきちゃん、目を閉じて、この人達が全快して元気になっている姿を想像してみてくださいね？」

「……………」

「きたわ、みなぎって来たわよ〜セイクリッドハイネスヒール♪」

瞬間、セシリーと肩に手を置かれているねりまきを中心に青白い光が広がり、重症患者を包み込むと、身体中から血が溢れているものや手足が欠損した者達がみるみる回復して行き、光が収まった時には、健康体となった患者達が穏やかな寝息をたてていた。

「なんとも凄まじいものだね。」

あるえが驚いているが、声こそ出していないがエリス教の女性司祭も驚嘆しているようだ。

「ねりまき、どうだ覚えたか？」

ユウヤの問いかけに魔法が発動してからは、その光景に目を奪われていたねりまきは、自分の冒険者カードを確かめるとスキル欄にヒールとハイヒールそしてセイクリッドハイネスヒールの文字が暗く刻まれていた。

「大丈夫みたい。どうやら、本職並みのスキルポイントでマスターできそうね。」

「でしようね。今回ねりまきちゃん魔法も使って一気に回復させたから、同調がスムーズにいったわね。普通は、二人以上で一気に大規模な回復魔法を発動するのは難しいのよ。」

この娘の才能もあるけど、私との相性もよかったみたい。」

「セシリーさん、あなたへの今回の指導料です。」

「これは、最高級のシユワシユワじゃないの。」

ありがたく、いただくわ。」

自分の用は終わったとばかりに部屋を出て行くとしたセシリーだが、伸び上がってユウヤの耳にささやいた。

「貴方、女神エリスの加護だけでなく、アクア様の守護も受けてるわね。是非、詳しく話を聞かせてもらいたいわ、めぐみんちゃんと一緒に♪」

扉を閉めて出て行ったアクシズ教司祭。

「できるだけ近ずきたくないんだかなあ。」

「用があるときにはエリス教の教会に来ればいいよ。」

クリスの言葉にうながされ、ユウヤ達も外に出た。

ちなみに、気持ち程度だが、いくらかは協会に喜捨をしてきた。

「あの場所では、お前はかなり重んじられているようだな。」

「うん、私とエリスのことは、ある程度知られてるんだ。そうしないと、都合が悪いことがあって、まあ、いろいろあるんだよ。」

一行は連れだつて冒険者ギルドに歩いていった。

21話

冒険者ギルドに帰ってきたユウヤ達パーティー。

ついでにクエストでもと掲示板の前まで来ると、カズマ達パーティーが集まっていた。

「ようユウヤじゃないか。お前ら毎日クエスト受けてるな。」

「別に休む理由はないからな。それよりカズマは装備を揃えたのか?」

「よくぞ聞いてくれました。いつまでもジャージじゃ格好つかないからな。」

今のカズマは、丈短い緑のマントを羽織り、胸部や肘・膝等各部分をアーマーでカバーしている。

「それにしても、お前らのパーティーの装備は、全員独特だな?」

「まあ、俺のも含めて自前で倒したモンスターの素材を使ってるからな。ちなみに、製作・加工も紅魔の里製だ。」

「ちなみに費用は?」

「俺のくたびれたように見える皮鎧でもアクセセルで売ってる高級全身鎧より高いぞ。」

「どうやら、カズマ達はゾンビメーカーの討伐を受けるようだ。夜までは自由時間らし

いが、こちらは昼間のうちにクエストを終わらせてしまいたい。

「おまたせ。みんな、今日から私は盗賊改め、アサシンのクリスだよ。」

受付でクラスチェンジの手続きをすませたクリスが戻ってきた。ねりまきもいつのまにかそばにたっている。

「私、さつきアクアさんと話して機会があれば、

復活《リザレクション》の魔法を見せてもらえることになったわ。」

「そうか……エリス教会には、どうやら復活の呪文までマスターした者がいないようだしな。」

セシリーさんもアクアもどっちもどっちだしな……。」

「それよりも、今日のクエストを決めてしましましょう。人数も六人なのでそれなりの報酬の依頼が良いでしょう。」

「なに言ってるんだめぐみん、俺達は五人だろう？」

疑問を呈したユウヤにめぐみんが指差した背後を見ると、思い詰めた表情をしたゆんゆんがこちらに歩いてきた。



「結局、今日はシルバーウルフの討伐になったのかい？」

「ええ、エリス教会に行ったりして時間をとられましたからね。近場の家畜を襲っている狼の群れを退治することですませることになったようです。」

「……それにしても、ゆんゆんはどうしたんでしょうか？ 相当参っていますね。」

ユウヤは、後ろで話しているめぐみんとあるえの声を右から左に聞き流していた。

ゆんゆんが涙を浮かべてしがみついているのだ。

「私、アクセルに來ればユウヤと一緒にすごせると思ってた。」

私がカズマさんのパーティーに入っても、同じアクセルで活動してるんだから、話す機会はイツパイあると思ってた。

でも、ユウヤは夜になったら居なくなっちゃうし、めぐみんは一緒に住んでるし、あるえもねりまきも一緒のパーティーだし、あのクリスさんは何なの？ズルいよ、私の居場所がないじゃない！」

感情が昂っているのか目が真っ赤になって涙がとめどなく流れている。

ついに立ち止まってしまったゆんゆんを少年は横抱きにして歩き出した。

「めぐみんは別として、今の俺達のパーティー構成は俺の事情が理由だ。アクセルに長居する気もないしな。信用できないやつらよりあるえ達を連れてた方がよほど安心だ。テレポートで紅魔の里に戻るんだから、距離を気にせずに連れ回せる。」

ねりまきが回復魔法に適性があったのは、嬉しい誤算だった。「
静かに語るユウヤをゆんゆんはうらめしそうに見つめる。」

「でもクリスさんは？あんなに仲良さそうにしてるじゃない。ユウヤも好きになってるんでしょ？！」

「クリスのことか？確かに俺はクリスのことは好きだ。でも、それを言ったら、あるえも好きだしねりまきも好きだ。そして、ゆんゆんもな。」

それでも、俺の嫁はめぐみんなんだ。

めぐみんが十四歳になったら、式をあげて正式に妻にする。これはもう決めたことだ。

お前は一刻も早くテレポートの呪文を覚えろ。

俺達は、メンバーがある程度のレベルまでいったらアクセルを離れる。

こここの領主のアルダーブはクソ貴族の典型だからな。長居する街じゃない。」

ゆんゆんを下ろして歩き出すとめぐみんが側に駆け寄ってきた。他の皆は苦笑いだ。自分も好きと言われたクリスも顔を紅くして頬をポリポリ掻いている。

「言ってしまいましたね。どうするんですか、この空気は？」

「ごまかせるもんじゃないだろう？正直に言っておいた方が絶対がいい。最悪俺はめぐみんと二人だけで各地を巡る覚悟でいたんだ。」

テレポートが使えなかつたら、そうなっていただろう。」

「私はそれでもよかつたんですけど。あなたにとつての特別は私ですし、私にとつての特別も今や、あなただけですからね。」

「そんなの許さないわ。いいわよ、じゃあすぐにテレポートの呪文を覚えてあげる。」

そして毎日紅魔の里に帰るようになれば、顔をあわすこともできるわ。めぐみんの思いどおりにはさせないんだから！」

「いいかげん、諦めなさい。私の夫に手を出そうとするのはやめて貰おうか？後ろにいるあなた達もですよ。好きだと言われたくらいで調子に乗るんじゃないですよ。わかりましたね。」

「ふふふ、めぐみん、ユウヤは自分から私をメンバーに誘ってくれたんだよ。離れるわけないじゃないか？」

銀髪の暗殺少女がしなだれかかってきた。

「ずっと盗賊だったのに、わざわざアサシンに変えたんだ。今更出ていく気はないね。」
「私も同じだよ。うちのお爺ちゃんもその気になってるんだ。離れる気もないよ。」

「ねえ、めぐみん？ 私の外見がユウヤにとつての理想だつて知ってるでしょう？」

今は一緒に行動してるんだから、すぐに落として見せるわよ。」

にんまりしているクリス・あるえ・ねりまきを見てめぐみんはくやしそうにしている。

「まあ、パーティーメンバーとしては協力しましょう。私は分別ある大人ですからね。」

ゆんゆんも頼みましたよ。」

頷いたゆんゆんも調子を取り戻したようだ。

「そろそろ依頼の場所のはずなんだけど。」

「じゃあ、あそこで土をほじくり返しているのは何なの？」

そこには、巨大なレッドブルが三頭いた。

「後からウルフが来るからな、お前らは、まだ魔法を使うなよ。」

「ホーリーソング 聖なる唄」

ユウヤの呪文で身体能力を上げた皆はめぐみんとあるえ、クリスとねりまきが組になって一頭ずつ大猪を仕留めた。残りの一頭が突っ込んできたがユウヤの長剣が一闪して、四本の足が断たれ、巨体が横倒しになった。ゆんゆんが必死になって首の付け根に短剣を突き入れて息の根を止めた。

「『スペシャルクリーン』、血の匂いにつられて、そろそろ現れるはずだ。クリス、反応

「はどうだ?」

「?!私達、いつのまにか囲まれてるよ!」

大きな輪を作っているシルバーウルフは五十頭以上はいるだろう。そして丘の上からこちらを見下ろしているのは……

「フェンリルだなんて聞いてないよ。」

「ふん、やることは変わらない。めぐみん、爆裂魔法の準備だ。」

ユウヤは詠唱なしで指輪をはめた左手を動かす。

こちらに殺到してきた狼達が白銀の障壁に阻まれて動きが止まる。少年が掌で拳を作る動作をすると、シルバーウルフの群れは、強制的にめぐみんの正面十メートルの位置まで不可視の力で移動させられた。

「今だ、めぐみん、ぶちかませ!」

「消し飛びなさい、エクスプロージョン!」

閃光が炸裂し、残った狼は、十頭もいない。

それも爆風で全身傷だらけだ。

「よし、めぐみんは、槍を構えて、そのまま待機だ。残りの獲物は、あるえ・ねりまき・クリスでかたづけしてくれ。ゆんゆんは、魔法で援護だ。」

「ユウヤはどうするの?」

ゆんゆんが問いかけた少年は、飛行の呪文を唱えて丘の上のフェンリルに向かっていった。

「なんとか倒したね。」

「今日は魔法使ったのは、ウルフだけだったから、まだ余裕があるね。」

「それにしても、爆裂魔法を撃ったら倒れてばかりだったためぐみんがねえ……。」

「消費魔力の軽減、魔力制御、範囲の絞り込みによる威力上昇など、今までの私とは違うのですよ。」

今の私の目標は、爆裂魔法を二発撃て、かつテレポートが発動できるようになることです。」

「愛は偉大だね。あんなに意地を張ってためぐみんが。」

「言つてなさい。本当に大切な人のためには変わらざるを得ないのです。」

ゆんゆんは、めぐみんを見てうらやましいと思った。負けたくないと思った。

うじうじしてる暇はない、がんばろう。決意を新たにしていると、こちらにユウヤが戻ってきた。

フェンリルの巨大な頭部をたずさえて。



依頼人に討伐の報告をして、レポートで急いで戻ってきてみれば、ギルドに着いたのは薄暗くなる頃だった。

「おかえりなさいユウヤさん、今日も討伐対象の部位を持ち帰ったのですか?」

「ああ、すまないがゆんゆんがカズマ達と夜のクエストに行くはずだから、急いで計算してくれ。」

見回すと、ゆんゆんがめぐみんと何やら話し込んでいる。出掛ける前に比べるとずいぶん顔色も明るくなったようだ。

「お待たせしました。シルバーウルフの討伐依頼報酬とウルフの追加討伐数加算、レツドボアの討伐に買い取り、最期にフェンリルの討伐と買い取りで合計五百万エリスとなります。」

六つの皮袋に分けられた一つをゆんゆんは受け取った。

「私、頑張るね。ユウヤが好きだから振り向いて貰えるように努力します。」

そう言っておさげにした黒髪の少女はパーティーの仲間のところを歩いていった。

「……………俺たちも帰るか。」

銀髪の少年を中心にした紅魔のパーティーはテレポートの光に包まれた。

2 2 話

順調にレベルを上げているユウヤ達のパーティー

今日も朝からモンスターを討伐に里の外れの森に行くつもりだったが、あいにくその日は雨だった。

今日はどうしようか？ ベッドの中で考えていると、ドアがノックされる。隣に裸で寝ているめぐみんを一瞥してから、廊下の向こうに答える。

「…………おはよう、どうした？」

「あ、ユウヤは起きてるようだね。私先に起きたから、朝食の支度しようかと思ったんだけど、めぐみんはまだ寝てるのかな？」

それに答えようとしたら、いつのまにか下着を装備しためぐみんが後ろに立っていた。

「無用ですよ。雨のため今日は森での訓練は中止にしますから。支度したら、隣にいて御馳走になりましょう。」

結局、ゆっくり着替えてから爆裂娘と暗殺少女は、隣家の食堂で座って待っているのだが、さすがに手伝いもしないで食事ができるのをじっと待っているのは、クリスには居心地が悪かった。

「ねえ、めぐみんてば、朝の挨拶もそこそこに、ご飯をたかるなんて、気まずいよ。」

「何を言うのですか？うちの食卓にこめっこ達も押し掛けるのです。問題ありません。」

朝食をゆいゆいが並べ終わって各自席についたころ、遅れていたユウヤが姿を見せた。

「おはようございます。ひよいぎぶろうさん。」

勝手口に一撃グマを置いておいたんで後で解体してください。」

「いつもすまないね、ユウヤ君。」

「お兄ちゃん、ウサギは？」

「今日は、ウサギを見つけられなくてな、偶然居たレッドボアで我慢してくれ。」

会話を聞いていたクリスは驚いてしまった。

起きてから一時間ほどこしか経過していないのに、この銀髪の少年は、狂暴な一撃熊とレッドブルを狩ってきている。それも複数を。

「めぐみん、残りは時間がないから血抜きだけしてうちの地下にあるからな、食事のあと

に処理しよう。」

「そうですね、どちらも食材に使用できますから、換金するのは、肉を取り除いてからにしましょうか。」

「ユウヤさん、今日は一日里にいるのかしら？」

ゆいゆいが問いかけるのを思案顔でユウヤは答える。

「そうですね。……一度アクセルに行きますが、向こうも雨が降っていたら、今日は、こちらで過ごそうかと。」

「それなら、アーネスさんに会ってきたらどうかしら？なんでも、外から来た人から噂話を聞いたそうよ。」

「分かりました。」



朝食を済ませた後、三人で熊と猪の肉の処理を済ませて使える材料を換金したユウヤは、訪ねてきたあるえとねりまきも加わって、猫耳神社に来ていた。

「なぜ、こめつこも一緒なんですか？」

「ホーストと遊ぶ約束がある！」

神社に近づくと何やら作業をしている巨大な翼を備えた悪魔にこめつこが突進した。

「ホースト遊びに来たよ！」

「おう、こめつこ。いつもより早いじゃねえか？」

「今日は、姉ちゃん達も一緒。」

言われて悪魔がこちらを見る。

「よう、小僧に姉に……こいつあ、驚いた。」

小娘の中にいるのは随分とまぶしいな？」

そう言つてホーストは、ニターと笑った。

不気味な笑みを浮かべたホーストに対してクリスは戦闘体制を取り、本来地上では長時間活動できないエリスも出現したが、片手を上げてユウヤがそれを制する。指差すの

は、ホーストが腕に巻いているブレスレッドだった。

「あれにはだ、ホーストがこの紅魔の里の所属だと言うことが記してある。

悪魔と言うのは、上級に成る程自身の行動理念と言うものが決まっているんだ。

そして、ホーストとアーネスは、女神ウォルバクの配下で、ウォルバク先生がこの里で気楽に過ごしていることを喜んでるんだ。」

ユウヤの発言を肯定するようにホーストは無防備に立っているだけで行動をおこさない。

その脚から、ヨジヨジとこめつこが背中に登り、肩車されていた。いつの間にか、来ていたアーネスも面白いものを見るように口角を上げていた。

「別にあたしらは、飲み食いしなくとも行動できるけどね、ウォルバク様がここで生活されてるんだから、何もしないのも暇だからね。」

そう言うアーネスの腕にもホーストと同じブレスレッドを装着していた。

神社の作務所、その畳の部屋で全員がアーネスが入れたお茶を啜っていた。ウォルバクはやまない雨の中、魔法学校に出勤していった。

「二人がつけてるプレスレッドは、俺達の冒険者カードみたいな身分証明の用途以外に族長への意思伝達機能も備えた優れたものだ。」

「ちなみにそれを作ったのは？」

「俺とひよいざぶろうさんだ。」

「しかし、あんたもたいへんだねえ。先輩女神の尻拭いで神器捜しまでやらされるなんてさ。」

「ウォルバク先生を勝手な思い込みで邪神認定するようなアクシズ教徒の女神だぞ。」

「ここにいるエリスも後輩女神なばかりに気の毒だ。」

「アクセルにいるのか？」

「ああ、今は墮天して、自分が送るはずだった冒険者と一緒にいる。できれば、かわりたくないな。」

悪魔二人とユウヤが会話をし、その場にいる全員から同情の視線を向けられた幸運の女神エリスは、バツの悪い顔をした。

長時間顕現できないエリスがクリスの中に戻った後も会話は続く。

「我が名はねりまき、紅魔の里随一の酒場の娘。」

居酒屋の女将になり、ユウヤの嫁になる者！」

「我が名はあるえ、紅魔族随一の発育にして、ユウヤとの冒険の話をもって大作家になる者！」

ねりまきの名乗りにめぐみんの目が据わってきたがそれを無視して、話を続ける。

「アーネスには、私の代わりに酒場で働いてもらって感謝しているわ。夕方から夜にかけてかきいれ時だから。」

「かまわないさ。ここで、生活してる限りは、理由もなしに襲いかかってくるようなやからはいないし、ウエイトレスをしてる時は、人間の姿になってるからね。」

「それで私らは、あなたが耳にはさんだ噂とやらを聞きに来たんだけだね。」

「それなんだけどね、エルロードとブライドル、どうやら、この両国に魔王軍の奴がまぎれこんでるようだねえ。」

この話にクリスが反応した。

「ユウヤ、あり得る話だよ。今のところ、ベルゼルグの王都は陥落する気配がない。

前線でも一進一退だと言う話だよ。だとすれば、ベルゼルグの弱点を突こうとするのは考えられる話だよ。」

「それは、食糧や資金面から、首を絞めていこうって話か？」

「どうやら、敵にも策士がいるようですね。どうするのですか、ユウヤ？」

「ベルゼルグがどうなろうとかまわない。

けれどそれによつて、この紅魔の里に不利益になるのは困る。」

「でも、エルロードやブライドルが墜ちればベルゼルグも戦えなくなるよ。経済面は、両国に頼つてゐるからね。ベルゼルグが滅びれば、ここも、孤立だよ。」

「なら、エルロードとブライドルを俺達で獲ろう。」

そして、アクセルまで繋げれば、ベルゼルグが滅びても、俺達紅魔族が戦える。」

宣言したユウヤの目は深紅に輝いていた。

そこには、ユウヤのパーティーの紅魔族の少女達、アサシンに女神、更には、悪魔二体、猫耳神社に集つた面々の誓いは、かなり後まで秘密になっていた。

23話

その日、アクセルの地では幸いにも雨は降ってなかったので依頼を受けることにした。



「昼前にギルドに来て、 “ブラックファンクの討伐” の依頼があつたのはラッキーでしたね。」

「いや、めぐみん、それってラッキー違うから。」

「駆け出しの街で一撃熊の亜種のブラックファンクなんて塩漬けクエストになる扱いだから！」

「クリス、それでも毎朝、紅魔の里でモンスターを狩ってる私たちには可能だし、ギルドの依頼は素材換金だけじゃなく依頼報酬が入るからね。」

「じゃあ、話に一段落ついたところで相手もしびれを切らしてるからな、さっさと始めよう。」

ユウヤが一同に号令をかける。現地についてさほどかからないうちにクリスが目標のブラックファンングを見つけた。聖なる唄ホーリーソングの詠唱の後、奇襲をかけようとしたところにその後方に一撃熊の群れが現れた。

「何かに追いかけられてるように見える。」

めぐみん、先にこの群れだけでも片づけよう。」

「準備はできてますよ、エクスプロージョン!!」

閃光と爆音が轟き、一撃熊が十頭も四散した。

残ったブラックファンングも瀕死の状態でクリスがなんなく仕留めた。

「アサシンになつて攻撃力が上がったの?」

「それだけじゃないよ、ねりまき。新しく獲得した会心の一撃のスキルのお陰でね、どこでも武器が命中した部分が相手の弱点になるんだ。」

「必要ポイントが多かつたみたいだけど、クリスはずいぶんスキルポイントが貯まつてたみたいだし、問題ないよね。」

「それにしてもクリスがレベル七十とは驚きです。」

「今まで一人で活動してきたことが多かったからね、それでも盗賊職だからギルドでは注目されなかったんだ。他の人には、カードを見せなかったからね。でも、それを言うなら、君たちのレベル上昇の早さは、すごいよ。」

「まあ、私とあるえは、レベル十八に上がってるし、めぐみんは？」

「今ので二十二になりました。そしてユウヤは……………」

「空気が変わったな……………クリス、分かるか？」

「これは……………ゴブリンにコボルドにレッドポアに、ああ、一撃熊も一杯いる。他にもまだ分からないけど後から来てるよ。ギルドに知らせた方がいいんじゃないの？」

「いや、……………で見逃しても依頼が来るんだ。」

被害が出る前にやっつけてしまおう。爆裂魔法を使ってしまったから、めぐみんは慎重にな。『ホーリーテリトリー』…今回は逃がさないために奴等を囲んでるからな。」

そう言つてユウヤが黒い長剣から衝撃波を放つ。

ルーンオブセイバーだ。少年はソードマスターのスキルを好んで使うが、以前よりも威力が増している。複数の一撃熊が巻き込まれて倒れ伏した。

めぐみんは、槍で地道にコボルドを相手している。

「いっくよー、ライトオブセイバーー！」

「ライトニングストライク！ おまけにカーズドライブライトニング！」

「ふふん、魔法の檻からでられないんだから、攻撃し放題だね♪」

「うーん、辺り一面死体の山だねー。」

「それでも、レベル上げには役立つたよ。これでレベル二十だ。」

「私もあるえと一緒♪」

少女達が賑やかにしゃべっているとところにユウヤが戻って来た。大きなトカゲのようなものを引きずっている。

「それは、バジリスクじゃないですか？

危ないところでしたね。」

「俺には奇襲スキルがあるからな。」

石化攻撃でお前らが襲われる前に仕留められてよかった。」

その後、ギルドに戻り、依頼の他にどこから逃げてきたであろう、大量のモンスター討伐の報告に驚かれたが、追加の報酬が出た。

「今回は災難でしたね、ユウヤさん。」

本来なら、ブラックファンング一頭だけの討伐依頼なのですが、十数頭の一撃熊にゴ布林・コボルド・レッドボア、ついでのバジリスクですか……」

「素材も買い取ってもらうがバジリスクはこちらで引き取る。」

「そうですか。追加報酬と素材の買い取り分と合わせて千二百万エリスをお渡しします。」

「それで、熊どもが逃げてきた理由があるのか？」

「……つい最近、魔王軍の幹部らしき存在がそれほど遠くない古城に来てると報告があつたんです。」

待っていた仲間はこの場で小分けにしてもらった報酬を分けっていると、カズマ達が近づいてきた。

「よう、もう帰るのか？」

「ああ、受付で聞いたが魔王軍の幹部が来てるらしいな？」

「お前らは気づかなかつたようだが、今朝から、低レベルの依頼は軒並み出てないんだよ。」

「じゃあ、しばらく仕事はなしだな。別な街に行くか。」

「お前らが行って倒してきてくれよ。」

「それより、相手の偵察が先だろう。」

出て行くこうとするユウヤ達をカウンターの奥から出てきた年かきの男性職員が呼び止めた。

「あなた方にその古城に現れた幹部の偵察をしてきて貰いたいのです。」

ユウヤが仲間を見回すと、無言のうちに賛意を表していたので、否やはなかった。

「オーケー。明日は朝から来て打ち合わせをしよう。それでいいな。」

頷いたベテラン職員を見て、少年少女らは冒険者ギルドを出た。

「アイツ、バジリスクの死体を引きずって行ったぞ。」

「たぶん、紅魔の里に持ち帰ったら、鍛冶屋と魔法の武器を作る気なんだと思います。」

「そうなのか、ゆんゆん?」

「王都で製作されてる武器より、性能面なら、紅魔族が作ったものが上です。テレポートが使える強みですね。」

ゆんゆんは、羨ましそうな表情をしていた。

「低レベルの依頼がないのは、さっきので確定だし、俺たちはどうするかな?」

24話

翌日の昼になってユウヤ達がギルドに現れた時も中では、仕事もない冒険者が飲んだくれているだけだった。

奥に行つてほどなく出てきた彼らは、さっさと出発してしまった。

「おい、今見送りに出たのつて、このギルドマスターだろ？名指しの依頼つて……」
「俺達にやー関係ねえだろう。どうせ、王都から討伐隊が来なけりや、ずっとこのままな
んだしよ。」

ユウヤ達が出ていってからだいぶたつてから、奇妙な現象が起こつた。

アクセルは快晴なのにある一帯だけが豪雨に襲われていたのだ。

午後になつてから、たまたまギルドに来ていたカズマ達が遅い昼食のために席についた。

「ねえ私思つたんだけど、あのユウヤつて奴、私を避けてない？」

「アクアさんをですか？」

「というより、向こうからは近づこうとはしてないな。」

「ゆんゆんの知り合いなんだから、もっと親しくなれるかと思つただけどゆんゆんの

ことも突き放して感じる感じだし。ダクネスは……ダクネスは実家なんだっけ。」

「そうですね……あのクリスさんもユウヤのパーティーに入ってから、知り合いのダクネスさんにも自分からは話しかけようとはしてないようですし……カズマさんの社交性があれば、とつくに親密になってもおかしくないですもんね……私なんか……」

「そうね、カズマさんなら、とつくに相手の弱味を握って寄生するかと思っただけだよ」

「おい、いいかげんにしろよ駄女神が！」

「なによくそニート！好きな相手がいるゆんゆんに色目つかつてるロリマが生意気よ！」

「ふざけんなよ！おまえは今の今まで何の役にもたつてねえじゃねえか！それで毎回お前がこさえた借金は誰が払ってると思ってるんだ。」

「今目の前に並んでる料理の支払いも自分の分は払えるのか？」

「あのカズマさん？私、昨日の分の支払いで前貸してもらったお金使っちゃったんですけと？」

「知るか！自分で始末つけろ！」

「お願いよカズマ様」

目の前で繰り広げられている喜劇を見つめながら、ゆんゆんは、別なことを考えてい

た。

ギルドに来たとき、既にユウヤ達はクエストに出た後らしかった。間に合えば付いていきたかった彼女は、内心がっかりしていた。

今のパーティーは、確かに楽しい。

人付き合いが苦手な彼女があの時パーティー加入をしなければ、もしかしたら今は一人で各地を巡っていたのかもしれないし、ろくに知り合いも増やせなかつたろう。しかしだ、パーティー加入ができなかつたためぐみんの前にユウヤが現れた。

「あまりにもタイミングがいいんだよね。」

独り言をつぶやいてみる。最初から、めぐみんだけを迎えに来たのかな……………

豪雨が續いていた空はいつの間にかこちらと同じ夕闇に包まれているようだった。

「向こうの雨がやんだようだから、もうすぐゆんゆんの好きな男が帰ってくるわよ。」

気がつけば、目の前の争いはやんでいて、アクアが優しく微笑んでいた。

「お前、そうしているとマトモな女神に見えるな。」

「ふざけんじゃないわよ、ロリニート！」

私は、真正正銘の水の女神よ！」

「じゃあ聞くがな、あっちの大雨がやんだら、なんでユウヤ達が帰ってくるんだよ？」

「カズマさん、めぐみん達が受けたのは指名依頼なのでたぶん、古城の魔王軍幹部の調査

でしょう。」

「ゆんゆんの言うことは分かるが、それが雨となんの関係があるんだ？」

「これだから引きニートはダメね。」

「いい？調査依頼に行つたんだから、行き先はあの古城よ？そしてあの豪雨は、ただの天気雨じゃないのよ。私ほどじゃないけど、女神に次ぐ神聖に溢れた聖水の雫なのよ。」

「おい、マジかよ？聖水って女神でもないのにあんな大量に降らせることできるのかよ？」

「できるんでしょうねあの男には……それに、今しがた向こうからの邪気も晴れたようだし……問題ないわよ。すぐに帰ってくるわね。」

「アクアの発言で見るからに元気になったゆんゆんを複雑そうに見つめるカズマがいた。」



カズマ達がギルドに着く前、五人の男女が見晴らしのよい丘に到着していた。

ユウヤとそのパーティーだ。

「すまないな、ここで戦闘前の打ち合わせをしよう。」

「え、今日は偵察だけじゃないの？」

「偵察クエストの報酬は百万エリスだ。」

相手を討伐しても、領主の横槍があったり、たとえば、正当に報酬が支払われたとしても、王都に目をつけられて俺たちを束縛しようとしてくるかもしれない。だったら、クリスの言う通り偵察だけして帰った方が良いのかもしれない。」

「だったらどうして？」

「そろそろ潮時なのかもしれないからだ。」

全員がユウヤを見つめる。

「アクセルは、駆け出しの街だ。そして冒険者として新人だっためぐみん・あるえ・ねりまきもあそこにいる奴等を討伐すればlevel二十五にはなるだろう。そろそろ、この街を出る時期だ。」

最悪、報酬がでなくとも領主と揉めてお尋ね者にならなければよしとしよう。」

「分かりました。幸い、当面のお金には困っていません。他のまちに行くにも夜には紅魔の里に戻り、翌日にテレポートの登録ポイントから再出発ができますからね。」

「うんうん、めぐみんの言う通りだね。」

私たちは、言ってみれば、“自宅住まいの冒険者”なわけだし？里の森に討伐に行けば、普通に暮らしていけるくらいにモンスターの素体が得られるからね。」

他のメンバーにも不満はないようだ。

草原に座り込んだままユウヤがネックレスを取り出し手渡した。自分以外は全員だ。

「……ユウヤ、これは身代わりの首飾りかい？」

「あるえの言った通りだ。ねりまきは、あれから状態異常の解除の魔法を教わったが、即死の呪文には対応できないだろう？」

「でも、それではユウヤは？」

「俺にはあらゆる状態異常は効かない。

エリスのお陰だな、ありがとう。」

礼を言われたクリスは頬を赤らめてうつむいた。

それを見ていた他の娘は、不機嫌になる。

「なんかずるくない？ユウヤに加護を与えたのは女神エリスなのにどうしてクリスがお礼言われるのかな？」

「ずるくないさ。私とエリスは一心同体だからね、

私はクリスでもあるし、女神エリスでもあるのさ。」

険悪になりそうな雰囲気。『ゴトツ』と音がして皆が注目した。それは、銀色に輝く円形の盾だった。

「バジリスクを討伐しただろう？鍛冶屋の親方とひよいざぶろうさんと三人で大急ぎで作ってみた。」

「ユウヤ、もしかしてこれは相手を石化させる盾かな？」

「ああ、それも抵抗される確率はかなり低い。

ボス以外は軒並み通用するはずだ。

片手でメイスを使うねりまきに渡しておく。

回復魔法のために、魔力を温存しなくちゃいけないだろ？」

「ありがとう♪♪」

「ねりまきだつてずるいじゃないか。」

「そうだそうだ〜」

「うるさいな、これでいいの!」

「それじゃあどうするか。俺とクリスで突入して相手を挑発するか……それとも手持ちのマナタイトを魔力補充用と考えて城に爆裂魔法をくらわせるか?」

『爆裂魔法を』の台詞でめぐみんが嬉しそうにしたが途中で驚いた顔で城を指差した。

「……………城門が開いています。」

そして、いつのまにか鎧を装備した大量のアンデットが出現しており、集団の中央には人馬ともに首なしの騎士がいた。

「?!あれはデュラハン!王都を襲撃した魔王軍の首なし騎士だよ!」

「いかにも、我こそはデュラハンのベルディア!」

魔王軍幹部の八人が一人。誇り高き暗黒騎士である。我輩の城に爆裂魔法など放たれては迷惑なので、貴様らにはここで死んでもらおう!」

25話

平原と丘が交錯する地で魔王軍幹部を見据えて、ユウヤが指輪を嵌めた左手を掲げる。

途端に眼前の城門を塞ぐように水の壁が出現した。

「貴様……………」

「それなりにデュラハンのことは、知ってる。まがりなりにも俺たちには冒険者なんだからな。」

「ナイスだね、ユウヤ！これで敵さん、不利になっても城に逃げ込めなくなったよ。」

「……………確かに先手はそちらに取られた。だがな、こちらは、いくらでも数を殖やせるのだ。どこまで耐えられるかな？」

ベルディアが自らの鎧の中をまさぐる動きを繰り返す度にアンデットナイトが数を増やしていく。

瞬く間に千を越えた。

増殖してゆく敵を見ながら少年が指示を出す。

「めぐみん、最大火力だ。今日は、身体を動かす体力があればいいからな。いくぞ！ホー

リーテリトリマ x i m u m !!」

雄叫びと共に発動した魔法の球体がベルディアとアンデットの群れを包み込む。

普段は白銀のその光は、虹色に輝き物理的圧力を加えて締め上げている。そしてユウヤの前から強引に魔力を高めているめぐみんの正面まで引きずられて……左手を動かしながら、更に三つ目の魔法が発動した。

「聖なる唄《ホーリーソング》撃てめぐみん！」

「何人たりとも我が前を塞ぐこと能わず！」

いきますよ、エクスペロージョン!!」

可能な限りの近距離で放たれた爆裂魔法は、閃光を放ち猛烈な爆風が敵を飲み込んだ。ユウヤたちは、衝撃に必死に耐えて立っている。

爆裂魔法の膨大な魔力消費にふらついているめぐみにすかさずねりまきが「ヒール」を使った。

今回、最大火力でと言われたので魔力のほとんどをつぎこんでしまったのだ。さすがに不味いので彼女は指輪から蓄えていた魔力を吸収した。

以前と違い、爆裂魔法を放てばそれで終わりと言う考えはない。しっかりと事後の事態にもそなえるということが身に付いたのだ。

めぐみん自身の精神も成長している証である。

「ありがとうございます、ねりまき。」

皆、戦闘体制を解いてはいけませんよ。」

それでも爆裂魔法を受け、ベルディアなどはその直撃を受けたのだ。死なないまでもかなりのダメージを受けたのではないか？そう思われた時に煙が晴れた。直径二十メートルはあろうかと言うクレーターの真ん中にベルディアは立っていた。

もちろん無傷ではない。出現していたアンデットナイトも大部分が消滅し、残っている者もボロボロの姿で本来の能力を發揮できないだろう。

ベルディア自身も跨がっていた馬の姿はなく、左手に抱えている兜の頭の飾りが取れていた。

そして……………

「やってくれたな……………」

苦々しげに吐き捨てる首なし騎士を面白いように見つめてあるえが指摘する。

「鎧の内部に隠していたその水晶、それが壊れていたらもう手下は呼べないんじゃないかな？」

会話の最中に小柄な銀髪の少女が駆け抜ける。

ベルディアの背後からの奇襲は……………予測されていた!?

「あんまり俺をなめるなよ？どうやらこいつの短剣は魔を祓う力があるようだがな、当

たらなければどうということはない。」

マトモに大剣の攻撃を浴びてしまったクリスは気絶してしまった。追撃でフルブレートの脚で思いきり蹴られ、人形のように転がる。

「仕切り直しといこうじゃないか。ちなみに、さっきの爆裂魔法で俺を阻んでいた障壁は消えたぞ。」

少年はぼろ雑巾のようになってぴくりともしない銀髪の少女を見た。ねりまきが駆け寄って懸命に回復魔法をかけているがこの戦闘中は復帰は見込み薄だろう。そばにいるあるえ・めぐみんを見た。

二人とも不安な顔をしている。

「ここまで俺を追い詰めたお前たちにとびきりの絶望を見せてやろうー!」

暗黒騎士が相手を追い詰めるべく呪詛の言葉を発しようとした時、目の前の少年の雰囲気が変わった。

何の変哲もなく見える灰色の皮鎧が白銀色に光輝き、銀色の頭髮が逆立っている。

本来は黒のマントが青く全員が知覚するほどに羽が見える翼の形状に変化した。

そしてその瞳は、紅魔族の証し、燃えるような深紅に輝いていた。

首なし騎士は一瞬気圧されてしまい、呪いの言葉を中断してしまった。それが彼の敗

困だった。

「調子に乗るなよ。幹部と言っても最弱なくせに！」

コールオブサンダーストーム！……………

“アクエリアスシャワー”

ユウヤが呪文を唱えた後、彼は、局地的な雷雨の中ベルディアに突撃した。

残された三人娘は、未だ目を覚まさないクリスを守ってアンデットナイトと戦っていた。

「ユウヤ、怒ってたね。」

「うん、クリスを傷つけられたのがさうとう頭に來たみたいだねえ。」

「でも、首なし騎士に一人で突撃させて大丈夫かな？」

「問題ありません。」

「めぐみん？」

「ユウヤのあの鎧とマント、あれはそれぞれが光を放っているのではなく、ユウヤ自身の光があふれてああいう風に見えるのです。普段は押さえている力が本来の状態に

戻っただけ、それにあの目を見たでしょう？滅多に光らないあの男の目が燃え上がるように光輝いていたのを！」

「そうだねえ。それにユウヤが降らせたのつて聖水の雨みたいだし。」

「じゃあ私たちは、おとなしくこの目の前にいるくたばりぞこないを片づけるとしますか♪」

「めぐみん、君はさつき爆裂魔法で大量に倒したんだから、ここは私達にゆずっておくれ。」

「そうだ、そうだ。」

「何を言うのですか？倒せるときに倒す。経験値は、取れるときに取っておかないと。」

「横暴だ！私だつて敵を倒してレベルアップだよ。」

「さあ、グインフェルノ！」

「ねりまき、君はせっつかく渡された石化の盾を使いこなさなくちゃ！」

「あ、そうだった。」

「ふん、まさか聖水の雨を降らせるとはな……」

さっきの爆裂魔法といい、いまましい奴らだ。」

「お前の本来の動きはもうできないだろう?」

「それでもだ! お前のその剣は、特別な魔法剣と言うわけでもないだろう。なのに何故この俺に痛手を負わせることができる? 結構俺はお前に深傷を与えてるはずだ。何故平気で動ける?」

「俺がそういう身体だからだ。傷が平気なわけでもないぞ? 時間と共に自動で傷も体力も魔力も回復するんだよ!」

「そんな理不尽な話があるか! お前は化け物か?」

「そんなわけあるか! 与えられた能力だけで生きていけるほどこの世界は甘くない。連日のように鍛練して戦い続けている。何もしないでいては、そもそも、お前の前に立つことすらできなかつたろうさ!」

会話の最中も二人は剣の応酬をしていた。

首なし騎士はそうとうなダメージを受けていて、今やその鎧もボロボロだが、動きは鈍っていない。

加えて先程指摘したように、ユウヤの剣は特別な魔法剣などではない。大事に手入れをしているが、連日のように使いつめなのだ。魔法で補強していたとはいえ、ここまで

もっていたのが不思議なのだ。

「ヌオー！」

「セイヤー！」

二振りの剣がぶつかり合い、片方が折れた…………

「とどめだ。ダークオブセイバー！」

真つ向から切り下ろす暗黒騎士に対して、少年は折れた剣の持ち手から光を出現させる。

「ホーリーウエポン……………ルーンオブセイバー!!」

駆け抜けざまに胴を切り払い、振り向きざまにその左手ごとベルディアの兜を真つ二つにした。

「…見事だ。この俺を倒したのだ。胸を張ってよいぞ。」

「よせよ。俺は、勝てるように方策を練り、デュラハンのお前の力を押さえるように行動した。」

マトモな剣の技量ならずとお前が上だろうか？」

「それも勝負と言うものだ。ルールを決めた試合ではなく、〃生死をかけた闘い〃なのだからな。」

……お前は国に仕える騎士には、向いておらんな。

自分の信じるもののために戦うと云ったところか？」

「国が俺を支配するのは許さない。俺が戦うのは、俺の大事な者のためだ。」

「……………似ているな。」

「…もしかして、俺の父親か？」

「たぶん、間違いないだろう。その銀髪に、顔立ちも似ている。魔王軍に誘ったんだが、紅魔族の好きな女がいるからとな。」

「そうか……………」

「ではな、楽しかったぞ。…………それとな、そこな娘、地上に降りてきてるときは人間並みのだから、接近戦はしない方がよいのではないか？」

そう言つて形が薄れていき、魔王軍幹部ベルディアは消えた。後には、暗黒騎士の大剣と割れた兜が残った。

少年が振り返ると、あるえとねりまきに支えられてクリスがゆっくりと近づいてきた。た。

そしてエリスが姿を表す。

「私のことをある程度感づいていたようですね。」

「クリスマスもだが、エリスは大丈夫なのか？」

「正直、全く被害がないわけじゃあないんですよ。

しばらく天界にいるかもしれない。

まあ、仕事も溜まってますし片がいたら、また来ます。ああ、クリスマスに関しては、回復魔法で対応できるから大丈夫ですよ。」

レポートなのか、特別な手法なのか、瞬間的に見えなくなったエリスと別れてから、自分達も帰還することにした。

「それにしても、ベルディアはもしかしたらあなたの父親もお互いに敵意は持っていないかったのではないですかね？」

「そうかもしれないな……」

答えるユウヤだが、隣でまだふらついているクリスを見て彼女を横抱きにした。

「わっユウヤ恥ずかしいから下ろしてよ〜」

「まだ回復してないだろ？それにしても、エリスもダメージを受けるとはな。深刻じゃない方がいいが。」

「うん、心配だよな。……………」

二人の会話をじつと見ている三人娘。

「うらやましい。」

「私もして欲しいかな。」

「正妻は私ですよ！」

「ふうん、めぐみん、そこは自分だけが嫁だとして騒がないのかな。」

「めぐみんが私達を認めてくれて何よりだね♪」

「!?うるさいですよ。今回はしかたなくクリスに譲るだけです。調子に乗らないでくださいー！」

「おーい、アクセルに戻るぞ?ベルディアの剣と兜は誰かが持つてくれ。」

「今、行きますよ。」

26話

一同が集まってアクセルに戻るようになった時クリスから、要望が出た。

「ねえ、今ユウヤが解除した水の障壁さあ、あの城の中にお宝があるんじゃないかな？」

ベルディアも討伐したんだし、ちよつと行つてみない？」

「しかし、クリスはまだ、完全に回復してないだろう。大丈夫なのかい？なんだったら後日落ち着いてからでも……」

「甘い、甘すぎるよ、あるえ！後日とか、あとでなんて言つてたら、ハイエナどもに全部かつさらわれちゃうし！それに：神器があつたら、回収しなくちゃいけないから。」

「……分かった。そういうことなら、クリスにはねりまきが一緒についていてくれじゃあ、手早くすまそう。みんな入るぞ。」

ユウヤの決断は早く、さつさと城門に向かつて歩いていく。

「あれ、……ユウヤは私と一緒に居てくれるんじゃないの？」

慌てて追いつがるクリスとそれに並ぶあるえ・ねりまき。三人を追い越し、当然のように少年の隣を歩く爆裂娘の構図が出来上がった。

めぐみんはわざわざ振り返り、『ふっ』と鼻で笑う。

「ムツカー！何なのよあれは!!

待ちなさいよ、めぐみん!!」

「ふふん、分かりきったことです。ユウヤの隣は私の指定席です。あなたたちの場所は
ありません!」

「……………戦闘が終われば、すぐにこれだ。

先が思いやられるねえ。」

「どうして、あるえは落ち着いていられるのかな?」

「そりゃあ、ユウヤが私を受け入れてくれてるからさ。何だかんだでパーティーにも入
れてくれたし、お爺ちゃんの無茶な要求も拒否しなかつたからね♪

そこは、ねりまきも一緒だろ?」

「…うん、プリーストが欲しいんなら、他の街で探してもいいし、選り好みしないんだつ
たら、あのセシリーさんでもいいんだしね。そう考えると……………私と一緒にいたいと思
つてくれるのかも♪」

二人の会話を聞き、自分もユウヤの方からパーティーに誘われて、危険な目に遭えば、
本気になって怒ってくれた姿を思い出して、クリスは温かい気持ちになった。

前を見てなかつたのでぶつかってしまい、視線を上げるとまさに彼女が考えていた少
年が紅い瞳をこちらに向けていてドキドキしてしまった。

「どうしたんだ、もう城の入り口だぞ。探索なのだから、お前が先頭に立ってきてくれよ。」

一番前に移動するクリスだが、通りすぎるときめぐみんがジト目を送ってきた。

「：調子に乗るんじゃないやありませんよ。」

それに向かって今度は、暗殺少女のほうか“ニヤリ”と返した。

「エリスの分も私は一緒にいるんだからね。」♪



先に二階に上がり、一階に戻ってきたが、何も見当たらず、空振りかと思っただが、普通に地下室の入り口があった。

「なんか安直だね。私の活躍の場がなかったよ。」

「只の古城だしな。ダンジョンじゃないんだから、こんなもんだらう。」

「そうなのだ。地下に降りて通路の突き当たりの部屋に無造作に白骨が積み重なっており、彼らが生前、身に付けていたであろう武器や鎧の類いが無造作に置いてある。同じ場所に財貨の類いも山積みになっていた。」

「魔王軍幹部は、こういう物に無頓着だったのでしょうか？」

「脳筋だったんだろうね。いくつかは、貴族の家紋がついてるのがあるね。面倒だから、こういうのはギルドに届けよう。後で難癖つけられたくないし。」

「そうだねえ、他のは紅魔の里に持ち帰ろうよ。」

「売ってもいいし、傷が付いたユウヤの鎧の代わりがあるかもよ。」

「エリス通貨はもらってもいいでしょう？ エリス教会の孤児院に届けたいんだ。」

「……………？ こつちにあるのって神器だよ！ どうしよう…今はエリスもいないし、復帰してくるまでどこか保管しないと……………」

「いや、それ無理があるよ。隠しておいても知らないうちに盗まれてるかもよ？」

「いや、罫を設置したり、ユウヤに結界を造ってもらったりさ。」

「それなら、里の家にしまっておいたらどうだ。」

「いけません！ 我が家には出入り自由の妹、こめっこが入り放題だと忘れてますね。」

我が妹を甘く見てはいけませんよ！」

ああでもない、こうでもないとならぬと悩んでいると、穏やかな声が背後から聞こえた。

「心配は入りませんよ。」

そこには微笑をたたえた幸運の女神が立っていた。

「エリス、大丈夫なのか？」

「ええ、天界に戻り短時間ですが休息したので先程よりはましになりました。あちらでゆっくり休んでから仕事に取りかかる予定です。」

「それならば、ここにある神器だとあたりをつけた物を持ち帰ってくれないかな？」

「私もそのために来ました。ただ、……この鎧とこの剣ですが特殊な物ですが神器ではありません。」

丁度ユウヤさんの使用していたのが傷ついたことだし、装備してみては？」

エリスに薦められた物だがユウヤはあまり気乗りはしなかった。少年が今まで装備してこなかった全身鎧プレートメイルブロードソードと直刀ヒーターシールドで脇に置いてあるのはご丁寧にもエリスの紋章が刻まれた方形の盾なのだ。

「せっかくだが、全身鎧は動きを妨げるし、その盾には紋章が刻まれてるだろう？俺は、エリス教のクルセイダーになる気はないぞ。」

難色を示しているユウヤを見てエリスは剣と鎧に手をかざす。白銀の光が降り注ぎ、

その鎧は白銀に色が変わり、剣にいたっては、自ら発光している。

「これで、鎧の重さは、あなたの革鎧並みに軽量になってます。自然に傷が直るとはいえ、傷つかないのが一番です。何でしたら、剣はそちらの物と合成することもできるはず、きつとあなたの力になってくれるはずですよ。」

溜め息をついてから、少年は鎧を付け替えた。

全身鎧にしては各部が簡略化しており、エリスの軽量化の魔法や足裏や間接部に工夫があるお陰で金属鎧特有の大きな音もしない。

「どうやら、今までと同じようには、動けるようだ。」

「わざわざ、鎧の胸にまで紋章を刻んで、俺をエリスの使徒にでもしたいのか？」

幸運の女神は黙ってニコニコしている。

「それでは、私はこんどこそ戻ります。」

ユウヤさん、クリスのことを頼みます。

しばらくしたら、必ずまた一緒にいましょう。

私も……あなたのことを想っています。」

「……こんどこそ、帰るぞ。」

「……私は戻ったら孤児院の方に行ってるね。」

「報酬はおそらく偵察分しか期待できないだろうから、貴族ゆかりの物品を届けて、早く里に戻ろう。」

口数が少なくなってしまうた女子組を怪訝に思いながらも少年はテレポートを発動する。

27話

ここはアクセルのエリス教会敷地内にある孤児院。

クリスは冒険者ギルドに向かったユウヤ達と別れてこの門をくぐっていた。

「あ、クリスお姉ちゃん！」

「おゝクリスだゝ」

「みんな、クリスお姉ちゃんだよ」

門をくぐった途端、あちこちから子供達が駆け寄ってきてクリスはおもくちやにされた。

「クリス姉ちゃん、いらっしやい！」

「ばっか、違うだろう！」

「「おかえりなさい！」」

子供達と歩いていくと、入り口には顔にしわを刻んだ老婦人が立っていた。

「ただいま、院長先生！」

「よく来ましたね。さあ、お入りなさい。」



お菓子やおもちや、人形などを手渡され、賑やかに走り去っていく足音を背中にクリスは院長の女性と対面して座る。

「それで……いつもは来ない孤児院まで来たのは何か話したいことがあるのかしら？」
「うん……私、パーティーに入ったんだ。」

今までみたい臨時にやなくてね、同じくらいの男の子がリーダーで私を入れて女の子が四人なんだ……」

「あなたは、その男の子を好きなのかしら？」

「惹かれてるのは確かかな。」

「…他の女の子も彼が好きなのね？」

クリスは頬を染めながら話してしまった。

彼、ユウヤは困つてるときに手を差し伸べてパーティーに誘ってくれたこと。最初か

ら仲間として迎えてくれ、自分の部屋まで用意してくれたこと。

すでに、相応の経済力があり、自宅まであること。

一緒にクエストの話、そして魔王軍幹部に傷ついたクリスを見て激怒したユウヤが独力で幹部のベルディアを討伐してしまったこと。

「クリス、あなたはどうしたいのかしら?」

「ユウヤと一緒に行きたい。でも……ユウヤは、めぐみんを嫁だと呼んでるし、私は盗賊職だったし、今はアサシンに転職したけど……」

「でも、離れたくないんでしよう?」

「うん。」

「だったら、それが答えよ。正直言って貴女が冒険者をすると言った時、賛成できなかったし、盗賊じゃなく、別な職を選んで欲しかったけど。」

盗賊のスキルは、クエスト以外で使ってはダメよ。」

「院長先生?」

「貴女がここのことを気にかけてくれるのはうれしいけど、それで危険な目に遭ってほしくないのよ。」

「でも……」

「いいこと、貴族の屋敷なんかに入っちゃダメ!」

悪徳貴族でも貴族は貴族よ。最期は国から追われることになるわ。……………それにこの国の王家も揺らいでいるようだしね。」

「……………」

「幸せにおなりなさい。私たちのことは気にしなくていいのよ。」

「お祖母ちゃん！」

思わず抱きついてしまった銀髪の少女。しばらく彼女は離れようとはしなかった。



「おかえりなさい、ユウヤさん。奥でギルドマスターがお待ちですよ。」

「それなんだが、古城の地下で貴族ゆかりの遺留品を見つけて持ち帰ったから、確認して

欲しい。

今は裏の中庭にある。」

「!?直ちに係りの者を向かわせます。」

その後、奥の部屋、ギルドマスターの執務室に通されたユウヤ達は薦められたソファに座った。

「あれらは、国内の有力貴族の子弟が身に付けていた物のようだね。主に王都の防衛戦で討ち取られているのが大半だが、どら息子が金にあかせてそろえた高品質な装備で歩いて捜索願いが出ていた者もあつたのだよ。それと……聞いてもいいだろうか、君がそばに置いている大剣と割れてひしやげている兜は？」

困惑しているギルドマスターにめぐみんが自信満々に返答する。

「もちろん、私達が魔王軍幹部デユラハンのベルディアを討伐した証しなのです！」

あつけにとられているギルドマスターに対して、兜と大剣の他にクリスの物を含めた五枚の冒険者カードを差し出す。

「めぐみんの言う通りだ。カードは嘘をつかないだろうか？」

「……………いやはや、驚いたな。たった五人で魔王軍幹部を撃破と言うのも凄まじいが……………アサシンの少女のレベル七十オーバーを筆頭に紅魔の少女達は爆裂魔法の使い手に、回復魔法も備えたアークプリーストと来た。とどめに……………なんだね、君のこのス

テータスは？レベル四十五は、まあ、王都に行けば探したらいるかもしれないがなんでほとんどの値が上限近くまでいっとるのかね？知力まで伸びてるなんて異常だよ？」

勢いよく捲し立ててみたが、目の前の少年の平然とした姿を見て、ギルドマスターは頭痛をおぼえた。

「それで、討伐の賞金はでるのか？」

「もちろん出るとも。それも三億エリスだ。」

……ただ、王都への連絡と確認作業に時間がかかる。

すぐに手渡すことはできない。」

「……………金を受けとるのに王都に呼ばれたり、身柄を拘束されてはたまらないな。」

まずは、偵察任務の報酬をこの場で払ってもらおう。確認作業には……………この割れた兜を提出しておこう。あとは俺達は、アクセルが出るから、賞金が出るのなら、振り込んでおいてくれ。

まあ、期待しないで待ってるよ。」

「……………すまない。遺留品を持ち帰ってくれた分も上乘せして偵察任務の報酬は五百万エリス払おう。」

兜は預かる。討伐報酬の方は何とかする。

君達は紅魔族だが、何とかベルゼルグ王国のために働いて欲しいのだが？」

「腹の中が真つ黒でヤバイ領主の居るところに長居は出来ないな。」

それに、さっきの答えだが、俺達は、紅魔族だ。

魔王軍も敗北続きの地に押し入ろうとしたなら、必ず後悔することになるだろう。」

部屋を出る少年少女達の背中を見送って中年のギルドマスターはため息を吐いた。

「アルターブの妨害をはね除けて、そのまま賞金を渡せるか？いや、魔王軍幹部撃破と言う輝かしい武功に対して賞金を直接手渡したいと言いつ出すお方が現れるのではないか？そうなった場合、彼らが王都に行かなかつたらどうなるか？

かと言って国が紅魔の里に攻め込みでもしたら、この国終わるぞ……。」

彼は知ってるのだ。紅魔の里は村と言うより集落に近いが、住民の大人は全員がアークウイザードだ。

侵略者に対して振るわれる圧倒的な上級魔法の嵐には、近づくことさえ、できないだろう。

事実、魔王軍でさえ、毎回のように攻め来んではその度に全滅していると聞く。ため息も出ようと言うものだ。

「しかしあの少年のカード……他人には、絶対見せるなどでも言っておくべきだったかな。」

28話

「やあ、みんなお待ちせー！」

ユウヤ達がギルドの奥から出てくるとクリスがカウンターの手前で待っていた。

「クリスの用が終わったなら早く帰ろう。」

「この街は、長居する所じゃない。」

「ちよつと待つてくれないか?」

目の前には、サークレットを装着し蒼い全身鎧を着込んだ青年が立っていた。

傍らには取り巻きのような女の子が二人。

そして、三人を睨んでいるカズマ達が傍に立っていた。

「カズマ、こいつらは?」

「はじめまして、僕は…」

「ああ、お前には聞いてない。カズマが説明してくれ。見たところ、ずいぶん険悪なようだし、ここにいる他の冒険者にも恨まれているようだしな。」

いつのまにか傍らにゆんゆんも来ていた。

仲間の少女たちの前に出て様子をうかがうユウヤ。

「こいつは、ミツラギというんだ。」

「いえカズマさん、カツラギさんですよ。」

「失敬な、僕の名前はミツルギキョウヤだ。」

「だから、どうした。説明しないんなら俺達は帰るぞ。」

「いや待ってくれ、話すからよ。」

痺れを切らしてこの場を離れようとする、慌ててカズマが説明を始めた。

それによると、ユウヤ達がギルドの奥に消えた後、このギルドに三人組の冒険者が現れた。

そのうちの一人の青年の名がミツルギキョウヤ。

世間で『魔剣の勇者』の二つ名で知られている高レベルのソードマスターで、一緒にいる二人の少女はフィオとクレメアと言うらしい。

それがギルドの酒場でカズマ達と一緒にいたアクアを見つけ話しかけた。アクアが馬小屋で寝泊まりしていることを聞き、激昂、一緒にいた、ゆんゆん・ダクネスにも強引に勧誘の声をかけて大ひんしゆくをかけた。

「ふうん、ゆんゆん達だけじゃなく、割りと見た目が良さそうな私らもそばに侍らせてハーレム気分でも味わいたかったのかな？」

「だとしたら、そちらにいる女の子二人は、どう感じるんだろうねー。ずっと一緒にいて

君を支えてきたはずなのにさ、ないがしろにされて面白くないんじゃないのかな〜♪」
「そんなことはない！アクア様たちも君たちも立派な上級職だ。特に君たちはアーク
ウィザードが三人にアサシンまでいる。レベル三十七のソードマスターの僕と一緒に
来るべきだ。」

ねりまきに指摘され、あるえに煽られて、ミツルギは必死にアクア達が上級職だから
自分といった方がよいと弁解した。

しかし、話を聞いていたためぐみんは容赦しなかった。

「アクア達はあなたについていくと自分から言ったのですか？言ったなら、もめてるわ
けがないですね。私たちもお断りです。」

上級職云々もあなたのこじつけでしょう。

あなたのそばにいる二人も上級職ではないでしょう
？」

「つまり、拗らせた自称勇者が回りに迷惑かけてるだけか？」

カズマの放った一言に周囲からは失笑と嘲笑が浴びせられた。

喧騒を余所にクリスがユウヤに耳打ちする。

「ユウヤ、あれは本物の『魔剣グラム』だよ。」

私、お願いがあるんだけどな〜」

いたずらっぽい笑みを浮かべたクリスの頬をなでていると、我慢の限界に達したミツルギが叫ぶ。

「決闘だ。サトウカズマ、君が勝つたら何でも一つ望みを叶えようじゃないか。勝負しろ！」

その瞬間、カズマは思いきり悪い顔をして答えた。

「声を掛けられた当人に断られたら、腕づくで連れ去ろうとするわけか？ギルドはこう言うことを見逃す訳なのかな。低辺職の冒険者に高レベルソードマスターがごり押ししてるんですけど？」

酒場内はますます剣呑な雰囲気になる。

居合わせた女性冒険者はミツルギを女の敵と言う目で見ている。ミツルギも今さら引つ込みがつかない状態だ。

「まあ、待ちたまえ。不公平だと言うなら、上級職同士で闘うならどうだね？幸い、そこにいるユウヤ君も上級職だしね。」

奥から現れた瘦身の男性に一同が注目する。

あちこちから、『ギルマスだよな』と声がする。

「つまりは、あれか？ギルドの体面を取り繕ってるわけか？」

「この場はこうする他にないだろう。」

「王都で話題になってる『魔剣の勇者様』はないがしろにできないから理不尽もまかり通ると言うわけだな？ 良いだろう。が、後で苦情が出ないように条件を書面で残すことだな。」

ただし、俺が闘うんだ。試合なんかのつもりでないことだ。」



ギルドの裏手、芝生が生えた広場にやって来た。

ギルドの責任者たるギルドマスターの他に記録係として指名された職員が一名。

そして、当事者としてカズマのパーティーとユウヤのパーティー。加えて、ギルド内にいたほとんどの冒険者が見物している。

ユウヤはクリスと内緒話をしている。

クリスが含み笑いをしながら、空を指差している。

「僕の条件は先の通りだ。ユウヤと言ったね。」

勝ったら、君の言うことを何でも一つ聞こうじゃないか！」

「……出来もしないことをよくもまあ……。」

おい、今のをちゃんと記録したか？

ちゃんと細かい取り決めをしなくていいのか？

俺が勝ったら、「お前の一番大事なものをもらうぞ。そこにいる二人もこいつに加勢しなくていいのか？後で卑怯だなんて言うなよ。」

ミツルギ、一番大事なものと云われて、どうして剣を見てるんだ？なぜお前を支援してくれる彼女達の心配をしないんだ？最低なやつだな？」

加勢しなくていいのか？ユウヤの発言に動揺したフィオとクレメアだったが、一番大事なものを奪うの言葉にミツルギが彼の魔剣グラムを気にしているのを見て失望した様子だった。

同様にこれには、他の冒険者、とりわけ女性はゴミを見る視線を向けている。

「うるさい、勝負をさっさと始めろ！」

完全に頭に血が上ったミツルギを尻目に、なんとユウヤはその防具の胴体部分と盾をはずしてしまい、直剣だけを携えてかまえた。

「いいぞ、合図をしてくれ。」

「それでは、相手の戦闘不能か降参にて決着とします。始め！」

合図と共に、猛然とミツルギが走り込んでくる。

わざと離れた位置で戦闘の合図を受けたユウヤが指輪をはめた左手を掲げる。

「ッホーリーテリトリ！」

瞬間、ミツルギとユウヤが対峙している空間を白銀の障壁が覆った。

「小細工をするな、ルーンオブセイバー！」

「ルーンオブセイバー！」

激昂したミツルギが魔剣から衝撃波を放つとユウヤが同じスキルで返す。正面からぶつかり合ったエネルギーはミツルギに向かい、魔剣の勇者は猛烈な勢いで吹き飛ばされた。

爆風に向かって疾走するユウヤを見て、めぐみんがぼつりと洩らす。

「一気に決める気ですね。私達を賭けの対象にしたギルドマスターにもさうとう怒っているようです。」

「でも、あの魔剣グラムには、普通の剣には太刀打ちできないよ？何しろ神器だし。」

「律儀に刃と刃を会わせる必要はないのですよ、見てください！」

めぐみんが指差す方を周囲も見つめる。

吹き飛ばされたミツルギだが、ユウヤが迫ってくるのに気づくとなんとか体制を立て直して迎撃の体制を取る。いち早く魔剣を振り下ろすと、ユウヤは魔剣の真横、ミネの部分に向かって斜めに自らの直剣を振りきる。白銀の閃光が走り、*「魔剣グラム」*は半ばから真つ二つに折れた。

「勝負あったかな？」

「やさしいね、ユウヤ。」

呆然としているミツルギの両腕を切断し、返す刀で踏みしめていた両足も切り離していた。

絶叫を上げるミツルギを見て続行不可能と見たギルドマスターが決闘の終了を告げた。

「あれで、やさしいの？カツラギ君はイモムシになっちゃったけど？」

「だってあれだけ綺麗に切断したら、アクアさんなら簡単に直せるでしょう。私は頼まれたって嫌だけど。」

クリスの疑問にねりまきが何でもない顔で答えた。

決着がついたので、障壁は解除されている。

アクアがそばに寄ってきて回復魔法を使用するのを手で制し、ユウヤが聞き慣れない魔法の名を口にする。「オールリセット」と。

「ユウヤ君、今の魔法は何かね？」

「こいつが冒険者登録をする前の段階、初期値まで戻した。魔剣の修正値も入っていないから、同レベルの冒険者より弱いだろうな。」

朦朧としているミツルギから冒険者カードを取り上げたギルドマスターがそれを見つめる。

一緒にカズマたちも覗いてみると、レベルは一に戻っており、そのステータスは、カ

ズマが登録したときの初期ステータスと同等だった。

むしろ、運と知力の面ではカズマが勝っている。

「結局、魔剣がなけりや、こんなもんか。」

バカにしてた俺以下のステータスじゃねえか。」

呆れたといったカズマを横目にユウヤが発言する。

「ギルドマスターがわざわざ指名して俺を戦わせたんだ。負けたら、俺の嫁と大事な女達を奪われるところだったんだから、当然要求は通してもらうぞ。」

周囲の冒険者も沈黙している。

フィオとクレメアも庇う気はないようだ。

両手足をアクアの魔法によって繋いでもらったミツルギは脂汗をかきながら、観念の表情を向けた。

「君の要求は何だい？」

「ああ、負けてからとぼけられないようにもう実行している。『魔剣グラム』は、へし折った。」

お前は女神アクアの期待に答えられなかったんだから、天上に返す。」

ユウヤが折れた魔剣を頭上に掲げると、上空から白銀の光が降り注ぎ、やがて天空に消えた。

「冒険者を続けたければそうすればいい。

ただし、魔剣グラムの加護は無しだ。

そして自分勝手に各地で迷惑をかけた謝罪をできるならの話だけだな。」

話し終わると立ち上がり、銀髪の少年は仲間に向けていた鎧を着込む。

プレートメイル
全身鎧にも方形の盾にも、ヒーターシールドくつきりと女神エリスの紋章が刻まれていた。

パーティーメンバーの少女達と一塊となつて、少年はレポートで姿を消した。

「エリス、あれは、女神エリスの紋章だ。」

残された冒険者の一人が呟いた。

それを皮切りに口々に女神エリスの名を唱える声がする。

「女神エリスが遣わした白銀の使徒……か。」

ギルドマスターの呻くような一言に、その場に居たアクアが反発する。

「なによ、アイツには、しっかりこのアクア様の加護も与えてるはずなんですけど！

エリスが白銀の使徒なら、女神アクアの蒼き翼”はどうかしら？”」

「寝言は寝てから言え、この駄女神が！」

その後、アクアがカズマと口論になり、毎度のように泣かされた。

29話

テレポートで紅魔の里に戻ってきたユウヤ達。

自らの家の前で手のひらをかざすと音もなく入り口が開いた。

「いいな〜めぐみんもあれでできるの?」

「もちろんです。もう実質、夫婦ですから!」

めぐみんも慣れたもので、ねりまきがぼやいても平然とむしろ堂々と答えた。

皆でリビングに入ると、二階からクリスが下りてきた。

「やあ、クリス、お帰り。」

「ただいま、みんな。ユウヤ、初めて使ったけどやっぱり便利だねえ。」

彼女は自らの腕に装着した腕輪を嬉しそうにかざした。

「これで普通のテレポートみたいは何カ所も登録できたらなあ。ねえユウヤ、何とかならない?」

「無茶言うな。あくまでそれは緊急避難用だ。」

「ちえ〜」

「今日はこのまま解散にしよう。お前達も夕飯は、ここで済ませたらいいだろう。」

告げられたあるえとねりまきだったが、互いに頷いた後に意を決したように口を開いた。

「それなんだけど……私、身の回りの物だけ持つてここに引越そうかと思うんだけど……」

「右に同じ……だね。」

ねりまきとあるえが発言した途端、めぐみんの表情が変わった。

「認めませんよ！ クリスは、里に拠点がないから、ここに置いているのですよ。」

あなた方は二人とも立派な家があるでしょう。

夕食の話も無しです。さっさと帰ってもらおう！」

傍目にも眼が真っ赤に輝いていて興奮状態になっているのがわかる。

それを見ても詰め寄られた二人は激昂しなかった。

何処かすまなそうにしながらも平然としていた。

「悪いんだけどね、私達にも事情があるんだよ。」

「つまりは、ユウヤを好きなのが周知の事実になつてるでしょう。それでユウヤは、私達をパーティーに加えて一緒に活動してるわけじゃない？」

「はつきり言えば、私とねりまきもユウヤの嫁のあつかいなんだよ、かなり以前からね

……」

「私のお父さんや、あるえのおじいちゃんからそれらしいこと言われてるはずだよね？」
ユウヤは思考する。確かにそれらしい言葉を匂わされはした。けれど、確かに否定したはずだ。

「言葉で否定したはずとか思ってるんでしょう？」

でもね、同じ紅魔の里に住んでる男女がパーティーを組んで、一つ屋根の下で過ごしたりすればそういう目で見られるんだよ？」

「ユウヤ、私のおじいさんからね、めぐみんが誕生日を迎えたら合同で結婚式を挙げるように言われているよ。」

「私もお父さんから、言われてる。」

それに今更、ユウヤの他に貰ってくれる人はいないのよ。」

錯乱一步手前の状態のめぐみんの肩に大きな手が乗せられた。

「…確かに、あるえとねりまきに好意があつたのは確かだ。そのまま放置で外で活動してれば自然消滅だったのかもしれないが……」

めぐみんを連れ帰ってパーティーをつくる時、俺は自分の意思でお前達の手をとった。

……すまないな、めぐみん。式を挙げるときは、横にはめぐみんだけのつもりだったんだが……

そのかわり、正妻、第一夫人はめぐみんだ。

これは譲れないぞ。」

ユウヤの宣言？に対してあるえとねりまきは、神妙に頷いている。
が、クリスはニヤニヤしている。

「なんだクリス、言いたいことがあるのか？」

「別に〜」



結局、ユウヤの家での夕食の予定はキャンセルとなった。あの後すぐに、あるえの祖父とねりまきの父親に頭を下げに行つた銀髪の少年は、現在、自分の家の隣家のリビングでめぐみんの父、ひよいざぶろうに土下座していた。

「ユウヤ君、何か言うことはないのかね？」

こめかみに青筋を浮かべた父親に対してユウヤが無言で土下座しているのをめぐみんはボンヤリ眺めていた。

何か、父親が色々言つてるようだが、少年は顔を上げないままだった。

ねりまきの父親やあるえの祖父が取り成しのように口を挟んでいるが、ひよいざぶろうはますます激昂している。遂に

新しく購入したテーブルをひっくり返そうとした時、こめつこが発言した。

「姉ちゃんはどうしたいの？もう兄ちゃんのこと嫌になつたの？嫁になるのやめる？」

「待ちなさい、こめつこ。あなた、それを聞いてどうするつもりなのですか？」

何か嫌な予感がする……

「姉ちゃんにもうその気がないなら、私が兄ちゃんと結婚する!!」

めぐみんは、妹の言葉で自分が平常心を保てなくなつたのを感じた。

「ふざけるんじゃないやありませんよ。ユウヤの本当の嫁は私一人です!」

あるえ!　ねりまき!　ついでにそこでニヤニヤしてるクリスマスも! 貴女方は所

詮、二番目、三番目、つまり、その他大勢、十把一絡げですよ。

どんなときでもユウヤの一番は私、ユウヤから、告白してきたのも私です。

おこぼれに与りたいというなら、私たちの結婚式に並ぶことを許してあげようじゃないですか。

もちろん、ユウヤの隣は、私です。

理解しましたね?」

大声で叫んだめぐみんを大人達はあつけにとられていた。あるえとねりまき、クリスマスも苦笑い、そしてずっと土下座していたユウヤは後ろからめぐみんを抱き締めると、限界だったのか、少年の胸に顔を埋めて大声で泣きじやくつた。

「……さて、これからの詳しい予定だが……」

「めぐみんの誕生日は大分先だな。」

「だったら、うちの孫とお宅のねりまきちゃんも正式に婚約者ということに……」

「うちの娘が言ったように序列は守ってもらわないと……。」

「ほほう、族長の家柄でもないのにどんな序列かね?」

「兄ちゃんの隣が姉ちゃんなら、反対側の隣は、私?!」

大人達が相談する中、物騒な発言をする幼女一人。

けれど、喧騒は、夜半の訪問者によって中断された。

「どうしたアーネス、酒場のウェイトレスは終わったのか?」

「それどころじゃないからね、残り一人だったから、看板下げてあんたを探しに来たのさ
!」

走ってきたのだろう、酒場の服装はそのままに、普段は隠している角が出ている。

「驚くんじやないよ、魔王の娘が奇襲をかけてブライドルは王城が陥落したそうだよ。」

「あそこには、多数の龍騎士がいたはずじゃが?」

「手引きしたやつがいたんだろうね。応戦するための龍は主がいなくなつた一頭だけで、乗り手がないから、つかえない。それもいつのまにかいなくなつちまつたんだと
ゃ。」

突然入った凶報に対してもユウヤは逆に落ち着いていた。

「アーネス、王族の生死は?」

「リオノールとかいう小娘の死体は見つからなかったようだね。」

その場にいる全員が注目する中、少年は静かに語る。

「明日一番に族長と話したら、準備が出来次第、ブライドルに向かうぞ！」

自分を見つめてくる少女四人に無慈悲に告げる。

「これから行くのは戦場で、俺は、モンスターだけじゃなく、大量に人殺しをする。

紅魔の里を安全にするために、他国の人間を大量に殺すことになるんだ。

覚悟がなければ、この里に残れ。」

次の瞬間、四人の少女は一斉に銀髪の少年に抱きついた。

「言ったでしょう、すでに私は、ユウヤの嫁なんですよ。パートナーの行くところには、私も行きますし、あなたの敵は、私の敵なんですよ。」

「そうそう。」

「身重でもないのに、婚約者を置いていったらだめでしょう？」

「ユウヤの役に立つためにアサシンになったのにひどいな。」

めぐみん・あるえ・ねりまき・クリス、四人の少女を一人一人、見つめる。

「よし、行くぞー！」

設定2

■ ユウヤ（草薙優也）

本編主人公

母は紅魔族の長の妹であり、ゆんゆんは、いとこにあたる。

魔王軍幹部ベルディアに父親を殺されたが、後にアクセルにて討伐し、結果的に敵を討った。

実は転生者であり、手違いで紅魔族のハーフとして生まれたのであり、どうやら、彼の父親も転生者のようである。

身長 178 cm

体重 65 kg

銀髪 紅眼

年齢 15 歳

冒険者レベル 49

ギルドでの依頼はついになっており、紅魔の里でほとんど毎朝、周辺のモンスター狩りをしているため。本来なら、金銭も食料も彼一人なら、足りている。

クラス 究極戦士

習得済みスキル

● 自動回復（厳密にはスキルではなく、女神エリスの加護による能力 一分毎に体力・魔力が10%回復して負傷も少しずつ癒えていく。自分のみ）

● 全状態異常無効 ● 悪魔特攻（悪魔 ・ 魔族・アンデッドに通常より大幅に攻撃力加算

● 奇襲 ● ウエポンマスタースキル2 ● ルーンオブセイバー ● 物理耐性2

● 魔力耐性2

● 超級魔法全般 ● エンチャント全般 ● 飛行

● 聖なる唄 ● メテオストライク

● アクエリアスシャワー（女神アクア・女神エリスの加護を受けているユウヤが超級魔法により開発した破邪の呪文で降り注ぐ女神の聖水は魔に絶大な効力を発揮する）

● テレポート

装備

武器2 ブロードソード+2

防具 2 プレートメイル+2 ヒーターシールド+2

ベルディア討伐の後、廃城にて発見した武具が女神エリスの祝福により強化された物。

それぞれ、硬度プラス・軽量化がなされており、金属特有の大きな音もたたない。鎧と盾には、エリスの紋章が刻まれている。

紅魔のマント

■ ■ ■ めぐみん

父はひよいざぶろう

母はゆいゆい

魔法使いのエリート集団紅魔族において随一を名乗る天才アークウイザード。けれど、駆け出しの街では、ついにパーティーを組めずに、再会したユウヤに里に連れ戻された。ユウヤをリーダーとするパーティーにあるえ・ねりまきと共に加入、後にクリスも加わり、活動を始める。

ユウヤと師であるウォルバクの助言もあり、特に魔力制御に力を入れると共に装備を一新し、槍を使うようになる

ユウヤの正妻・第一婦人（予定）

クラス アークウイザード

冒険者レベル28

習得済みスキル

● 爆裂魔法

● 詠唱省略

● ウエポンマスタースキル1

装備

武器 ショートスピア＋１

防具 ボディアーマー＋１

●魔導の指輪（魔力をストックしておける指輪 任意に魔力を引き出せる。本人にしか使えない。魔法の発動体としても使用）

■あるえ

凶悪な胸部装甲を有する紅魔の里のアークウイザード。彼女を見るととき、男性は、必ずその胸に視線が向いてしまう。

戻って来たユウヤとパーティーを組む

ユウヤを諦めずにアタックし、祖父の後押しもありユウヤの婚約者として、既成事実化された。

クラス アークウイザード

冒険者レベル 26

習得済み魔法

●上級魔法全般・テレポート

装備

紅魔のローブ（黒）

ショートソード

魔導の腕輪（用途は同じ）

■ ■ ■ ねりまき

紅魔の里随一の酒場の娘

好きなユウヤとパーティーを組む。

めぐみん・あるえに一步も引かずに、父親の後押しでユウヤの婚約者となる。

ロングの黒髪に深紅の瞳で均整のとれた抜群のプロポーションを備えており、実は、ねりまきの外見がユウヤは一番に好んでいて、ねりまきも、それを知っているので強気になっている。

クラス アークウイザード

冒険者レベル26

習得済みスキル

● 上級魔法全般 ● ウエポンマスタースキル1

● セイクリッドハインスヒール ● ハイヒール

● ヒール

装備

武器 バトルメイス

防具 レザーアーマー+1

紅魔のマント（黒）

石化の盾（バジリスクを素材として加工された盾。

極小の魔力で敵を石化させる）

魔導の腕輪

■ クリス（エリス） オリジナル設定

アクセル郊外のエリス協会にある孤児院で育った孤児。幼少時、生死をさまよった時に、エリスに命を助けられ、精神のパイプが結ばれる。

エリスが地上で活動するときは、クリスの精神に同調する。

女神エリスはユウヤが転生するときの経緯に責任を感じており、彼を観察している内に好意が芽生えた。

クリスは事情により、盗賊として、ほとんど一人で

活動してきたが、困っているときにパーティーに誘われ、ひとつ屋根の下で寝泊まりして、共に活動して、秘密を共有して大事にされている内にユウヤに夢中になる。

クラス アサシン ●冒険者レベル71

習得済みスキル

●各種盗賊系スキル全般

● 隠密スキル（潜伏の強化版、自身のみ）

● ウエポンマスタースキル

● 会心の一撃（武器が命中した箇所が相手の急所としてカウントされる。威力も大幅に上がる。）

装備

武器 ショートソード+2

防具 ボディアーマー+1 暗殺者のブーツ（ロングブーツウイズレガー

ス）

帰還の腕輪（登録されたパーティーの拠点に帰還できる。）

兵乱の魔法戦士

30話

遙かに見えるブライドルの王城からは黒煙が上がっている。

村の青年、どこから見ても平凡な農夫に見える彼は、無気力にその黒い煙を見ていた。「ばかなことは、考えるんじゃないぞ。」

「どうやら、魔王軍は首都以外は、どうでもいいようだからな。おとなしくしてれば、わしらの前を通りすぎるじやろう。」

「村長……」

「王家も貴族どもも、皆、滅んでしまえばいいんじゃないや！ワシラが丹精込めて作った物を取り上げることにしかない。そのくせ、他から攻められたときに、守ってくれないんじゃない、なんのためにいるのかわからん。あ奴等は、害虫じゃ、魔王軍と変わらん！」

集まって来た男達も、意見は同じようで、暗い眼差しをして佇んでいた。

瓦礫と化した王城の跡地で人型の魔族に囲まれた少女が報告を聞きながら、指示を伝えていた。

「……先ず、首都の制圧は完了でよかったかしら……」

リオノール姫の行方は、まだ掴めないの？」

「……もう、死んでるんじゃないかって？」

それはどうかしら？

まあ、この後は、地方に散らばっている諸侯軍をまとめて叩いて、しまいましよう。

大丈夫よ。この国も例外なく民を虐げていたみたいだから、私達は、貴族と騎士だけを相手にすればいいだけだもの、楽なものよ。」

……アイツがこの国に来るかもですって？

アイツは気楽な冒険者よ？自分の里がチョツカイ出されなければ向かってこないはずよ。」

彼女の周りにいる側近は、主の語る「アイツ」をひどく恐れているようだ。必死に抗弁している。

「……分かっているわよ。アイツが出てきたら、作戦を放棄。直ちに撤収するわ……」

そうして、少女、魔王の娘に率いられた軍団は、瓦礫の廃墟で夜営の準備を始めるのだった。

王城から離れた森の中を一人の娘がさ迷い歩いてきた。しばらく前に一緒にいた女性とはぐれ、アチコチ千切れてボロボロになった衣服をまとい、裸足でノロノロ歩いている。

突然襲来した魔王軍によつて首都は焼け野原になった。城もあつけなく陥落し、彼女の両親も目の前で殺された。侍女に手を引かれ夢中で逃げ出すも、道行くものも民も彼女達を助けてはくれなかった。

「普段、贅沢して威張つてんなら、こういう時に役に立てよ！」

「あたしらを守ってくれないんなら、王様なんていらなんだよ！」

「早く、犠牲になつて俺たちを救ってくれよ？」

「死ぬ前に、俺達を楽しませてくれよ！」

それまで自分を無視して逃げていた者と違い、一団の男達は、欲望の目を向けて迫ってきた。

執拗に迫ってくる集団に金品をばらまき必死に逃げる途中、一緒にいた侍女ともはぐれてしまった。

「もう歩けない……お父様もお母様も死んでしまったわ……私もこれいじようは……。あの人にもう一度会いたかったな……」

倒れて意識を失った王家の最後の一人を上空を偵察していたモンスターが集団が発見して舞い降りてきた。

魔王軍の奇襲により、陥落した王都の奪還のため各地方の貴族は諸侯軍を結成。

募兵をしたが、日頃の圧政が祟り、兵の集まりははかばかしくなかった。

それどころか、むりやり食料を徴発して進軍した領地は、反って反乱を招いていた。「恨み重なるくそ領主が帰ってこれねえように何もかも奪っちゃまえー」

どの領地も同様な具合だった。各貴族の拠点たる城は、主力が出払った隙におとされ、その家族は留守の部隊共々皆殺しにされた。

荒れ狂う反乱の影には、扇動していた魔属の姿があった。

ブライドル全土が戦火に包まれているとき、国境を越えて一団がやって来た。

銀髪をなびかせた少年を先頭にした、深紅の瞳の集団が後ろにてんでに雑多な装備に包まれた傭兵を引き連れて、兵乱の地を訪れた。